



東京ライオンズクラブ



1982年1月、日本ライオンズ創立記念碑前にて東京²⁷会員記念写真（パレスホテル）



東京^{クラ}小袖バナー

三十年史

朝吹英一

1952—1982

東京ライオンズクラブ三十年史 目次

日本ライオンズ創設記念碑前 記念写真	カラー口絵
東京クラブ小袖バナー	カラー口絵
30周年記念例会	4
30年一語	11
座談会 ライオニズムの源流をさぐる	49
親クラブに贈る言葉	59
資料編・30年の記録	71
役員 例会 アクティビティ	73
会員名簿 物故者 退会者	93
地区関係役員一覧	97
ライオン誌掲出記事一覧	101
振り返る奉仕活動の跡	102
事務局の変遷	103
編集後記	104

東京ライオンズクラブ30周年記念例会 プログラム

日 時 1982年3月25日
午前11時30分開会
場 所 帝国ホテル 富士の間

司 会 幹 事 一 色 浩

東京ライオンズクラブ30年の歩み

開会宣言・ゴング

国歌・ライオンズ ヒム

物故ライオンズ追悼

開 会 の 辞

来 賓 紹 介

会 長 挨 拶

祝 辞

石川夫人に花束贈呈

表 彰

チャーターメンバー

30年在籍会員

30年皆出席会員

特別功労者

チャーターメンバースピーチ

記 念 事 業 発 表

休 憩 (10分)

祝 宴
乾 杯

音楽ショー “東京ライオンズクラブ30周年を祝う”

歌

ル

ピアノ

30周年記念委員長 岡 村 武

副 幹 事 羽 鳥 藤 雄

会 長 朝 吹 英 一

330-A 地区ガバナー 高 橋 勝

浜 本 正 勝

30周年記念委員長 岡 村 武

武 見 太 郎

島 田 祐 子

福 井 成 子

木 村 富 美

また会う日まで

閉会宣言・ゴング



ナレーター 片 岡 みどり

エレクトーン 吉 田 新 一



開会の辞

岡村 武

当クラブは、我が国ライオンズクラブの第一陣を承って、首都東京に孤々の声を上げてから、年輪を刻むこと、いつしか三十を数えるに至りました。つきましては、本日を卜して、ここに記念式典を挙行することに相成りました。

人で申せば而立、明けて三十歳のめでたい春を迎えた次第でございますから、本来ならば、内外の賓客数多のご光来を仰ぎまして、厳かに式典なり、晴れやかな祝宴なりを催すべきところですが、昨秋、我が国ライオンズの総意を結集して、日本ライオンズ三十年の光輝ある歴史を祝う盛大な式典が、既に執り行われておりますので、当クラブといたしましては、ほんの内輪で、心ばかりの祝賀の席を設けるにとどめることにいたしました次第でございます。

従いまして、本日の祝典は、例会を兼ね、万端極めて簡素なしつらえて、何ら格別の取り設けもございません。しかしながら私どもは、これを名より実、満腔の喜びとことほぎをこめた、楽しく意義深い集いといえたいと存じます。

かような次第で、本席には、記念事業の実現に一方ならぬご協力を賜りましたご来賓、平素何かとご指導、ご懇情をかたじけなくいたしております

する各位、また当クラブと格別ゆかりの深いクラブの方々のみをお招き申し上げたのでございます。各位におかれましては、何とぞ本席の趣意並びに私どもの微意お汲み取りの上、祝福を賜り、はばかりながら我々と喜びを共にしつつ、ゆるゆるとお過ごし頂けるならば望外の幸せに存じます。なお設立30周年を記念いたしまして、三つの事業の実施を決定いたしました。

すなわち、日本赤十字社に血液運搬車一両の寄贈、東京都中央区に花時計一基の寄贈、記念事業予算中一千万円を割り、その果実をもって、社会



奉仕の適切な事業に随時充当するための基金の設定、この三つであります。

右のうち血液運搬車は、既に広尾血液センターに配備され、病める人々の貴重な生命を救うため、日夜を分かたぬ活動を開始いたしております。

花時計については、中央区格別のご配慮により、目下折角再開発、整備中の大東京の中心、銀座は数寄屋橋公園の新交番わきに設置して頂くことになりました。願ってもない日本一の場所柄と存じます。四季絶ゆることなく目もあやな色とりどり



の花に飾られたあでやかなその姿は、不日、装いも新たな新公園の一隅にお目見えいたし、ささやかながら、さわやかな憩いの場として都民の皆様にご親しまれることに相成ることでしょう。

後々まで伝えるモニュメントとしては、つつましいものではありませんが、これをよすがに片鱗なりともライオニズムを象徴するシンボルともなればと念じております。

会長挨拶

朝吹 英一

東京ライオンズクラブは、本日ここに結成30周年の記念式典を挙げることとなりました。

今から三十年前、すなわち昭和二十七年ころに思いを巡らしますと、戦争の傷跡は深く、生々しく人々の心に残っており、我が国はいまだ世界に孤立していたのであります。

この時、太平洋戦争の激戦場となつて、大きな痛手を受けたワイリピンには、当然のことながら、日本に対する悪感情が根強く残っていたのでありましたが、そのマニラ・ライオンズクラブでは、もう戦いは終わったのだ。今後は前向きに生きなければならぬ。同じ東洋の国日本に、恩讐を乗り越えて手を差し伸べ、アジアの、ひいては世界の平和に貢献しよう。それには寛容と友愛をモットーとするライオニズムが最も適当である、との

考えから、東京ライオンズクラブを作るよう呼びかけられたのであります。

その好意に応えるべく、故石川欣一ライオンを中心に、広く各界の有識者を集めて、日本で最初のライオンズクラブとして、東京クラブが誕生したのであります。

以来今日までの三十年間に東京クラブは、ライオンズ国際協会本部を初め、地区ガバナー、キャ



ピネット、ゾーンなどの友好クラブ、そして全国に散在する十九に及ぶ子クラブの各位のご指導とご協力の下、当クラブのチャーター・メンバー、歴代会長以下会員全員の努力によって、今日の姿があることを深く肝に銘じております。

本日の式典を迎えるに当たっては、今までに皆様から寄せられたご厚情を胸に、初心に帰ってラ

石川夫人に花束贈呈



イオニズムの高揚を計り、ウィ・サーブの精神をもって社会福祉に奉仕しようと、会員一同、誓いを新たにしております。

ご来賓の皆様には倍旧のご支援をお願いすると共に、会員各位のご協力を期待して、私のごあいさつといたします。

チャーター・メンバー

スピーチ

浜本 正勝

当クラブ結成後わずか十一年で、日本は世界第二のライオンズ王国になりました。この驚くべき成長の原動力が何であつたかを、ここで改めて究明し、再確認することは、本日の式典にとつてまことにふさわしく、また極めて有意義であると私は考えます。

そこで、我々の究明に役立つと思われまふ言葉を紹介いたします。

“Ask not what your country can do for you.
Ask what you can do for your country.”

このアメリカ合衆国三十五代大統領ジョン・F・イッジェラルド・ケネディの就任演説の一節を、明治の文豪坪内逍遙博士のシェクスピア流に翻訳いたしますと、こうなります。

「国民諸君、吾人はすべからず、国は何を施し、いかなる恩恵を与えてくれるかと訊問してはならない。あえて自問自答すべきは、我いかにせ

ば国に貢献できるや、である」。

この訳文の中の「国民諸君」を日本のライオンズの皆さんと置き換え、「国」を所属のライオンズクラブと解釈して、「国に貢献なし得るや」を、地域社会に奉仕できるかと読み替えますと、これすなわち、我々の求めておるライオンズ奉仕精神の原点であり、我々ライオンズの毎日の奉仕活動の好ましきガイドラインである、と私は信じます。

社会通念、個人の価値観が大きく変わる二十一世紀に備えて、東京ライオンズクラブは、昭和二けた生まれの髪のふさふさした若獅子を先頭に、



やる気いっぱいではありませんが、いささかお疲れ様の明治三十年代に生まれたモナーク・ライオンズをしんがりに従え、人類愛を基幹とするライオンズ奉仕精神の原点を大事に守り、ウィ・サーブの合言葉をお互いにかかけあい、お互いに励ましなが、地域社会、それを草の根で、当世の風潮である金さえ出せば事足れりとする考えは潔しとしないで、文字通り献身的な、真心のこもった、人類愛の満ちる奉仕を引き続き精進する決意は、当クラブの総意であることを、ここでクラブの歴史と名譽と誇りをかけて、宣誓いたします。



千葉小枝子さんに花束贈呈



物故ライオンズ追悼

音楽ショー

歌 島田祐子さん

歌 福井成子さん

ピアノ 木村富美さん

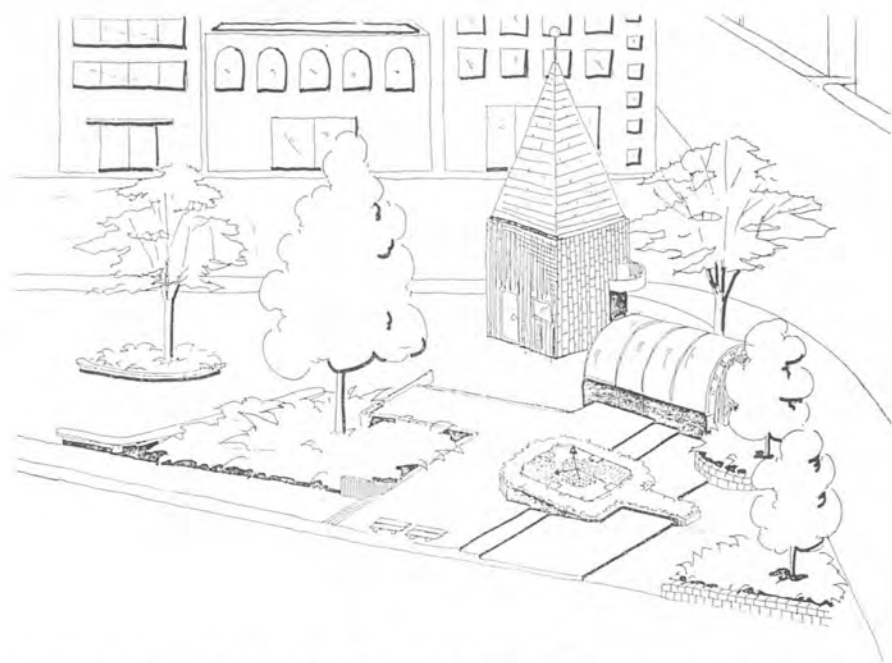


乾杯する 羽 武見太郎

30周年記念事業



血液運搬車 1 台 日本赤十字社へ贈呈



花時計を数寄屋橋公園に設置 中央区へ贈呈 (完成予想図)



1981年10月8日、皇太子殿下、同妃殿下を迎え、日本武道館で行われた30周年記念全国大会

1958年、浜本正勝会長の時、ニュージャージー州
ニューワークのクラブから贈られたゴング



初代会長彩石川欣一から贈られた思い出の帽子を手に、彩古川正重

30 年 一 語



二代目ライオン



網田 邦彦

中学生になったばかりの私にとって、「リバティ・インテリジェンス・アワード・ネーションズ・セフティ」という英語の頭文字のつづりがライオンズになるということが、何よりも新鮮で印象的だった。父が京都に入会させて頂いた時が、私にとってのライオンズとの出会いであった。以来、三十年近く経った今日、自分自身がライオンになっている月日の早さに、驚かされる。

社会とのつながりは、一人一人さまざまな形があるが、私のような若輩にとっては、学校を卒えて以来、新しいつながりを見いだすことは大変に難しいものである。会社という組織とかかわるようになって、仕事を通じての交際が始まり、新しい世界が開けてきたわけだが、限られた業界の限られた組織の中での交友には、どうしても限界がある。

このような時に、私自身を最年少として、祖父にもあたる年齢の先輩、そしてさまざまな業界で活躍中、あるいは活躍された方々の中に、同じメンバーの一員として加えて頂けるような組織が、ほかにあるだろうか。高邁なライオンズの目的に沿った活動の以前に、自らがライオンと呼ばれるにふさわしい人となるべく、全力をあげねばならない。育った土地である京都を離れた私にとって、数多くの先輩に導いて頂けるこのクラブこそ、新しい、しかも大切な社会とのつながりである。

入会以来、早くも四年が過ぎた。毎月二度の例会に出席するだけが精一杯の情けないライオンだが、社会に一步を踏み出して日の浅い私のような者は、まだまだ経済社

会の中で存在を続けていくための努力に、大部分の時間を過ごさねばならない。二代目ライオンであると共に、二代目経営者でもある私にとっては、共に自分のスタイルを確立することが何よりも難題である。

自己の職業に誇りをもち、その事業を成功させ、事業を通じて社会に奉仕するというライオンズ精神は、自らの行動を律する大変重要な基盤である。たとえ隔週一度とはいえ、この精神を守って立派な社会生活を送ってこられた諸先輩の様子を拝見し、お話を伺う例会は、何よりも有意義な一時である。

二代目という縁もあって、若くしてメンバーに加えて頂いた以上は、ライオンとしての生涯ペースを考え、あらゆる方面からクラブのアクティビティに参加させて頂き、そして三代目に継ぐことができれば、何と素晴らしいことだろうか。長い、そして永遠に続くライオンズ活動の中、30周年という節目に発行される記念史の中のこの小文を、何十年か先に自分自身で、あるいは三代目が、読み返すチャンスを楽しみにペンを置かせて頂く。

クラブから得たもの



朝吹 英一

十七年前の春、私は戦前から音楽を通じて懇意だったミキモト社長の本間利章氏(当時東京在籍)から、ライオンズクラブのことをいろいろと聞き、私もお仲間に入れて頂きたいと申し出た。時の会長は羽田田幸雄で、会員委員会や理事会も無事パスして、その年の五月に、本間をスポンサーとして入会させて頂いた。

本間から、事務局に千葉さんという女の方がおられるから、何でも聞くとよいと

教えられ、例会場だった帝國ホテルのスカイルームの入口で初めて千葉さんに会ったが、とても感じのいい方で、いろいろと親切にして下さった。これがそれからずっと今日まで、お世話になっていく千葉さんとの出会いだった。

入会式後の自己紹介で、「私は千代田組の会長をしておりますが、組の会長と言っても暴力団ではございませんから、ご安心下さい」と言うのと爆笑が起こり、後で羽田口果から、「あれは傑作で、印象に残った」と言われた。

最初の例会で、緊張してやや固くなっていると、テール・ツイスターの坂本正が登場し、「この数字は何でしょう?」と、私の会社の電話番号を切れ目なしに羅列された。私はすぐそれと気付いたが、新入会員の遠慮もあって黙っていると、「これは今度入った朝吹の会社の電話番号です。自分の会社の番号を知らないようでは困ります」とファインを科せられた。これが私のファインの取られ初めだった。

そうこうしているうちに、クラブの雰囲気にも慣れ、例会がとても楽しく、閉会の時に歌う「また会う日まで」の美しいメロディを口ずさみながら、足取りも軽く会社へ帰ったものだった。その年のクリスマスには、早速、木琴をやれということになり、門下の音大生の女性との二重奏で、カルメンをひいた。大変、皆さんが喜んで下さり、クリスマス委員長の笠上田常隆からも、特にねぎらいのお言葉を頂いたのを覚えている。

それから五年ほど後、私が幹事の時のクリスマスに、今度は富士の間でソロを演奏し、またその間、島田祐子さん(当時は旧姓の遠藤さん)の協力を得て、明治大正歌曲集を編曲、演奏し、ご好評を得た。このように、私の音楽が多少でもクラブのお役に立ったことは、うれしいことであり、また幸せなことである。

私はライオンズクラブに入会して本当によかったと思っているが、その理由を要約すると、

一、各界の有識者や、各業界の方々と懇意になれたこと

二、例会ごとに専門家の方々の有益な話を聞き、知識を広めることができたこと

三、自分一人の力では到底できない福祉への協力が、クラブを通じてできたことで、

スズラン給食、インド救済、皇居前の植樹、武道館の時計、献血のお手伝い、

育英資金の供与、そして今回の30周年記念の血液運搬車の献納と数寄屋橋公園の

花時計の寄贈等、これらの有意義なことによって社会のお役に立てたこと

四、クラブでいろいろな役職をやらせて頂き、今でもあまり得意ではないが、人前でしゃべることの勉強になり、会議の進め方などでも学ぶことが多くあったこと

五、会社での付き合いは、社内の人あるいは仕事の関係先という極めて狭い範囲に止まるが、クラブに入っていわゆる世間が広がったこと

六、例会の前後には大きな声でライオンズ・ソングを歌い、食事中には歌とピアノの生演奏を奏しまして頂くこと

などである。

今後私は、健康で事情が許す限り、会員を続けさせて頂きたいと思っている。クラブのますますの発展を祈り、皆様の変わらぬ交誼をお願いして、ペンを置く。

末席のライオン



渥美 節夫

一クラスの生徒の中には、目立つ生徒もあれば目立たない生徒もいる。目立ちたいとする子もいれば、そうでない子もいる。目立たないことに満足し、それが自分の本来の姿勢であると安住している子もいる。

ライオンズクラブでも、メンバーの間にこれに似た心理と態度があるのは当然だが、それでお互いのそうした心理と行動を、以心伝心に認め合う自然のハーモニーが存在していると思う。

それぞれ異なった自意識で相互に交歓しながら、他のメンバーの意向を忖度し受け止めるという、落ち着いた暖かな雰囲気醸成されている。これは、多くの先賢によ

って積み重ねられた歴史と伝統が作り出した結果であろう。ここかしこで見られる人間集団の多くは、このようにいくまい。もともと、お互い東京のメンバーであるという共通の自覚によるものと思う。

私もかれこれ十年近くのメンバー生活を送ってきたが、私自身、終始アクティブなメンバーではない。いわば受身型、吸収型であると思っている。吸収型とは、メンバーはもろんのこと、ゲスト・スピーカーなどからそれぞれの人柄、考え方、知恵、話題など、何物かを吸収させて頂くタイプを言うのである。

仕事の関係で、ホーム・クラブの例会出席率がおおむね半分、後の半分はメイク・アップという状態だから、クラブの仕事をお手伝いしたり、他のメンバーのお世話をするという立場からはほど遠い。逆に、他のメンバーに世話を焼かせている人物であるので、文字通り、末席を汚すメンバーということになる。しかし私としては、想像もつかない役員の方々の努力と献身に感銘しながら、極めて安らかに、かつ屈託もなく、クラブ・ライフを過ごしている。

恐らくはなお当分の間は、こんな有り難い状態が続くのではないかと、反面、内心じくじたるものがある。ひつきょう、スポンサーである三永井賢城を初め、すべてのメンバーの方々のお陰と心から感謝しているところなのである。

ライオンズと私



藤間 豊

東京のメンバーに入れて頂いて、早くも十五年を越した。当然、役員も務め、大いに活動しておらねばならぬですが、私の職業がら（歌舞伎俳優）、毎月の舞台出演の

ため時間に制限され、なかなか皆様と一緒の活動もできず、さりとて事務関係は全くの不得手、役立たずのメンバーとして大いに恥じる次第である。

せめてお役に立つ唯一の方法は、出演興行を利用して観劇会等を組み、団体割引の薄利を得て、資金の一部に加えて頂くところである。俳優は自分自身の体をフルに使って仕事をしている。したがって、たとえわずかな資金でも心はこもっている、と自負している。

歌手のように一般受けをするようなことはできないので、その方法に難しいところもあろう。歌舞伎役者は、何でもやるくせに、何もできぬのが実際である。しかし、何らかの方法でこの体を利用して頂き、クラブ活動の一端にさせて頂けたらば幸甚で、また、常にその覚悟のあることをここにお誓いする。

創生期の忘れ得ぬこと



福岡 陽道

♪黒川直也——ホノルル・ライオンズクラブの終身会員だった氏は、明治二十三年千葉に生を享けられ、十五歳の時に勇躍ハワイに渡り、昭和三十七年日本の国籍を回復された。昭和五十三年七月、京都・山科で九十二歳の天寿を静かに閉じられた。東京例会には何遍か出席され、講演もお願いしている。関西の地区大会では特別講演者にもなられた。

ライオンズクラブが一九一七年、シカゴに創設されてから十二年間、クラブの会員は白人に限られていた。たまたま一九二五年、ホノルルに創立に当たり、この条項を削除することは不可能に近かったが、遂に成功されたのである。当時の米国の排日は

熾烈を極めたが、施行中の排日法の提案者だったジェロブ氏や、排日新聞社のラッチ氏等と直接面談されて、排日の病巣を解明された。翌年の国際協会第10回サンフランシスコ年次大会、参加者一万人の議場では、一票の反対もなく全員が賛成して、人種差別条項削除が可決されるという奇蹟が起こって、今日、世界第一の国際奉仕団体となる端緒となったのである。

三十年前、五十六人の東京が日本の第一号となって以来、今は十四万三千人の会員を擁して、全国二千五百余のクラブ数に発展している。全世界会員数の一割余となり、百三十万世界人の長として、国際会長、野村上薫が統裁するまでになった。国際大会も二度まで、東京で開催したライオンズ大國となっている。

共同募金が集めた昨年の浄財は約百八十五億円。ライオンズが集めた活動資金は六十三億円であり、三十年前に年間やっと一万円を集め得てから今日まで、社会に奉仕した浄財総額は五百五億円となっている。金銭のほかに労働奉仕は、日本の同胞のみならず、海外にも捧げられてきた。

一灯が万灯を招いたもの——小中高生たちの寄付を含んだ日本全国からの浄財は、インド救済事業の確立となり、設立十年目にはインド政府に技術も設備も無条件で移譲され、全世界に輝く日本の偉業を達成した。この事業に一家をあげて打ち込まれた野崎崎松博士は、熊本県立ライオン療養所菊池恵楓園の園長だった。創業十三年目に、センターのあるアグラの近くで起きた日航機墜落事故で亡くなられた。昭和四十七年、遺体は救済センターの近くに積まれた薪山の悲しい野辺送りとなった。これを見守った職員のほかに、生の喜びをもたらした多数のインド人の囁きの声に、「ドクター・ミヤザキ、サヨウナラ」が聞こえたと言われている。

講談社から出版された博士生前の手記『ぼだい樹の木陰で』には、感銘の文字がつけられており、この印税は、センターの援助資金になっている。この事業の企画や運営の功労者は、我々のお仲間である故・上田常隆と豊田治助の両ライオンである。

ここまでに発展した日本のライオンズは、前記黒川の原動力があつてのことである。黒川は、ディキンソン大学在学中から卒業後の二年間、北米各地で日米提携の要を説いて回り、一九二二―二六年の五年間は、ホノルルに寄港した日本海軍練習艦隊司令長官だった小林、百武、中村、野村、四提督の通訳、広報に協力されている。

その後、日米開戦まで続々と渡米した日米友好使、加藤咄堂、小崎弘道、大谷尊有、西田天香（一燈園主）、米窪太刀雄（社会党）にも公式通訳となり、松岡洋右や賀川豊彦氏の講演集英訳者ともなり、祖国のために尽くされた。石川千代松博士、吉岡彌生女医、那須皓博士（元駐印大使、アジア救済協会初代理事長となって、ライオンズとの奇しき縁につながる人）等も、釜黒川に援けられた人々である。

一九三六年に設立された日米平和奨学会館の委員を十四年間勤められた時は、新渡部稲造、大隅重信、海老名弾正氏の右腕ともなれた。米国リチャード財団が、京都・梨ノ木町に設営した俗称同志社ハワイ寮は、日米留学生交換の友好機構で、鮎沢巖（元キリスト教大学教授、ゼネパ国際連盟労働事務局出向）、柏木早人（上州安中市新島学院長）の両氏は、この恩恵にあずかった人々である。

一九三六年以来、このハワイ寮管理者として留日中、日米開戦となり、米国旅券は没収され三カ年の軟禁。その後、進駐軍は六カ年間顧問に委嘱、占領政策の緩和に努力をされた。一九六一年十月、M・バック氏引卒の日本宗教視察団帰国時には、十六巻に及ぶ日本紹介映画を持ち帰らせ、米国各地で披露させた。

この数々の功績を無視した日本政府に、叙勲を認めさせるため、故郷上田常隆は毎日新聞社を通じて推進されたが、受勲者の居住地の蛸川虎三・京都知事は、申請に必要な推薦状を書かないばかりか、自らは国民の血税何億円という退職金を手にして、今も日本製社会主義理念に浸っている。

この運動推進には、尼崎の故郷高島三度も私と共に協力されたが、このお二人のことは忘れられないことである。

東京ライオンズ賛歌



古田 稔

東京の三十年間の歩みは、すなわち日本におけるライオンズ活動の歴史そのものであり、私は今なお活躍を続けておられるチャーター・メンバーの方々に、心からの敬意を抱いている。

講和が成立して半年後に、国際社会活動の仲間入りを実施したことは、今日の我々に想像できない種々のご苦労があったと思う。その意義はまことに大きいもので、日本の社会を世界に開いた点にあった。

社会奉仕と友愛は、ライオニズムのモットーと唱えられ、献血運動に参加していろいろ教えられることが多かった。例会ではあまり目立たぬ感じのライオンが、実に積極果敢に街行く人々に呼びかける実践力、その真摯な叫びに呼応するかのような若者たちの献血協力。いずれも、非常に感銘を受けた。一見、軽薄なスタイルの現代の若者に、心の奥からのヒューマニズム実践を誘導するライオニズム、その一端に触れた貴重な体験である。

友愛について、東京は恐らく満点であろう。特に、クリスマスパーティーの準備と運営に奉仕される委員の姿は、印象深い。出席し、参加し、実践することがライオンズの真の姿であることが、ようやく二年経って分かってきた私だが、会社の仕事で容赦なくライオンズの時間を圧殺する現状を、いかんともなし得ない。

ライオン・エレジーを、いつの日にかヒムに変換できるかと、ひそかに思いをめぐらしている今日このころである。

老犬の駄弁



長谷部照正

私は一九五六年一月、羽永井賢城に誘われて、一緒に東京^マに入会した。スポンサーは故・羽塩原だった。その当時、私の職場は茅場町にあったので、八重洲口のホテル国際観光の例会場は、近くとても便利だった。

さて入会したものの、いったいライオンズクラブとはどういうものか、なかなか分からなかった。しかし、例会ごとに活躍しておられた今は亡き方たちも含め、「お偉方」たちがとても熱心で、例会の雰囲気もよく、何となく魅力的な集会だった。

一九五九年六月、私は生産性本部のチームで、米国から欧州にかけ八十日余の調査旅行をした。その機会に、六月十七日、シカゴの湖畔にあるライオンズクラブの本部を訪問した。本部の人たちはとても親切で、オフィスの中をあちこち案内してくれた。私の姓名と若干のデータを刻んである名刺型の金属板を見せてくれたりした（今は磁気テープになっているかも知れないが、帰りに、本部のとても粋なバナーをもった。

ニューヨークに着いたのは六月二十六日だった。翌朝、ホテルのロビーに降りて行くと、さあ驚いた。絨緞の上に、奇妙な格好をした数十人の人がじかに座っていて、中には帽子の上に生きた本物の小鳥を結びつけている人たちもいる。気がつく、玄関の傍にまるで西部劇に出てくるような古風な荷馬車が停めてあり、馬車の上には、これも本物の羊や鶏や兎が繫いである。この人たちがライオンズだということは、すぐに分かった。

その年、ちょうどライオンズ国際大会がニューヨークで開催されており、この人たちはどうやら米国の地方都市のライオンズらしく、これから行われる五番街のパレードに参加するため、勢ぞろいしていたらしいのである。その当時、私はまだクラブの経歴も浅く、ライオンズについてよく分からないながら、今から思えばやや狭い教条主義的な見解をもっており、この人たちの茶目氣と洒落氣の入りまじった、あまりにも天真爛漫な雰囲気は接して、すっかり戸惑い、どうも近寄り難いな、というのがこの時の偽りのない感じだった。

ところで一九六二年、六三年の二年間、私はニューヨークに駐在したが、とても多忙だったこともあり、とうとうその地のクラブに入会する機会を失ってしまった。一九六四年、帰京した途端、また羽永井に勧められ東京^マに再入会させて頂いた。

それからでも、もう十八年も経った。しかしこの間の初めの七、八年は、どうもあまり出席率はよくなかった。その理由の一つは、仕事の関係で例会を欠席がちなことと、救済策としてのメーク・アップ制度の利用が、まことに苦手だったということがある。その後、今から十年くらい前から勤務が比較的楽になったし、また現在「お勤め」から完全に解放されたので、どうやら出席率だけはようになった。

とは言うものの、例会ごとに皆で歌っているライオンズ・ヒムの歌詞（その中には「戦の魔手」「命と名誉と富かけて」など、防衛論争の熾烈な昨今、強い迫真力をもっているものもあるが、それらの歌詞全体の中に、まことに見事に滲み出ているライオンズクラブの精神。さて、それらの精神が少しでも実行できているのかと反問されると、いやはや、まったくお恥ずかしい次第で、とてもまだまだ「獅子」にはなり切っておらず、いたすらに情眼をむさぼっている「老犬」というのが、いいところである。

人間関係そのもの



羽鳥 藤雄

私にとってライオンスクラブは、スポンサーとの人間関係において生まれた。いかなるクラブもメンバーも、スポンサーなしで存在はあり得ない。これはライオンズの原形であり、人間関係そのものがまさにクラブであると言える。

私は東京^アに入会し、多くの人を知った。当クラブのほとんどのメンバーが年長であり、それぞれの社会において立派な業績と地位に輝き、ライオン生活も長い人たちである。それでいて、高ぶらずおごらず、いつもにこやかに堂々としており、ご年配であるのに少しも年齢を感じさせないような、素晴らしいライオンが多い。まさに、ライオンズを体得した人々と言える。

今回の30周年記念に際してのレポートは、何となくライオン生活が続けている自分を振り返るよい機会でもあった。

私の考えるライオンとは、キリスト教の愛ほど純粹でなくとも、仏教の慈悲ほど強くまどやかでなくとも、まことに日本人的発想であるが、「愛と慈悲の間の思いやり」を豊かに持つことのできる人が、ライオンと呼ばれるのであると考える。この思いやりが大変難しいもので、甘過ぎてても峻烈過ぎててもいけない。適度な、バランスのとれたものでなくてはならない。ライオンズは、単に奉仕やアクティビティなる行為だけでは、表現が全うされていないと考える。

ライオンズとは、人間性の高揚につながるライオン生活が肝要である、と思う。他人への思いやりを持つ人々が、例会による集まりを重ねることで、少しずつ、いつ

の間にか自己のうちになるものが醸成し、結果として他により形で波及していくことを理想と考える。

ライオンズのメンバーの存在は、他から見ても好ましい人物像として映るものでなければならぬ。例会場にいる時だけ、メンバー同志の集まりの時のみがライオンであってはならない。家庭にあっても職場にあっても、温かい微笑や、他への思いやりのある人物としての存在でなければならぬ。当クラブの多くのライオンの態度や考え方は、浅学非才の私を、少しずつ本当のライオンに育てていくようである。

以上のような私なりの理念と、東京^アの一メンバーである誇りを持て続けていく。それが人間として必要なものである、と自負しながら。

不思議なご縁



平賀 孝

私のライオンズとのご縁を申し上げる時、第一勧銀の先輩、島原健一氏のお名前を落とすわけにいかない。

島原さんは、一九五二年より第一銀行の初代駐在員事務所長として、ライオンズクラブ国際協会本部のある米国シカゴに勤務された。当時はまだ日本の為替管理の厳しかった時代で、島原さんは財務委員の齋岡村武のご依頼もあり、発足間もない日本ライオンズの会費送金のごことで、何回となくミシガン通りの本部に足を運ばれた。帰国後、外国部長となられた島原さんは、それがご縁で齋岡村のご推薦により、東京^アに入会された。

そのころ第一銀行本店に在勤した私は、島原さんのご指示により、シカゴ本部との

連絡のことで、野岡村ほか日本ライオンズの事務局の方々とともに面識を頂くこととなった。

島原さんは銀行の役員退任後、大成火災の副社長としても長く東京の一人として活躍されたが、第一勧銀のほうも、島原さんの後も国際業務の関係者が引き続いてメンバーにして頂いており、現在は今井勇常務が出席しておられる。

一九六三年、島原さんより四代目の所長としてシカゴに赴任した私は、時の本部会計、ウィルソン氏のご好意でシカゴ・セントラルに入会することができた。クラブ例会はそのころ、市内のイリノイ・アスレチッククラブで開かれていた。例会では、「国旗に対する誓い」に次いで国歌やライオンズ・ヒムが歌われ、次いで毎回、会員の自己紹介があった。これには多少コマースシャルを入れることも許されたが、必ずファーストネームを使うことから、私も「テリー」というニックネームを頂戴することとなった。

このクラブでのクリスマス・パーティやアウティングの交遊も懐かしい思い出であるし、またこの間、トロントやロサンゼルスで開催された国際大会に参加し、野大原や故郷迫水など日本代表の方々にお目にかかることができ、お陰様で私のライオンズムへの理解の度合いも深まっていた。

シカゴ在勤二年でニューヨークに転任となり、ニューヨーク・ウォールストリートに転じた。ファーストネームで呼び合うと、不思議に親愛の情がわき、ビジネスも円滑にはかどるような雰囲気となる。シカゴやニューヨークの米銀関係者とも、日本的神経からはいささかキザではあったが、「ハイ、ルー」、「ハイ、テリー」という調子で話し合い、同業者の会などでも応用させてもらった。

その後さらに、東京、ロンドン、ニューヨーク、東京、名古屋と、あわただしい転任の生活が続いたため、ライオンズとの縁は東京での短期の間にとどまってしまったが、奇しくも三年前、島原さんの後を承って大成火災に入社し、東京に復帰を許されることとなった。

東京のスポンサーであるマニラのふるふるのふるふるは、その昔、私も参加して九死に一生を得た太平洋戦争中の激戦地、多数の戦友の眠るところとして、忘れることのできない土地柄でもある。ライオンズの奉仕活動については、国によりまたクラブ

により多少の相違はあっても、その心であるライオンズムは変わらないであろう。私も職業人としての数々の遍歴の後に、不思議な縁でよき先達、よき友に恵まれ、由緒ある東京に未永くお世話になることができる幸福を、今さらながらかみしめている次第である。

日本最初のパレード



樋口 果

一九五七年、第三回地区年次大会が帝国ホテルで開催された時、入会してまだ日も浅いの、温厚で寡黙な大会委員長三崎友一の補佐役として、上京してくる数多くの会員の受付から会場の設備、および警察署へのあいさつなど、もろもろのお手伝いをした。そのことが、ライオンズというものを認識するためにも貴重な体験であったし、その体験が、一九六九年第52回世界大会が東京で開催された時、大会パレード部会のお手伝いをするのに、大いに役立ったことが回想される。

一九六七年度の東京会長として在任中は、世界大会東京誘致で多忙を極め、次期会長野井忠博と共に武道館の交渉、皇居参観等、その準備に忙殺された。

その上、パレード協力部会の委員長に任命され、ダラス大会視察のため渡米した。かかる世界的なコンベンションが日本で挙行されるのは有史以来のことなので、帰国後、早速、警視庁へ出頭し、パレード・コースについて再三交渉し協議を重ねたことが、あたかも昨日のように脳裏によみがえってくる。

パトン・トワラー、バンド、フロートを交じえて、総勢一万人に近いパレードになると説明すると、警視庁の担当官には全く新しい催しなので、このような大部隊の集

台、解散の場所がなかなか決まらない。パレード・コースも日比谷通り、三宅坂、青山通り、と二転三転して結論を得ない。それに、当時激増する過激派学生がゲバ棒騒動で、デモに関する「行進は四列縦隊、見物人は歩道橋へ上らないこと、幅広い横幕や長い旗ざおはいけない」などの規定はあっても、パレードに関する規定がない。

今度の大会は加盟各国の相互親睦のためのお祭りで、パレードはその行事の一つだと説明しても、すぐに、デモみたいなものと言う。警備部長、交通部長にダラスで見てきた模様を詳しく説明しても、なかなか納得されず困惑したものである。大会開催日も目前に迫っているのに、会議は重なるが結論を得ない。

この経緯を、早くから打ち合わせに来日しているシカゴ本部の大会役員に話したら、「そんなに日本の規則が難しいなら、外国のライオンズはパレードをボイコットせざるを得ない」と言う。外国のライオンズは、このために何カ月も前から準備しているし、またパレード当日に羽田空港へ到着する者もある。今から日本の規則を伝えるすべがないではないか、と言う。

日本側だけで五、六千人は集まるという腹積もりがあったから、「万一の場合は日本のライオンズだけで立派にやってみせる」と、たんかを切ったようなこともあった。結局、迫水大会委員長に出馬を願って、秦野警視総監との主催会談で、ようやく開催の運びとなったのである。

集合場所は代々木公園、パレード・コースは明治神宮表参道から青山通り、解散地は神宮外苑と決まった。集合、行進の整理および解散等は最寄りのライオンズクラブ、および渋谷、赤坂、四谷の警察署、消防署にお願いした。

いざ当日になってふたを開けてみると、さしもの大部隊も秩序整然と、バンドに誘導されて青山通りを行進した。国々を代表するクラブのカラフルな集団が旗を振り振り、思い思いの隊列を組んでぎやかに続いた。日本からは阿波踊り、博多どんたく、祭礼御興、秋田の竿灯などが、続々と繰り出された。

警視庁から監視にきていた私服は、「珍しいものを初めて見せてもらった」と言っていて、喜んでた。このことを、外苑入口の銀杏並木にしつらえたパレード審査スタンドにおられた迫水委員長に報告に行ったら、謹厳な顔をほころばせて大きくうなずかれた姿が、思い出される。

翌日は武道館で、天皇、皇后両陛下のご臨席を仰いで、大会は盛大に開催されたのであるが、その翌日も、また翌日も、今は幽冥のかなた。当時を回想するに、うたた今昔の感に堪えない。

ノーブレス・オブリージュ



細田 胖

東京に籍を置いて三十有数年になり、その間、大したお役に立たないで、内心じくじたるものがある。

入会当時は若年の会員として、ひとえに出席に努めていたところ、突然、磐石田の下で幹事のお役目が回ってきた。今日と違い、当時はノミネートされた名簿により全員の投票だった。以来、約十年は世に言う「ライオン屋」のように毎年のごとく、地区副幹事、中央事務局管理委員、ライオン誌編集委員等々の仕事を遍歴して、ライオンズ組織の何たるかをつぶさに見極めることができた。その結論の一つが、原所風クラブへの回帰とでも言うが、ホームクラブでの楽しみ、お付き合いの中に人生への糧を見いだすことになった。

もちろん地区役員在任中も、ガバナー公式訪問の際の迫水との接解による啓発など、心楽しいものもあった。多忙な国会議員のガバナーとして、公式訪問の時間継ぎの前座を勤めるなど、そのことを思い出すとぞっとすることもあるが、当代一流の頭脳に接する機会は貴重だった。会合前の数瞬の間に、我々おぜん立て役の企てた要旨をすっと飲み込んで会場に入られ、企画した以上に事を運ばれる手さばきは見事というほかなかった。郷に入っては郷に従った講話、遠く新潟、群馬、山梨等へお伴して

過ごした際の片言隻句に、キラリと知性が光る。

「ライオンズは、社会が腐らないための塩である」、「一指でたたいて破れないものを、拳でたたき、これがウイ・サーブの意味である」、「クラブは、日本語では俱に楽しむ部屋」、「士（ライオン）は為さざることあり」等の名文句を連ね、簡明にライオンズムの何たるかを説明して歩いた。

また、一徹な殿様、舞酒井とのいろいろな場でのやりとり、彼の熱心さに、理非はともかく恐れ入ってかぶとを脱がざるを得なかったこと、舞武見の一句たりとも無駄のない、完全とはこのことかと感嘆のほかない立て板に水のごときメンバー・スピーチ、その話がそのまま文章になる妙技、洋の東西を問わない博識の舞福岡、英語の名人舞浜本、等々、さらにまたライオン誌委員のころの舞角川源義、舞大村利一、その他のライオンズの賢人グループの方々との出会いが、人生の前半を戦争という灰色の中で過ごした私の人間不信を、いやしてくれるに十分であったと喜んでいる。

一方、先に述べた全国的組織の中で垣間見たつまらない名誉欲、縄張り争い、権力誇示など、鼻持ちならないことが渦巻いているのもライオンズである。これらのことが私の東京での言動を、なかなか周囲との関係について方向づけている。

歴代会長、幹事会等での私の発言が多少不遜、高ぶったように受け取られた向きがあるが、周囲がどう思おうと東京では孤高を保ち、よい意味でのエリート意識を堅持してゆくことだと、外を知るが故にそう信じている。しかしその裏に、「ノーブレス・オブリージュ」の存在と重味を背負い、矮小な少女趣味的ヒューマニズムにおぼれることなく、自信を持って、良識ある人々の集団として永久に存在すべきではなからうか。

ライオンズと私



星川 博道

平常の不精がたたって、こういう時に本当に閉口している。舞細田の崇高遠大な企画に何とかお答えできないものかと、自らを励ましている次第。

いくつかの課題を頂戴しているが、小生ごとき、そのいずれもが該当せず、この場合だからどうしても見付けるとすれば、「ライオンズと私」くらいのものであるうかが。在籍十年程度では、これとおぼつかないもので、まことに汗顔の至りと言うほかない。

何と言っても、たくさんの方々にお会いできたということ、またこれからもいろいろな方々に巡り会えるであろうことを感謝し、スポンサーである舞小宮山に厚くお礼を申し上げる。入会の時、会長さんから胸章を付けて頂いて、先輩の皆様方から祝福の拍手を頂戴した時、一度にこんなにたくさんの方々の仲間に入れて頂けるのかと、大変な感激に見舞われたものだった。

入会当時は、正直に言ってさっぱり何も分からず、ただ遅刻をしないように出かけて行って、歌って、食事をして帰ってくる——の連続で、四、五回目からは大変に億劫にもなり、手近なクラブでのメーク・アップが多くなった。当時、出張が多かったせいもあって、地方のクラブへの出席も、時に心がけていた。こんな時、我が東京のようにビジター紹介が毎回あることはないらしく、小生一人のみ、会長さんの隣にお席を頂いて、何くれとなく丁寧に扱われた覚えがある。

我が東京は30周年を迎えるだけあって、よそのクラブに比べて多面にわたってよ

く整備され、その中で今までいろいろな役割をおおせ付かってきたが、どれも大過なく、微力を先輩諸氏に補って頂いて務め上げることができた。今までで最も印象に残っているのは、初めて計画委員長をおおせ付かって、当代一流と言われる外部の方々と、じかにお会いできる機会が多くなった時のことである。この時も、先例というものを知らずに、やたらと力みかえって、とてもくたびれたのが記憶に残っている。

本来の非才はどうしようもなく、在籍三十年、二十年の先輩がたくさんいる東京の中で、やっと十年が過ぎたが、まだほんの駆け出しに過ぎず、何となくライオンズムの入口の辺りにきたのかな、といったところの昨今である。

創生期の忘れ得ぬこと



井門 幸男

終戦後六カ年、いまだ虚脱と混乱の時代に、戦時中マニラで軍隊生活をされた当時一橋大学助教授の藤沢傳さん（元・東京チャーター・メンバー）が積極活動され、フィリピンに関係の深い有志数名の協力と努力によって、「フィリピン友の会」が結成された。会長には、戦時初期から二年間、比島派遣軍最高顧問、フィリピンの独立後は特命全權大使として二カ年駐在され、各層の人々から親しまれ尊敬された村田資蔵氏が就任された。軍の犯した各種の残虐行為、罪悪の償いと、日比友好親善の関係を取り戻し、両国間のより正しい理解と各自の友情を深める目的で、一九五一年八月十五日、東京で発会式が催された。

八重洲口の大坂商船ビルに事務所が設けられ、村田会長、石川欣一理事長、塩原有理事など役員は目的達成のため会合を開き、マニラから政治家、バイヤー、友人など

が訪れていた。そのころ、代議士のP・シンコ、R・アーノルドなど四、五名の政治家が、村田元大使にぜひ会いたいと言うので、案内したことが思い出される。

当時、フィリピン外務省は対日賠償額八十億七千万ドルを六十五億に減額の用意があると表明、この交渉が決裂し、賠償協定までに五カ年も費やされた。他方、死刑を宣告された七十七名を含む戦犯百九名の人々は、まだモンテネルバ収容所で捕らわれの身だった。第二次大戦後のフィリピンは、米国からの戦災保証、軍人軍属の給与など多岐にわたる資金は潤沢で、マニラからのバイヤーも盛んに買い付けに來訪していた。

この年の暮も迫った日、フィリピンのナショナル・マーケティン・コーポレーション理事で、戦前からの旧友だったM・G・アバド氏（マニラメンバー）が羽田空港に着くと入電、出迎えたところ、この便に同乗して初めて東京を訪ねたのが、ジョージ・バレンゴアである。翌日、ホテルテイトで会々と、マニラがスポンサーとなって日本にライオンズクラブを結成するため、東京に滞在するとの話だったが、ライオンズのことがつかめず、地域社会への奉仕、国際親善などの言葉が出るので、フィリピン友の会のことを説明し、同行案内、役員の方々に紹介した。

その後の石川初代会長、塩原初代幹事のご活躍はご存じのとおりである。特に印象深いのは村田氏の理解と援助で、マニラからの訪問者にはよく親類に会ったようだと話されていた。バレンゴアにも同じように言われたが、自分はロータリアンでライオンズのメンバーにはなれぬが協力すると、チャーター・ナイトにも出席された。初めてのクラブに、より多くのメンバーを集めるのだと、フィリピン大使館員、アメリカ、ヨーロッパの長期滞日、外人バイヤーなども名を連ね、例会に外人が多く、英語の会合で終わった日もあった。テレビの放送開始は一年後だが、NHK英会話講師のマーシャ・クラコワさんの父、ジョージ・クラコワ氏は滞日中の米人バイヤーでチャーター・メンバー、初年度一年理事だったが、故人となられた。東京が生まれた翌年、時のキリノ大統領は日本人戦犯の特赦を発表し、混乱から平和への道へ一歩前進した。

私事で恐縮だが、戦前十年間シベリアンとしてミンダナオ島ダバオ（ベニヤ板用ラワンの主産地、戦後はドル・デルモンテ印バナナの生産地）で生活、引き揚げた後は本拠も家族も大阪の堺市なので、ライオンズのメンバーとなることを辞退すべきと

思っていたが、リパレンソゴア、特に村田氏にライオンになるよう言われ、決してよいメンバーとは思わない。

東京30周年を経て、四十余名の物故メンバーを数えるが、今も年に三、四回フィリピンを訪ね、旧友中にまだ多くのライオンに会い、東京30創生のころが話題になる。フィリピン友の会は、一九五四年六月、財団法人・フィリピン協会に併合、村田省蔵氏は亡くなるまで、その会長を務められた。

LIONS・カント・孔子



今井 勇

早いもので、東京30へ入会してから四年が過ぎた。ニューヨークより帰国直後、職場の前任者であった野平賀の推薦により、スナナリと入会させてもらったために、特別な意識も持たなかったが、次第に様子がかかるにつれ東京30は極めて由緒あるクラブと知り、恐縮の感を禁じ得ないものである。

仕事柄、海外出張等で例会に出られない日も多く、ライオンとしての奉仕の実績もなく、自ら顧みて反省することの多い。今後は例会と二幹会を通じてライオンズとの交際をより深め、さらにクラブおよび社会へ奉仕することにできる限りの努力をしたと、クラブ30周年を機に痛感している。

LIONS・カント・孔子は、何の関係のない三題はなしのようだが、実は私の処生訓に関して、その三者の思想が極めて類似あるいは共通、または同一性さえあることを見いだして、自分でも驚いている次第である。

戦後海軍より復員して、一九四六年、「自由主義の擁護」との題で、河合榮治郎先

生の評論の一部を木村健康先生が編集された本を手にして、自由主義の核心に触れ得た感激は生涯忘れないものがある。河合先生の思想は、理想主義的個人主義を基礎とする自由主義であるが、その社会経済思想は別として、人生哲学としてはカントの名付けるところの「人格」すなわち人間の完全理想的な状態、を人間の最高価値と考えている。その人格を目指して努力することに人生の意義があり、同じ目標に向かう人間相互の間の共感が愛情を生むこと、こういう人間の間で、自らと他人のためにせねばならぬことを善と説いている。さらに、我々の人格への成長努力を阻害する他国の侵略から祖国を防衛する必要性さえ、指摘している。

次に孔子のことであるが、それは論語にある「忠」と「恕」という言葉で、孔子は人生の処生訓としてこの二つのことが最も重要である、と弟子に教えている。実は、私の家に私の子どもころから、この二字を渋沢栄一翁が書かれた色紙が掛けられていた。普通、「忠」は素直さ、「恕」は思いやりと解されているが、それはほんの一部の解釈であって、青淵翁の論語解説によれば、特に忠には誠意をもって積極的に行動するという実行面をも含んでおり、恕とは書いて字のごとく「心の如し」で、相手の心を体して同じ状態、同じ思想になって相手のために尽くすということで、キリスト教では愛、仏教では慈、男女間では恋と説いている。ライオンズにとっては「サーブ」ということになろうか。

リパティ・インテリジェンス・アワ・ネーションズ・セフティと、ライオンズクラブの基本的理念を表すこのLIONSの精神は、カント、孔子の思想と実に類似しているではないか。孔子は今から二千数百年もの古えの人で、その間、人間の生活としても数十代も伝承されてきているわけだが、その哲学が洋の東西、古今を問わず、今もなお変わらぬ思想としての価値を持って生き続けているということは、全く驚きのほかない。

伝統と創造の二面性



池崎 道男

個人であれ集団であれ、すべて歴史を持っている。歴史という言葉をもっと広く考えれば、およそ時の経過の中にあるものはすべて、己の歴史を持っていると言うことができる。

その歴史がある時点、節目で振り返る時、私たちは将来というものを並行させて考え、歴史を振り返るということは単にノスタルジアに浸るという消極的なものではなく、その足取りを踏まえ、これからの進路を見極める積極的な作業をこそ、重要視すべきである。

今年、創設30周年を迎えるに当たり、クラブの創設時を回顧するのは当然のことといえども、過去に魂を奪われ、将来への展望が単に伝統に従うという名のもとに、消極的な路線になってはならない。伝統とは、所与のものとして不動の内容を持って伝達されていくものではなく、むしろ先人の所業を真剣に受け止めながら、発展させ創造させてゆくべきものではないだろうか。

新たな創造のないところでは、伝統は形骸化するしかない。よその著名な集団が、自らの伝統を後生大事に祭り上げるあまり、その運動が沈滞化していく例をいくつか見るにつけ、伝統と創造の二面の必要さを痛感せざるを得ない。

取り戻した人間性



石井 正弘

懸案であった会社勤めの清算を果たし、フリーな生活に切り換えてしばらく経ったある日、永年にわたりご厚誼に預かり、また退社に際しても種々ご心配を賜った岡村大先輩の事務所へ、ごあいさつとお礼を兼ねて参上した。お話を伺っている間に、談話またまライオンズクラブに及び、「どうだ、お前も入らんか」とのお誘いを受けた。とっさのことではあったが、大先輩が古くからのメンバーで活躍されていたことは、昔から時々、記事を付けてもらっていたのをお見受けし、承知していたので、即座に「お願いします」と申し上げようと思ったものの、何分にも正直に言ってしまうので、即座に「クラブの何たるかについては、ほとんど知るところなく、しかも小生ごとき者の資格があるや否やにも自信がなく、いさかためらいがちであった。

「心配せんでよろしい、わしに任せておけ」との鶴の一声で、「万事、お任せ致します」とその日は辞した。内心は、またもご面倒を掛け申し訳ないとの気持ちを抱いていた矢先、日ならずしてご連絡を賜り、「手続きを済ませておいたから、来月の例会から出てこい」とのお達しがあった。その迅速な手配のほどに驚くやら感激するやらで、まさにアツという間にメンバーにして頂いたのが、入会の経緯である。

これは全く、岡村大先輩の過分に及ぶご厚配のお陰で、今にして改めてこの由緒ある東京に入らせて頂いたことに、深く感謝の意を表したく存じている次第である。その後、送付を受けた名簿を拝見し、そうそうたる方々、かつ比較的年配の方の多いのにちょっと驚き、小生のごとくさしたる経歴もなくかつ大正後期の生まれの若輩で、

お仲間になれるかとの懸念を持ったのも偽らざる入会前の感じであった。

ところが早いもので、以上の経緯で入会させて頂いたのが一九七九年二月、それから満三年を超え、誕生祝いのスプーンも三本を数えるに至った。お顔なじみの方々も増え、月二回の例会も最優先のスケジュールに組み入れるようになり、その日が楽しみにってきた昨今である。と言っても僅か三年、チャーター・メンバー初め二十年以上の方が多数おられる中で、慣れないこと多くいまだに新入りの気分が抜けず、諸先輩の後についてウロウロしているというのが実情である。せいせい欠席しないように努め、一日も早くよきメンバーたらんと心がけているつもりである。

実は、毎月の例会に出席しだしてから痛感し続けていることだが、小生が永年にわたり身を置いてきた世界が、営利追求のみを主とした大組織の企業社会で、どちらかと言えば競争原理がすべてに優先し、往々にして醜い葛藤と人間悪の露呈に明け暮れ、いわば利己心の渦の中で百鬼夜行する闘争社会であったと言っても差し支えなかった。それだけに、ライオニズムの目的の下に多くの方が純粹な気持ちでのみ会合し、ランチタイムの一時を過ごし、また多忙の中をアクティビティに励まれる様子に接し、そのすがすがしさ、会合の終わった後の後味のよさは、まさに数十年來忘れかけていた、いわば若き学生時代に帰ったに近い感覚で、素朴であるが人間性の原点を取り戻したような気持ちになった。これは、私は私なりに大変貴重なものと思ひながら、例会に出席しているわけである。従って、今後とも事情と健康の許す限り会員でありたいと願っている。

先日の例会でのことだが、地方からメーク・アップで出席されたピジターの方から、東京が非常に和やかな雰囲気なので意外だった、との感想を伺った。同氏の言われた「意外」という言葉に、私自身のほうが逆に意外に感じたのだが、ある意味で、これは意義あることではないかと改めて認識した。この雰囲気こそ、諸先輩が永年かけて作ってこられたもので、私ども若輩としてぜひ維持してゆかねばならないものと、肝に銘じた次第である。

感銘深いライオンの働き



一色 浩

金を出せば済むと言うのではなく、体で奉仕するのが真の奉仕と言われても、だんだん年配になってくると、口が先になって実行力が鈍ってくるものだ。

東名高速道路の運転に飽いて、ラジオのスイッチを入れてみた。途中からではあるが、小学生の作文の発表のようであった。以下、聞いたままを書く。

私は久しぶりに博多に来ての帰り、駅前広場にくると、黄色の帽子のおじさんが五人、そろいのプレザーを着たおばさん五人が、盲導犬の募金をやっていました。うちのおじちゃんも最近、目が見えなくて不自由をしているので、盲導犬がいたら便利なのだと思いますが、しばらく聞いてみると、盲導犬を一人養成するにはたくさんのお金がかかることが分かりました。私も箱にお金を入れなくてはと、がま口を開けると、買物をしたものだから、電車とバス代を差し引くと七十円しか残りません。そこで、バスを二つ停留所を歩けば三十円浮くので、思い切って百円入れました。黄色い帽子のおじさんは、百万円ももらったように何回もお礼を言いました。プレザーのおばさんが何回も聞くので、バスを手前で降りることを話しましたら、「何と心の優しいお嬢ちゃんだろう」と言っていて、涙を流して抱きしめてくれました。たった百円入れただけに、何だか恥ずかしくなりました。

大体このような作文で、作者は小学校六年の女の子、残念ながら名前前は分からずじまいだった。募金をしていたのは、福岡地区のライオンズのメンバーとライオネスの方々だと思う。私も久しぶりに、何だか心温まる思いがした。

今日一日を精一杯



榎木 進

昨年、元会員の清藤志郎先生からたつてのお勧めで、若古川をスポンサーとして末席を汚している。

「山高きをもって貴しとせず、木あるをもって貴しとする」という言葉がある。山を当クラブに置き換えると、木が会員または会の事業に当たるかと思う。会の事業をいかに行ったかということによって、人間の価値あるいはその会の存在価値が決まると信ずる。

「ライムライト」の中でチャップリンが、「人生は生きるに価する」、そのためには勇氣、希望、そしてサム・マナーが必要だ、と人生に絶望したバレリーナに言うくだりがある。この言葉は大変好きだが、功なり名を遂げられた先輩ライオンは、道徳綱領にある不幸な人には同情を、弱い人には助力を、貧しい人には私財を惜しまず、実行運営され、立派にサム・マナーを生かされていることは、敬服の至りである。

先日、地球の創生の本を読んでいたら、四十五億年前に地球が誕生して今日までを、たとえば一日二十四時間とすると、人類が出現してから三十八秒しか経っていない、と書いてあった。それから考えると、我々の一生も一瞬の間である。またその地球も、あと五十億年で生涯を終え、宇宙の漢くずになると言われている。ミクロで考えても、今から百年後には生物も、森羅万象すべて一変していることだろう。実に無情だと思ふ。

つい一年ほど前まで、私は精神的にも肉体的にも三十代のつもりだった。しかし寂

しいことだが、鏡を見ると年輪が隠しようもなく顔に刻まれている。若い時には、無我夢中で時間を忘れていたものが、近ごろ言いようもない寂寥を感じだし、一日に何度か、我あり我存在すると自覚するようになった。

そこで、これからの余生を後悔しないように、幸せに生きるためには、人に迷惑をかけたら謝り、人が困っていれば助け合い、謙虚に日を送ることを自分に言い聞かせている。凡人のため、それも思考たおれの毎日であるが、最後に、私の診療所に掲げている拙文の一節を転載しよう。

「偶然の出会いほど、すばらしいものは、ありません。相手も場所も全く予期しません。その機会が二度とないかもしれませんし、何十年も続くかも知れません。皆様との出会いの一瞬を大切にしたいと思います。そして、今日一日、精一杯善意で生きます」

献血奉仕に携わって



風間 敏雄

ライオンズ活動の一端として多少でも社会のためにと、本クラブ社会福祉委員会では、東京有楽町などと共に、日本赤十字社の献血奉仕に参加している。世の中にどれだけ献血について関心があるかと、一抹の不安を感じていたが、予想以上に一般の方々の協力を頂いて、私の予想を裏切ったという嬉しい結果だった。

寒風の中を震えながら、また酷暑の中に汗を流しながら、順番を待って献血車に乗り、協力された方々に敬意を表し、今後なお一層の成績を願うものである。献血運動に参加して、いろいろと感じたことがあるので、医学に携わる者として随想と雑感

をここに記してみたい。

社会福祉委員会の一員として、当然のことながらできる限り奉仕に参加しているが、献血を申し出て下さる方を大別して、四種類に分類してみた。第一は、献血手帳を常時携帯して積極的にされる方、第二に、血液の足りないことを認識され、初めて参加して下さる方、第三は中高年の方に多いが、この機会に自分の健康状態の検査を受け、できれば採血に応じたい方、第四は自分の血液型を確認して協力する方があると思う。

第一の方々は、通りかかったら採血車があったので申し出たという、採血回数も五、六回目の方が多い。第二は、今までは無関心だったが我々の呼びかけに応じた方々。第三の中高年の方は、自分の健康状態がどうか、適応するようであれば喜んで採血に協力される。第四は自分の血液型が分からないので、確認してもらい、採血に応ずる方々である。

採血を申し出られた方々の中で、本人のせっかくの好意に反し、不適當として採血できない方が、毎回十名から十五名くらいある。平均して百五十名前後の申し出の中の一〇％であるが、その原因はいろいろである。特に感じたことは、太るのがいやで減食したり、やせる薬を服用する若い女性のことである。スタイルを主にして、自分の健康管理に無関心なのに驚いた。やせてすんなりした外見だけにあこがれる気持ちには、若い人として痛いほど分かるが、自分の健康状態の悪化に気がつかずにいることは、非常に危険である。将来、いかなる障害のもとになるか、本人が気がついていかどうか、大いに気になるケースである。

また、運悪く風邪やほかの疾患で薬を服用している方も、採血不能になることが見受けられる。中高年の方には高血圧、低血圧症のため、薬を常用している方もある。ともあれ、採血の前に比重、血液型、血圧、問診等の検査によって適不適となるので、献血奉仕は自分の健康状態を知る機会にもなる。

車社会の現在、交通事故や不慮の事故、または病氣によって緊急に大量の血液が必要な事態が多くなったことは、周知の事実である。輸血に替わるものはないのが現状で、助かる生命が無念の涙にくれることも多い。血液の不足に悩んでいる日赤血液センターでは、日夜、この問題の解決に専心され、そのスタッフの努力には頭が下がる思いがする。

採血は一人一回二〇〇ccが通常で、仮に大手術を要する緊急患者に三、四〇〇ccの輸血が必要とすれば、十五人分の尊い献血が消えることになる。私たちの奉仕活動で、一回百五十名が大体の限度であり、また血液型による適不適もある。例えば百五十名中、A、AB、B、O型の四種平均して四十名弱であるから、患者二名強にしか供給できないことになる。こんな単純な計算でも、いかに不足しているかが分かるのである。

尊い人命が輸血によって救われるならば、我々は何となくこの重要性を広報し、自分も含めて一人でも多くの方から大量の血液を保有することによって、国民一人一人が安心して過ごせるようにしたい。医師も、強い安心感をもって、施術できるようにしたい。血液を必要としない状態は最も理想的だが、今の情勢ではそれは望めないことであり、一滴でも多い尊い血液の保有が望ましいのである。

社会奉仕をモットーとするライオンズのメンバー全員がこの実情を把握し、広報活動と実際の献血行動をとり、ライオニズムの一端を果たすよう心がけねばならないと、ますますその実感を深くした。奉仕のしがいのあるこの運動に参加できる喜びを、今さらに心の中に味わっている。

社会福祉委員会の使命は、これだけではない。身体障害者、不幸な星の下に生まれた方々にも、貧者の一灯として心から愛の手を差し伸べ、お互いに自由で幸福な日々を過ごせるよう、その方々と共に平和であるよう祈る次第である。

障害児施設で見たこと



小宮山 宇一

私が倉橋のスポンサーで入会したのは一九六九年二月で、早くも十三年になる。この間を振り返ってみて、一番強く印象に残っていることは、十年ほど前に務めさせて頂いた厚生委員長折のアクティビティのことである。当時の厚生委員会の予算は、五十万円であった。それをもとに、「日本心身障害児協会」、「全国重症心身障害児を守る会」ほか、いくつかの心身障害児施設へのアクティビティを行った。私にとっては初めてのことで、羽尾関と共に施設を訪問した。

そこで初めて重症心身障害児の姿に接した時の衝撃——私は言葉もなく、息をのむ思いであった。この世に尊い一命を授かったものの、これほどまでにつらい宿命を背負わねばならないとは……。この時のショックは、今も何かの折によみがえってくる。

もちろん、心身障害者のことを全く知らなかったわけではないが、それは多分に軽症者の場合で、重症者がこれほどとは私の想像をはるかに超えていた。おののくような私の心にわずかに救いとなったのは、その際に会った障害児の母親たちの表情が、意外に（こんな表現するのは失礼かも知れないが、明るく目に映ったことだった。障害児を持つ母親の心痛の深さは、到底、察しても及びもつかないだろうが、それを乗り越えようとし、明るく我が子の幸せに努めている母のつよさに心を打たれた。

私はたまたまアクティビティを通じて、重症心身障害児の実態を垣間見たわけだが、世間にはよく知られていない面もあるうし、また施設に入りたくとも入れない障害児も、たくさんいることであろう。我々健康者は、積極的に目を向けて、温かい手を差

し伸べる努力をしなければならないと思う。当クラブのアクティビティ金額はさやかではあるが、我々の善意が、恵まれない人々にいささかなりとも寄与できる喜びを、ひそかに感じるのである。

蛇足ではあるが、当時は学生運動が盛んであった。東大・安田講堂事件に象徴されるように、跳ね返りの過激派学生の乱暴狼藉が全国的に広がり、大きな社会問題になっていた。もちろん、こうした学生はごく一部ではあっただろう。

反面、訪れた障害児施設では、献身的にボランティア活動に尽くしている学生の姿を見かけた。過激派学生の言いつ分はともかくとして、同じ時期、同じ学生的身でありながら、この落差と対比に驚くばかりであった。学生ボランティアのすがすがしい奉仕の姿は、今なお印象深い。

感銘深いライオンズの働き



前田 幸蔵

東京が、創設30周年を迎えた。そして私のライオン歴も十九年になる。十一代会長が守随に会員章を襟につけてもらった入会の日の情景が、ついきのうのことのように目に浮かんでくる。

初めて経験する例会の雰囲気、そして「ライオンズクラブの歌」の自由、信頼、睿智、奉仕のまこと、叫べ、ほえよ、の一節一節がこの日一日中、私の脳裏を去来していたことを思い出す。そして初めて見る年次大会の盛況さには、目をみはったものである。九州、名古屋、そして北海道などでの年次大会、家族同伴の楽しい旅行の先々で受けた友情の暖かみを肌で感じながら、社会奉仕団体の一員として十九年の歳月を

重ね、東京30周年の記念すべき年を迎えたことは、私の生涯での大きな思い出の一つとなるであろう。

東京の今日までの数多い地域社会への奉仕の中で、私に最も身近な、そして私自身が橋渡しの役を務めた二つの場合について録し、思い出の糸としたい。

その一つは、一九七三年、私が会長をしていた年に、街に緑をの旬間で、中央区明石町の聖路加病院前の暁公園の道路に面した一角に、バラの木など大小の樹木を植樹、寄贈したことである。あれから九年、今では大きく育ち、青葉を繁らせ、真っ赤なバラの花は道行く人々の目を惹きませ、心を和ませ、一角に立つ「東京ライオンズクラブ寄贈」の標柱と共に、奉仕のまことの美化が、いつまでも多くの人の心の底にやきつくことであろう。

今一つは、東京30周年記念事業として、中央区の教寄屋橋公園に、都心で初めての花時計を設置、寄贈したことである。三月二十五日、帝国ホテルで催された30周年記念例会で、中央区への贈呈式が行われた。これが完成の暁は、時の刻みと共に色彩豊かな四季の花園が、行き交う人々の憩いの場として、しばし都心の騒音を忘れさせ、花時計の台座に刻まれる30周年記念委員長長野岡村武の揮毫になる「東京ライオンズクラブ三十周年記念」の墨痕ににじむ奉仕の心と共に、いつまでも銀座の名所となることであろう。

この花時計の寄贈は今、中央区の多くの人々の話題になっている。ここに四月十九日の『中央区民新聞』の記事の一部を転載し、花時計がもたらすライオンズの奉仕の開花に思いをはせて、この稿を閉じることとする。

「様変わりする銀座の玄関」

教寄屋橋交番が、トンガリ屋根のメルヘン調に建て直され、四月十二日一時に鈴木知事、今泉警視總監、本田築地署長によりテープカットされオープンした………

………中略………
銀座の表玄関として教寄屋橋周辺も大きく変わろうとしている。特に日劇と朝日新聞社の跡地には阪急、西武の両デパートが進出、映画館など文化施設もくりこまれ、話題をまいてる。

阪急側の教寄屋橋公園は大巾改造され、道行く人の憩いの場としてきれいになっ

た。高く上がる噴水が人目をひき、外人さんも公園内で記念撮影するなど明るいまどろの公園となった。

反対側は交番が衣替えしたところから、区と営団が協議して交番横にある地下鉄出入口の屋根をガラス張りのドーム型に作りかえることになった。さらに交番の裏側には、東京ライオンズクラブの寄贈で中央区内で初めての「花時計」が設けられる。これは、文字盤五分に回りに一分のふちどり（花壇）をするもので、歩く人の目の高さから見えるように傾斜させる。早ければ七月ごろ完成する。

世界発展に寄与する道



牧野 増雄

ライオンズクラブも30周年を迎えたが、成立当時は終戦後数年で、まだ敗戦気分も落ち着いた状態とは言えなかったころだ。考えてみれば、三十年と言えば長いようで短い期間である。年老いた我々には特に、瞬く間のようにも思える。

さて、昨今時々頭をかすめる目に見えない一つ一つの現象に、終戦当時のころを思い起こすことが多くなった。当時二、三十年もすれば、また世界のどこかに戦争が起ころうかも知れないとささやかれたこともあったが、そんなことが記憶にある自分だけの感じなのだろうか。日本のこれから、世界のこれからがどうなっていくのだろうか。世界は平和のまま続くと信じてきた通りなのだろうか。これだけ進歩した今日、一度大戦争が起こったら、人間だけでなく地球そのものがおかしくなってしまう。そんな悲愴はもう起きない、と言い切れるのだろうか。

政治的にどう経済的にどうと、難しいことを言う気はない。あの戦争前後の食糧難

を思い出すだけで、肌にあわを感ずる。自分は食料関係業者であるせいもあるが、農民は米を必要以上作るな、自ら生産して余る以上の諸食料品を輸入するよう、貿易を緩和せよ、肉を、果物を、魚をと、当然ながら国際政治的圧迫もある昨今である。今世界で、必ずしも食料品が過剰でどうにもならぬと言えるのだろうか。これもただ、日本が急激に進んだためだ。

考えてはいけないことだが、もしも再び戦争のようなことがあったら、日本は自給できる状態と言えるだろうか。米は減反して少なくし、水産物は自国の産品より海外から輸入したり、獲らせてもらっている。昔のように、今日も明日もスケソウダラ配給で、ということもできなくなることは必然である。加えて戦後派の人々は、肉でなければというほど食変化が急激に進んでいる。米の代わりにパンで、とすっかり変わっているのが今日である。

自衛隊は強化するな、核は作るな、使用するな、と日本人は当然のことを主張している。本当にそれで済むなら、私も双手を挙げて賛成したい。まっぴら御免である。だが世界の現状は、そう主張する人の気持ちと同じではない。それぞれの事情があって、世界は二方向に向かって張り合い、相手がやめなければ自分がやめられるか、というわけだ。この中であって、戦争は放棄するんだと日本人は決めたからとて、世界的情勢があつちの方向に向いていたら、自分たちだけは安全で平和におれると言えるのだろうか。

一兆円減税は私も先に立って言いたいところだが、何を減らせばできるというのかと思えば、自衛隊をどうかとくる。それは余り世間見ずだと言えないだろうか。何もかも半分に減らして、政治家も官庁も国民も、昔に戻って小さくならうやで治まるなら、一兆円どころか、もっともっと節約できるかも知れない。だが世の中は進んでいる。簡単にゆくものではない。

我々はどうのように対応し、どうして新しい時代に即してゆくか。世界の人間の一人として、ただ文句ばかり言ってもしょうのないことを胸に、未永く平和に尽くすよりほかないと観念してゆきたい。当クラブもますます団結を強め、できる社会事業には積極的な力を結集し、永久の世界の発展に寄与してゆくべきではなからうか。過去を忘れず、新しい世界に遅れず、世界発展の基となるクラブへの道を築くべきだと思う。

ている。

我がクラブライフを振り返って



三崎 友一

東京に入会以来二十六年目、結成30周年を迎え、残念ながらクラブの最年長者となっていました。

一九五七年五月、帝国ホテルで開催された30地区第三回年次大会委員長を務めてから、二十五年も経ってしまったが、当時のことはいまだに忘れ得ない思い出となっている。故人となられた若石川欣一、若高橋貞太郎、若水野護、若塩原有、若酒井忠博、そして大会事務局長としてすべてを取り仕切って下さった若樋口を初め、メンバーの皆様的全面的なご支援とご協力によって、つづがなくその職責を果たすことができた次第で、ライオンズ仲間の皆様に改めて深く感謝する。

私のみは馬齢を重ね、いまだに元気で、なかなか冥土からのお迎えも参らず、メンバーの末席を汚しているが、この間に交友を深めて頂いた方々が故人となられたことは、寂しい限りである。特に私と同年の若石川欣一が亡くなられた時は、まさかと大変なショックだった。

さてライオンズクラブの現状は、昔と違い大変困難な時期であると思う。この時こそ、東京の責任は重大である。信念と確信を持ち、迎合することなく、たとえ孤高の道であっても堂々と、伝統のライオンズ精神を高揚せねばならないと思う。どうかライオンズクラブが日本社会に根を下ろし、明るい未来を持つようにすべく、東京の会員の皆様の一層のご努力を願ってやまない。

何より大切な知性と常識



三崎 矩光

歳月の経つのは早いもので、東京に入会してから二十六年目を迎えた。一九五七年五月、東京で開催された翌地区第三回年次大会以来今日に至るまで、日本ライオンズの発展過程に深くかわりあってきた私としては、30周年を迎えて感無量である。岸本ビル事務局で、千葉さんと、そして会社の者にも応援してもらい、大会パンフレットの袋詰めなど、自分たちの手で夜遅くまで準備をしたことも、今では懐かしい思い出である。特に羽樋口に大会企画、準備、運営と、いろいろで指導頂いたことは、その後のライオンズ活動に大変役立ち、有り難く感謝に堪えない。

さて、日本ライオンズは高度成長時代も既に終わってしまい、安定成長を通り越し、いかにメンバーの減少を食い止めるかという、まさに低成長の厳しい状況に直面している。そして、ライオンズ精神に胸躍らせ、希望と期待に燃えた楽しい時代は遠く過去のものとなり、むしろ社会的名誉に恵まれない人々の名誉欲を満足させるための福祉施設となっているのが、悲しいことではあるが、日本ライオンズの現在の姿であると言わざるを得ない。私のようにライオンズ組織の中に深くかわりあった者は、一般メンバーの方々が知らない憂うべき現実を直接体験し、ライオンズに対して怒りと失望を感じ、限らない寂しさを痛感するのみである。

二十六年間のライオンズライフの中で、幾度かライオンズに失望し、いや気がさして退会を決意したが、いまだに実行し得ないのは、東京のメンバーの皆様を初めとし、ライオンズゆえに知り得た全国の数多くの友人を失いたくない、ただそれだけの

理由からだった。私にとってこの友情は、どんなことがあるとも失うことのできない大切な財産である。それゆえに、どんなにライオンズに失望しようとも、クラブを去ることは不可能だと思う。

現在の日本ライオンズを見るに、ライオンズの基本であるリベティ、インテリジェンスが余りにも忘れられている。例えば、会則上どうのこうのと論議がよく行われるが、ライオンズの会則は運用面で大変弾力性のあるもので、知性と常識さえあれば難しいことは全くない。現実にあったことだが、某ライオンは自らの名誉欲のために悪知恵を働かせ、会則を悪用してその目的を達成したこともある。

ライオンズにおいては知性と常識が守られれば、ライオンズ本来の明るく楽しい、魅力あるものとなることは、全く疑う余地がない。非常に単純な基本原則である知性と常識、この二つが現在の日本ライオンズにとって絶対に不可欠なものである。30周年を迎えて、知性と常識が日本ライオンズ全体にみなぎり、明るく楽しいライオンズクラブになることを、心から願う次第である。

初めてのアクティビティ



森岡 一郎

一九六六年二月に東京に入会した私は、同年の暮れに近くなり、少しライオンズの生活に慣れてきていた。当時の幹事は、亡くなられた賀西林だった。そして確かそのころ、東京千代田の森田が首頭を取られ、宮城の周りのクラブが合同して、皇居外苑みどりの会に対し種々の援助をするアクティビティが始まっていた。

皇居周辺には沢山の道路があり、そこに自動車等の乗り物が自由に出入りすると、

これらの道路を利用して運動をしたり、散策を楽しむ付近の会社員の方々の安全に支障を及ぼす恐れがある。そこで従来は、足場丸太の中古品を材料として柵を作り、メーン道路以外の道路をふさいでいた。だが、その木材で作った柵は重く運搬が不便で、かつ腐りやすく壊れるので困っていた。

そこで、これを軽量型鋼で作れば形もスマートで、木材の重さの半分以上の軽い柵ができるので、これに代えたいが、そのころの予算では金銭的に無理なので、皇居外苑みどりの会よりクラブに対してその援助を依頼してきた。そして安全の見地から、各クラブでは共同してこれを援助することに決まった。

私は当時、軽量型鋼を材料にしてプレハブ住宅を作っている会社にいたので、西林幹事から私に相談があり、その柵の製作に協力してやってくれという話があった。ピギナーの会員である私に、このような重要な仕事が頼まれたので、私は感激してお引き受けた。そしてさらによく詳細を伺うと、予算は古い材木を使っていた時の程度しかなく、これでは使用する軽量型鋼の価格程度で、切断、熔接、塗装の費用は算入することができず、大変困ってしまった。

仕方がないので、親会社の日本鋼管に泣きつき、新しい用途に使う軽量型鋼だからとか何とか、わけの分からない理由をつけて無償で寄付して頂き、それを切断して組み立て、熔接と塗装の費用だけでやっとその予算に合わせることにした。従って、皆様が皇居前を通られる時に見かけられる通行止めの軽量型鋼の柵には、よく見ると必ずどこかに、ライオンズのマークが入っている。そしてその後も、皇居外苑みどりの会の活躍で、この柵は宮城周辺にどんどん増えている。

今はどうして、どういう価格で調達されているのか、当時の関係者である東京千代田の森田、並びに我がクラブの若西林も既に不帰の客となられた現在、私にはよく分からない。とにかく、東京の中心である皇居、その周辺にある軽量型鋼製のスマートな柵のどこかに、ライオンズのマークがあることをお話しして、私の最初のアクティビティの思い出とさせて頂く。

思いもよらない貿易摩擦



森末 新一

偶然のことで、一九八二年三月三十一日付のヘラルド・トリビューン紙を読む破目になった。それは私の尊敬する友人が、「あなたに関係のある会社の記事が掲載されているから見て置け」ということで、同紙を見せてもらったところからこの話が始まる。

驚かされたのは、記事中に米国商務長官ボルドリッジ氏が、ミドリ十字社を名指しで非難しているコラムであった。それによると、あたかも貿易摩擦の代表的会社であるかのように取り上げられているのである。その内容たるや、「この会社は、高度の血漿分画技術を米国から導入することを拒み、他方では原料となる血漿は無制限に輸入しているのは不当である」と言わんばかりに決め付けている。

これを一読した瞬間、二十数年前のことが思い出された。そのころミドリ十字は、原料血漿を米国へ輸出して、細々と会社の生計を立てながら、血漿分画技術を営々と学んでいた。私がハーバード大学の研究所に留学したのも、また同社がパークレイのカッター・ラボラトリーに大枚数億円を払って、血漿分画製剤の特許使用権を獲得したのも、技術導入以外の何物でもなかった。

その昔、ボルドリッジ長官の言う通り私どもは米国から技術を輸入し、原料血漿は輸入どころか輸出をしていたのである。現在は事態は逆転して、国内開発の新技術を輸出し、原料は専ら米国に頼っている次第。こうした姿は、日本工業全般についても言えることである。原料を輸入して付加価値を高めて製品を輸出する、いわゆる加工

貿易が私どもの生きる道であって、これにケチをつけられるのは迷惑な話である。

それよりも、ボルドリッジ長官は何を好んでミドリ十字を引用して貿易摩擦を論じたのか、不思議に思われる。小型自動車やエレクトロニクス機器をやり玉にあげても、注目を浴びないという別の狙いがあるのかも知れない。何はともあれ、論説は一方通行であってはならないし、同時に世界の技術も一方通行では困るわけで、有り体に言えは技術は交流の時代である。

私の提言はいささか回りくどいことになってしまったが、こんなとげとげしい技術論争の中で、どこかにライオンスのサービス精神が折り込めないものであろうか。技も仁術というニュアンスが、コラムの片隅にでもあってほしい。

思いを新たに



守屋 俊章

東京30周年に当たり、チャーター・メンバーの数々のご努力とご活躍に対し、満腔の謝意と熱烈なる賛辞をおくる。

さて、多年にわたる東京30のアクティビティも、年々歳々、いろいろと移り変わってきていると思うが、多くの立派な業績は、私たちの誇りとするところである。しかしながら、今後の社会奉仕についてはなお一層の努力と、発想の転換によって新機軸を開くべきだと考える。マンネリ化しているもの、また他クラブに対する付き合い的なものは、これを排すべきである。地域社会への奉仕に徹し、陽の当たらないところに、小さな實力ではあっても各会員の力を結集して、事に当たるべきだろう。

以上の面から考えて、高校生への奨学資金の給付は大変立派で、永続すべきことだ

と思う。将来の日本を背負って立つ青少年に、いささかではあるが活力を与え、その行動と奉仕が未来永久に続けられれば、これに過ぎたるものはない。

次に、常々私は「不特定多数の人々に、時に及んで利用せられ、喜ばれ、隠れたる善意によった他人への思いやりこそ、貴いものだ」と考えている。そのことから、いろいろの奉仕にクラブ名を麗々しく入れることには、何か反感を感じてきた。

全日本にあるライオンスクラブの中で最も古く、最も伝統を誇る我がクラブこそ、かくのごときことをやめるべきだと思う。今こそ30周年の佳節に当たって、ライオンス精神の原点に戻って反省し、思いを新たにしたい。

二先輩三友人と共に



村松 寿

私が東京30に入会させて頂いたのは、ほかならぬ通産大先輩の村岡村のお世話によるものである。通産省（当時軍需省）入省試験の時、怖そうな髭の審査官がご当人であった。役人になると貴族をつけることも大事であると聞いていたが、村岡村のようには端整厳肅を感じさせる人は、私の知る限りでは少ないと思う。

以来、私は通産省の役人としてさまざまなポストを経験したが、縁は異なるもので、チャーター・メンバーの野大原とは、終戦直後の日本混乱時代に、群馬県高崎市に官庁疎開した鉱山監督局の局長としてお迎えした経験が記憶にある。毎日が食うや食わずの生活の中で、戦後の鉱業政策に全身打ち込んでおられる野大原の姿に、心から感銘したものである。

このご両人が当クラブの中心になって活躍になっている姿を拝見する時、日本の

ライオンズの将来は、今後決して安泰なものばかりではないが、道は険しくとも乗り越えて行くことと心から信頼し、ご指導を頂きたいと思っている。

これもまた入会後、偶然に分かったことであるが、中学時代の友人がすでに三人も入っていたことである。一色、守屋、橋本の三ライオンとは、昔の東京市立一中（現九段高校）時代の同年次の友で、戦前の中学にしては珍しい人物教育と体育にウエイトがかかった、ネクタイとランドセルの中学時代を過ごした。「至大至剛」をモットーに、他人に迷惑をかけない自主独立の人生訓をたたき込まれた。また当時、他中学が何人でも上級高校進学主義の教育一点張りの時代に、大器晩成を期して人類愛と協同精神を教え、毎日、九段靖国神社に拝礼して通学した自分は、三人の友と共に、ライオンズとして奉仕する宿命にあったのかも知れない。

自分で言うのもおこがましいが、小学、中学、高校と、クラスのまとめ役にかつぎ出されたのも、身についた人生観の象徴ではないか、と半ば諦めてその任についてきたが、当クラブに入会を推薦された時も、羽岡村の言う「人のために役立つ奉仕の気持ちには、一生忘れてはいけない」の一言に、強く心を打たれたからであらう。

日本自転車振興会会長の羽岡村の下で、振興資金補助を配分する時も、この補助金が日本社会のどの面に役立つかが、一番のキーポイントであった。二百億円の国民の血の出るような大切なお金を、まとめて使えばこんなに貢献できるものかと、この業務に若い血をたぎらせたものである。社会福祉施設もついでに視察させてもらったが、私もどが行くかと心から涙を流して喜んでくれる姿に、こちらも目に涙がたまるが多かった。

社会福祉政策は誠に難しい。欧州のある国のように、福祉のため経済が参っては逆転である。米国のジョージ・ギルダ著の『富と貧困』は最近の名著であるが、アメリカ経済社会の弱体化したシステム、深く進行する危機を刷出し、富の源泉である企業と勤労者のやる気をくじき、貧困を拡大している所以のものは何か、を克明に教えてくれた。

ライオンズクラブとは、決して怠け者を救済する組織ではない。社会的な不幸を救済する一致団結したイデオロギーの下に集まった心温まる人々の集合体、と私は理解している。前記の私にご縁のあった二先輩、三友人はまさにそれを象徴され、実践さ

れている方々ばかりである。入会後の期間も短く、すべてのライオンの方々とは残念ながらご指導を賜っていないが、職場こそ違え、それぞれの場において誠にお忙しい方々ばかりであり、その寸暇をライオンズに捧げておられるものと思う。

30周年記念行事も盛大に終了し、誠におめでたいかぎりである。今日に至るまでのご苦勞に対し、諸先輩に心から感謝申し上げますと共に、この輝かしい歴史、伝統の灯を、後に続いて守る光栄をも感謝いたしたい。皆様のご健勝を、心からお祈り申し上げます。

お陰で悪弊を是正



永井 賢城

今年は東京が満三十年を迎え、誠におめでたい。私もライオンになって早くも二十五年を過ぎ、我ながらびっくりした。顧みれば、東京は数々の功績を残したのに、私は長い間厄介になって、何のお役にも立たず恥ずかしく思っている。

そもそも二十五年前に羽長谷部と二人で、羽角田のご紹介により、彼をキー・メンバーにするチャンスにもなるということもあり、また数名の知人と月二回の昼食ができること、それに加えて私のような、子どものころから時間の觀念に乏しい者を是正するのによい機会であると思つて、入会させて頂いた。以上のような理由なので、私にとって最初の五年くらいは出席も悪く、皆勤するということは大変なことであつた。羽古川などを見ては、すごい人だと感心すると同時に偉い方だと尊敬していた。

ところがその後、厚生委員会の委員長を命ぜられ、ちよつとしたことで休むに休まれず、ついに一年間皆勤し、それ以来何となく今日まで二十年間皆勤という、私にと

って珍しい記録をつくることができた。これひとえにライオンズのお陰で、私の悪弊の一つが是正されたことになったわけである。その間、会長にもして頂き、その一年間、私のような者を支えて下さった会員諸氏の寛容の精神に、再び感心した次第である。

ここ一年間は、地区デビュティ・ガバナーの役をおおせ付かり、キャビネットの一員としてライオニズム精神について、七十の手習いをしたわけだが、ライオンズは自分の属しているクラブが主体であって、各クラブ間の連絡を取るためにキャビネット等をつくっているのではなくてはならない、ということをもますます強く感じた。

以上、私なりに二十五年間お仲間に入れて頂いた。その間、理屈なしに楽しく過ごすことができたのは、光輝ある三十年の歴史を持った東京の皆さんのお陰であって、ひいては目に見えないライオンズ精神のたまものと、感謝している。

注目を一身に集めた若手



長宗 新作

一九七二年十月、ライフ・メンバーの羽山根実のスポンサーで、名門・東京に入会し、早や十年になった。入会当時三十七歳で、私が入会したことで東京の平均年齢が六十歳を〇・一歳割った、と当時の小宮山幹事が発表され、注目を一身に集めた。十年後の一九八二年二月現在の平均年齢は六十・五歳、ライフ・メンバーや会友を含めると六三・九歳である。

入会して初めて例会に出席してみると、周囲は知名人ばかり、知人はスポンサーの羽山根のみで、半年くらいは大変困った。そんな時、台北でアジア・フォーラムが開

催され、東京でも台北のブラザークラブと懇親をかね、多数出席することになった。その中の一人として、皆様と寝食を共にすることが、メンバーの方々と親しくなれ、ライオンズを知ることでもできると思い、参加した。それ以来、皆様と大変親しくなり、またライオンズの目的も少しばかり分かり、例会に出席するのが楽しくなった。

親しくなったと同時に、一番若いのだからと何でも用事を頼まれ、メッセンジャー・ボーイ扱いであった。いつまでも「シンチャン、シンチャン」とご指命が続き、早く私より若い人が入会しないかと思ったが、新入会員は私より年輩者ばかりだった。これも奉仕の精神で思っているうちに、教育委員長なる役目を指命された。

浮田前委員長が大変ご熱心で几帳面な方で、過去の帳簿や経過を詳しく説明され、この仕事の重要性を徹底的に教えられた。在校生の父母会、卒業後の学生を集め懇親会を催し、いろいろと相談を受けたり、東京の奨学資金が未来を担う子どもたちに役立っていることを確信した。

その後、副幹事の時は黒田と25周年記念式典の準備に、夜遅くまで演出企画を秒刻みで作り練習し、本番も無事終了した時の感激は人一倍であった。この頁を借り、黒田に皆様と共に拍手を贈りたい。

それから幹事に指命され、いよいよ本番という時、会社での重責と幹事との二重の責務で、常日ごろ丈夫であった私が突然、胃潰瘍の手術で入院してしまった。回復も人一倍早かったのをよいことに、皆様に迷惑をかけてはとの思いで無理をしたのが悪く、また腸閉塞で入院、三崎会長や守屋副幹事に大変ご迷惑をかけ、申しわけなく思っている。

元来が丈夫で病気を知らなかったもので、この時ほど健康の大切さを痛感したことはない。それからは食物をバランスよく食べることに努めるようにし、現在はほとんど復調してきた。そんなわけで、ゲスト・スピーカーの指命を受けた時、知人の栄養学会での大家・桑原丙午先生をクラブにお招きし、「成人病予防と食事」について語って頂いた。この種の講演がそれまでなかったことと、年輩者が多いたために大変に好評のようであった。

次に私事で大変恐縮だが、入会当時、クリスマス家族会に出席した子どもたちも大きくなり、自分がそれほど年寄りになったかと、そう言えば白髪も少し目立つように

なつて、責任を人一倍感ずるようになった。これからは、ライオンズのため、東京のために一層の努力をいたしたく、30周年を期に、心を新たに奉仕するつもりである。

思い起こす茫々三十年



岡村 武

大学に入って初めて民法の講義を受けたのは、末広厳太郎教授の講座であった。短身ながら、肝っ玉はタンクのごとき先生の開口一番、説かるるところ極めて異色であった。曰く、

「法律を学ぶ諸君にまず教えるべきは、その根幹をなす『権利の概念』であるかも知れない。しかしいくらその抽象的な定義をもっともらしく述べても、法律学入門はやはり諸君にとつては、星雲を捕捉しようとするようなもので、真の理解が得られるはずがない。だから私はこの際、あえて定義付けはしない。諸君が今後、謙虚に法律の世界に分け入り学習を重ねるに従つて、次第にそれらしいものが諸君の脳裏に像を結び、やがて自ら会得するところがあるに至るであらう、云々」。

回顧すれば、今を去る三十年、たまたま官界に在った時から別懇の偉友、荻大原の勸奨に応じ、我がクラブ発祥に遅れること半歳にして、その一員に加えて頂いた時の我が心境は、まさにこの時をほうふつさせるものがあった。現実にはまだ何ら見るべきアクティビティの実績も持たぬ草創時代のこと、ライオンズクラブの目的綱領なるものを、お題目のように繰り返し熟読玩味しても、それは「軍人勸諭」を訳も分からず丸暗記するようなもので、上っ面だけのこと、ライオニズムの真骨頂に触れるなどとは程遠い話である。

しかし尊敬する先輩同僚と交遊接触を重ねて、共に語り、思索し、読み、学び、行動するに及んで、いつしかにじみ出るライオニズムの香気に浸り、はては溶け込む自分自身を見いだすことになった。

当初ころの例会会場は、日比谷の旧日活ホテルだった。努めて毎回頭を出すようにしてはいたが、時には出席者十名そこそこで、何とも味気ない思いをしたものである。君が代はもとより、ライオンズ・ヒムを歌ったかどうかさえ覚えがない。

先輩としては、やはり故石川欣一と、故高橋貞太郎の印象が最も鮮烈だ。前者については、この記念誌上多くの方々が筆を執られるであろうから、それに譲り、ここには後者について少しく語りたい。

一九五四―五五年度、第三代会長を務められ、続いて当時の湘地区ガバナーの要職に就かれた高橋は、最もスマートにして典型的なライオンであった。

私はその下で、クラブ会計と地区会計を二年間も相務めたのであるが、まだキャピネットの組織も確立せず、まず本部の根城をどこに設けるかということから、心を碎かなければならなかった。それもそのはず、家賃、部屋代を支弁する余地もない貧乏世帯だったのであるから、是非もない仕儀だ。そこでやむなく、高橋がそのオフィスを事務所代わりに提供されるような格好になってしまった。こちらはまあ、押し掛け居候といったところだ。

洋酒をたしなまれるダンディな高橋さんのこと、そのころ貴重品だった本場一流のウイスキーやブランデーのストックが切れることがなかったで、毎月の集まりには、そのご馳走に預かるのを楽しみにせつせと出掛けただものだ。会長が代わる度に事務所移動で、右往左往しなければならぬそのころの千葉さんのご苦労は、大変なものであったろう。

他クラブのライオンながら忘れられぬのは、横浜の初代幹事、これも故人になられたが、荻小山善次郎である。このクラブは充足は早かったのであるが、その後はかばかしい発展を見せず、会員数はむしろジリ貧という傾向さえ、時はあった。

この間、二代目から四年連続して会長を務められた荻小山の苦悩は並大抵ではなかったが、ともすればくじけそうになるところを、理解の深かった夫人の内助に励まされて、孤軍奮闘、

「だれも会長を引き受けてくれませんのでね、さればとて私が引っ込んでしまったら、クラブがつぶれてしまいそうなので、しようがありません。今年もとうとう会長の足が抜けなくなりました」

などどこほしながらも、血色のよい持ち前の福徳圓滿の人懐こい顔に汗をしたたがせながら、太会のパレードなどで悠然闊歩しておられた姿を思い出すと、ほほ笑まれてならない。

さて私が第八代会長、故小野哲の後を承って会長の席を汚したのは、一九六〇年度であるが、任期中は全くの職位素人、酔生夢死、何一つ取り立てて申すほどの働きもなく、お恥ずかしい次第である。ただ一つ、次のような深い思い出がある。

アジア救済事業、またその一環であるインド救済・センター建設に先鞭をつけたのがライオンズクラブであることは、知る人ぞ知るところであるが、在印施設一切のインド政府への移管によって、次第に世人の関心が薄れ、やがてこの輝かしい業績も忘却のかたに押しやられるのではないかと思うと、この偉業に力を致された先輩諸賢に相済まぬ気がしてならない。

このインド救済・センター創設の立役者は申すまでもなく、熊本^{マサ}の宮崎松記博士であるが、この運動の緒は、まだクラブ数もごくわずかだったころ京都で開催された叡地区大会において、各クラブの献金によって、この方面の権威である宮崎博士を、まず現地の視察調査のため派遣しようという決議が成立した時に始まる。村上薫・現国際協会会長も、当時重要な役割を演じられた。

現に同博士も、そのセンター建設運営に至るまでの苦闘史を書きつづった感動的な著書『ぼだい樹の木陰で——インド救済の道』の中で、

「日本ライオンズクラブが、そもそもこの計画の火つけ役であり、最初の海のものと山のものともわからない時から支援援助して下さったのは、国際文化会館である」と特筆明記しておられる。

この一連の活動の初期において、協力支援された政財界、学界、報道関係の一流の有力者は決して少なくないが、そうした功績者の中に、毎日新聞社長上田常隆、高橋貞太郎、全日本仏教会の中山理々各ライオン（いずれも故人）、または健在の前日本医師会会長武見太郎、国際文化会館常務理事豊田治助各ライオンの名を見いだすのは、

我が東京の誇りとするところである。

いづれや宮崎博士を迎えての帰朝報告会の席であったか、たまたま隣に座り合わせ、もたらされた16の映画を拝見し、その真い献身の姿を目の当たりにしながら、四方山の苦心談を伺って、私も深い感銘を受けた一人である。その後何度目の渡印の折、不測の飛行機事故で、所も同博士にゆかりも深い救済・センターから程遠からぬニューデリー空港で、悲命に倒れられたのは、惜しみて余りある痛恨事である。

こうして我がライオンズクラブは、この救済事業の一方の窓口を承ったのであるが、初めて対外的な呼び掛けに乗り出したのは、一九六〇年のいつころであったか、毎日新聞社の好意と肩入れによって、当時まだ有楽町にあった同新聞社屋の講堂で、「インド救済の夕」を開催した時である。もっとも、この講演会の名を正面から押し出すのは敬遠される恐れがあるので、何か別のしかるべき表題を付たようにも思う。しかし世間的には、ライオンズクラブの存在すらもほとんど認識されていなかった。当時のこと、毎日新聞と共催とは言っても、果たして聴衆が集まってくれなかろうか、広い場内にただか二、三十人がボツボツでは、とんだ恥をさらすのではないかと関係者一同、気がでなかった。ところが、ふたを開けてみると、何と八分通りの入りといったところだったので、ホッと胸をなで下ろした。

講演を駐印大使、那須皓先生にお願いし、また題名は失念したが、しかるべき人気映画をトリに持ってきたことが効いたのであろうか、何と言っても、この催しを毎日の紙面に相当のスペースを割いて公告して頂いたお陰を被ること大である。この時くらい、マスコミの大衆動員力の偉大さを思い知らされたことはない。

ちょうどこの年の会長に当たった私は、前座を承って、皮切りに簡単な一場のあいさつを試みたのであるが、思えばこれが、ライオンズクラブが救済運動の実践に足を踏み入れ、一般社会に協力を訴えた第一声ではあった。思い起こして、ひとしお感懐が深い。

初めて街頭に出てみて



尾関 進

私が東京^マに入会して、初めて社会福祉委員長に任命された年に、^マ古川がデビュー・ガバナーとして地区キャビネットにおられた。

東京有楽町^マの^マ伊藤がご近所であり、同クラブが日比谷映画劇場の前で献血奉仕を行っていたなどの関係から、委員長の私に合同で行うことを提案して下さい、^マ古川、私、^マ飯島、^マ平原が活動することになった。一九七七年十月十五日、土曜日の風の吹く日に、当クラブでは初めて街頭で奉仕活動を始めた。その時、^マ飯島は既に数回、ご自身で献血をしておられた。

引き続き第二回を十二月三日、^マ古川、^マ平原、^マ飯島、守屋副幹事と私で行った。第三回を一九七八年二月十八日、^マ古川、そして午前の部に西林第二副会長、守屋副幹事、^マ屋美、午後から^マ飯島、^マ服部で行った。第四回、六月二十四日、^マ古川と午前の部に守屋副幹事、^マ服部、^マ酒井、午後から^マ牧野、私で行った。

そして、その年の社会福祉委員会のアクティビティとして、百三十万円のうち、島田療育園に筋力測定機として五十万円、国際大会記念献血PR車を、東京有楽町、東京日比谷各クラブとの合同アクティビティとして、八十万円を協力した。この件に関し、三崎会長は常にアクティビティは単独で行うという意向であったが、今回は特別ということでご了解を頂き、一九七八年六月十七日、日赤血液センターで、三崎会長、^マ池崎、^マ服部、^マ飯島、私と、他クラブと合同でその贈呈式を行った。

このようにして、当クラブが街頭に出て奉仕することも回を重ね、古川、服部、各

委員長によって一層深まる奉仕活動に、深く敬意を表する次第である。思い出の一端として、これを記した。

家庭に持ち帰りたい教訓



佐野 孝雄

本年30周年を迎え、ご同慶の至りである。一口に30年と言うが、その年に生まれた子どもが立派に激動の時代一九八〇年代の日本を支え、21世紀への道をひらく原動力となる推進役を務めている昨今である。

私は、この名譽と伝統ある東京^マに在籍させて頂いているが、時あたかも30周年ということで、年の巡り合わせの奇遇に喜んでいる。

昨年、日本武道館で一万五千人が参集して行われた日本ライオンズ30周年記念全国大会に、実行委員として宿泊交通部会の要職を命ぜられ、職掌がらとはいえ栄えある式典に参画させて頂き、大過なく全国大会をお手伝いさせて頂いた。その大会の成功はいまだに忘れ得ない。

さらに本年三月、本当の意味での東京^マ30周年記念例会に参加し、いつもと変わりない例会形式の中での催し、会員一人一人が真に喜びを表し、チャーター・メンバーを中心に、和気あいあいの中に厳かに進化した式典、その後の催し物、スマートないや味のない素晴らしい例会であった。今さらのごとく、東京^マの一員として入会したことを生涯の喜びと光栄に思う。

日本最初のクラブとして創立時代のご苦労は、大変なご努力であったと推察する。それから30年、日本のライオンズクラブの基礎を作り、今や世界第二の会員数までに

発展させたその功績は、多大なものであったと思う。

私は、東京⁷⁷に入会を認められて一年八カ月だが、副テール・ツイスターをおおせ付き、委員長不在の折には皆さんのお耳をわずらわせている。それにもかかわらず、スポンサーはじめ会員各位にかわいがってもらい、例会に出席するのが楽しみの一つになっている。日ごろ、なかなかお会いできない重要な役職の方々とも席を同じくし、親しくお付き合いでき、話し合いの中で私の人生勉強、人となりにもまた仕事の面にも、多大の参考になり、有り難く感謝している。

ライオンズクラブの何たるかは、詳細まだ不勉強だが、日ごろの例会での先輩ライオン諸兄とのお付き合いの中での教訓を自分の物とし、会社、家庭に持ち帰りたい。

ライオンズのモットー「ウイ・サーブ」奉仕こそ我々の生命、使命であることを基本思想として、地域社会の共感的納得のもとに、「奉仕が奉仕を生む」を基本理念とし、今一度自分の身の回り、日常生活、仕事、社会環境を見直したい。まずは一人のライオンとして恥じないよう、自らの心身向上に努めたいと思う。

幸い私の職業自体も、「人とのふれあい、地域社会とのふれあい」をモットーとして、国内はもとより、世界の人々の余暇活動のお世話をすることであり、ライオンズ精神を仕事の中にも十二分に生かしてゆきたい。30周年の記念すべき時期に、日本一の東京⁷⁸の一員として名を連ねることできた私は、幸福者であったと感激すると共に、よき時代に在籍したことを、将来の後継者に誇りとして言い伝えたい。

進む文明病を危惧して



清水 重亮

日本におけるライオンズ発祥の地たる当クラブに入会させて頂き、まだ一年余にしかならない若輩者の私にとっては、先輩諸氏の中にあって、ようやく会の雰囲気慣れてきたというのが、偽らざる実感である。私にとってライオンズクラブとは何かは、これから徐々に体験し、私なりに会得してゆこうと考えている次第である。

入会の直接の動機は、古参⁷⁹小宮山に早くから入会の勧めを受けていたところへ、私の居住している地域のライオンからも強力な入会勧誘を受け、これを契機に名譽ある当クラブに入会させて頂いたようなわけである。もっとも、私を取り巻く環境としては、元来ライオンズクラブへの入会準備が調っていたのではなからうかと思っている。

私の亡父は、日本にライオンズクラブが発足する前に、既にロータリアンとして奉仕活動に加わっていたと記憶する。同時に、当時すなわち終戦のすんだ世相を幾分なりとも和らげようと、姫路市にフラワー・ソサエティなる組織を設立し、街に花一杯運動を展開した。

また、私が現在勤務する会社では、その工場長がもう十年近くも前から、その地域社会でロータリアンの一員になっている。さらに工場は、その地域における高校進学生を対象とし、将来のオビニオン・リーダー育成を目的とした奨学生制度を設立し、この全資金（返済不要）を醸出し続けてきている。また毎年、従業員とその家族による秋の運動会での飲食券の売り上げ金を全額、地域の養老施設に寄付している。工場

従業員による献血活動も、定期的に行ってきた。

かように、私の周囲では各種の奉仕活動が早くから続けられてきていただけに、私自身、会社業務に精一杯のころは、自ら時間を割いてまでライオンズに入会しなくても、と考えていた。だが、文明病の進んで行く我が国社会への危機の念を年々強め、また若輩な私といえども年を取ってきてもおり、勤務する会社業績の安定化と共に、自らも微力ながら奉仕活動に参加すべきでは、と考えるようになった。

と言っても私はまだ赤ん坊ライオンであり、お恥かしい次第ながら、一回だけ献血活動に加わらせて頂いただけである。会社業務の円滑な推進を第一義に、ライオンズの一員としての活動をどう自分の生活の中に関連づけてゆくか、まだまだ苦勞をしている段階である。名誉ある当クラブの先輩諸氏を見習ってと思っではいるが、まだ五里霧中というのが偽らざるところである。何分のご指導をメンバー各位に願います。

まだまだ勉強中の身で



末政 圭三

30周年を東京^マが迎えるに当たり、何か寄稿しろという命令なので、渋々、筆をとるはめになった。自分にとり「ライオンズクラブ」とは何か、とつくづくと考えてみたが、結局いまだに分からずじまいでいる。

というのは、私のスポンサーは今では亡き^マ西林長太郎で、入会を強く勧められた。しかし私は当時、会社（大協石油）で原油、LPG等の購入の責任者であり、一年の三分の一くらいは海外に飛び回っているような時代だったので、出席率も悪く、ライ

オンとしての責任も果たし得ないばかりか、他のライオンの方々に迷惑をかける結果になるので、固辞し続けた。しかし、ライオンズクラブの趣旨目的も頭の内では理解できるが、実際、私の立場で行動が取れるだろうか。また自分自身が不完全で、まだまだ勉強中であるのに、何で人様のお世話などできるものか、と自問すると、ますます自信がもてなくなってしまうのだった。

以上の理由をよく説明し、再三辞退したがなかなか聞き入れられなかった。かえってその都度、だれだって自分の仕事を持っているわけだし、一〇〇^マライオンズの目的に合致できると自信の持てる人なんかいない。とにかく東京^マの人々はよい人だからと激励され、とうとう入会をお願いした次第である。

入会して約一年になったが、なるほど^マ西林が自慢していたとおり、東京^マの方々は実に紳士ぞろいで、しかも極めて明るく朗かな人々であった。今では、入れて頂いて本当によかったと思っている。努めて出席して、皆様とご好誼を賜りたいと願うようになった。仕事や立場の違いが食事をしながら歓談する喜びや、ゲストの方の話も勉強になるやら楽しいやらで、大いにエンジョイしている。

しかしながら、このように人間関係とか雰囲気は大変よいのだが、ライオンズクラブは私にとって何なのかということになると、どうも分かったような分からないような気持ちになってしまう。どうも困ったことだが、とにかく皆様のお邪魔にならぬよう、努力してゆきたいと念じている。

地球を一回りした友愛



須賀 栄一

私は予備役陸軍中尉で中国に従軍し、軍人のままで終戦を迎えた。戦場において渡河や陣地攻撃では、工兵将校として自らも死と対決すること幾度か、敵味方の戦死者を目撃して、人間の生命の尊厳、争いを避けて真に平和は希求しなければならないことも、体験を通して承知してきたつもりである。

アメリカのアイゼンハワーは、第二次世界大戦末期の欧州連合軍総司令官であった。彼もまた戦場に在って、戦争の悲惨から平和への変遷の中で、米国の大統領に就任した。大統領就任に際して、聖書の上に手を重ねて米国民に宣誓する姿を、テレビで見たのか写真であったのかで見て、大層感動を受けた。カーターもレーガンも、エリザベス女王もフィリップ殿下も、戴冠式や結婚式に際して、神父や牧師の前で宣誓を行っている。宗教のある国民一人一人に極めて説得力があり、また共に納得のゆく手だてができていくことに、深い感銘を覚えた。

日本では結婚式は神式で、葬式は仏教で、宗教心はあるが、キリスト教の神、仏教の釈迦、イスラムのアラーに匹敵するものではなく、宗教が挙げて国家に影響するものはない。国民への強さは、天皇陛下ないしは皇室への畏敬に及ぶものではないのではないだろうか。

ライオンズクラブのモットーに、「ウィ・サーブ——我々は奉仕する」とある。どうやらこの奉仕の意味が、アメリカと日本には解釈の上で大いに違いがある。アメリカの奉仕は神を通じて、神に報い、神に感謝して初めて奉仕の意味が鮮明になるわけ

で、アイゼンハワーの大統領就任宣誓を見て了解できたのである。「友愛と寛容の精神を養い、平和と自由を守り、社会奉仕に精進する」とあるが、これまた、すべて神の国で神の前においてと説明を付けなければ、筋が通らない。従って日本における「ウィ・サーブ」は不得要領と言うものであり、奉仕とは何たるかを日本流に再認識の上で解釈の要、ありやなしや。

私は、大阪梅田の雲小川正により入会、十年後、賛友成靖一のスポンサーで転籍して十年、ようやく二十年を一〇〇歳出席することができた。あまり積極的な活動は好むところもなく、また渦中に没することは避けてきたつもりである。皆様の支えと励ましを受け、相互理解の精神とか社会奉仕に目を向けることなど、数々教えられたライオンズクラブに、頭を垂れて感謝を捧げる。これからは今一度初心に帰って、自らお伴させて頂くよう努めねばと言ひ聞かせている。

海外でのライオンとしての体験を二つ。

その一つは、フィンランドはヘルシンキの夜の例会に出たこと。ヘルシンキ駅はサリネンという著名建築家の設計によるもので、駅を見下ろすホテルに投宿、ライオンズの例会場のマークがあったので、その日市内に例会があるならば知らせてほしいと頼んで、夕刻、例会場に駆け付けた。スオミ語の真ただ中、会場までのタクシーでも言葉の不自由さに閉口したが、三十人ほどのメンバーで貴族的雰囲気、ちやうどその日の卓話は放送の話であった。二時間ほど、ゆっくり落ち着いた静かな夕食会であった。日本のどこかにあってもよいなと思った。立派な大理石の座のついた旗立て付きのパナーを頂戴した。

今一つは、ソビエトはウクライナの南端、黒海に面したオデッサのホテルでの話、東京ゴルフクラブの十一番で待たされている時、岩福岡、岩土井、岩細田に、イライラよけにこの話をした。大略はこうである。

ホテルの食堂のサービスがよくない。私はあきらめて、文春を読んでいた。ふと、隣席のアメリカ人老夫婦がサービスが悪いとブツブツ言い出したのに気がつき、目が合って、サービスの悪い話が縁でこちらにこないか、それではということになり、談話またライオンズクラブの話に相なった。アメリカ老人は、息子がサクラメント・ダウンタウンズのメンバーであることを言い出したので、当方からパナーを贈ること

にした。老夫婦は大西洋、アメリカ大陸を西へ、サクラメントに帰ったら息子さんを通じてこのバーをクラブへ届けて下さい、私はアジア大陸をソ連から、日本海を渡って日本に帰る。サクラメントからのバーが届くのを待ちましょと、そんな話の間に米日イライラ族はめでたくブドウ酒の杯を重ね、サービスの悪いことも忘れて夕食を楽しむことができた。

ソ連というところで、アメリカ人と日本人が友愛の精神をライオンズによって結ばれたことは、素晴らしい思い出であった。もちろん、月余にしてサクラメント・ダウンタウンのバーが、太平洋を渡って私の手元に届いた。めでたしめでたし。

今後の在り方を考える



杉浦 重敏

日本におけるライオンズクラブも誕生以来三十年を経過し、会員数も十四万を超え、世界第二のライオンズ王国にまで発展したことは、誠に喜ばしいことである。ここでまず、誕生当時の先人たちの苦勞を努力に対し、改めて敬意を表する。

ところで、一般の人々がライオンズというものをどう見ているだろうか、ということについて考えてみたい。率直に言って一般の人々の受け取り方は、「しかるべき社会的地位にある人、あるいは経済力のある人たちの親睦団体」とか、「ロータリークラブに似たもので何となくエリートたちの集まり」と思っている人が、意外に多いのではないだろうか。少なくとも、社会奉仕を第一義とする団体とは受け取っていないように思われる。

全国各地のクラブのアクティビティによって、この誤った考え方は少しずつ変わっ

てきつつあり、ライオンズに対する正しい認識も増えていると思うが、今なおこうした考え方の人が多いのはなぜだろうか。また今後我々としては、どういう方向でクラブ運営を考えたらよいのであろうか、考えてみたい。いささか独断の点は、ご容赦願いたい。

一、メンバーについて

どのクラブでも、社会的地位とか経済的実力というものが条件になっているように思う。特に大都市では、いわゆる名士と言われる人でライオンズかロータリーのいずれかに入っていない人はない、と言っても過言ではないくらいで、少なくとも奉仕の精神を第一条件にしているところは少ないと思う。ライオンズ誕生の原点で考えた場合、まずメンバーの選定から考え直すべきではないだろうか。

二、費用について

年会費初め諸行事の費用を含めると、年間の負担は決して少なくない。この辺り、奉仕の精神だけではついてゆけないものがあるのではなかろうか。時々メークアップに出かける他クラブの例会でも、驚くほどの金額のファイブ、ドネーションを見ることがあるが、これが本当のライオンズクラブの在り方かと疑念を持つことがある。謙虚に検討すべき問題ではないだろうか。

三、アクティビティについて

アクティビティの対象が、とかく弱者奉仕と「物」に偏り過ぎていないだろうか。不遇者に対する経済的援助も意義のあることではあるが、現在やっている献血運動への労力奉仕などは、もっと評価してよいのではないだろうか。大事なことは、ライオンズが奉仕の実践を自ら行うことではないだろうか。

四、出席について

例会に出席し食事をして、一言も発言せず帰るだけではあまり意味がないのではないだろうか。それよりも、アクティビティ活動に何回参加したかを評価するほうが意義があると思うのだが、これについては新顔時代はなかなかライオンズのしきたりも分からないし、借りてきた猫のようにしているのも、やむを得ない点もある。在来メンバーは新入メンバーが早く溶け込めるよう、雰囲気づくりに気を配るべきであらう。

以上、乏しい経験にもかかわらず、一般人のライオンズクラブを見る目と今後の在

り方について、独断と偏見で述べてみたが、少しでもこういう点に配慮することにより、ライオンズの実体をより理解してもらえないだろうか。

勉強になった奉仕活動



谷藤 正三

盛り場の街道で、段幕の張られた献血車を中心に行き交う人々に献血を呼びかける各種のボランティア活動はかつて私は目にも耳にもしてきなが、要するに自分は既に糖尿病と診断され、これに応募する資格のない人間だという空しさに近い部外者くらいで、正直のところあまり関心を持たない、一人の非情な人間であったことをここに告白しなければならない。

私は一昨年の夏ごろから、羽長谷川に毎月の会合で会う度に、ライオンズクラブ入会の熱心な勧誘を受けた。さらに、今は故人となられた羽西林からも重ねて勧誘された。不精者で至って行儀の悪い自分は、時間の厳しいしかも高い出席率を要求されるクラブの皆さんに、果たしてついてゆけるかどうか、すこぶる躊躇し迷いに迷って、その回答に大変な時間をかけてしまい、熱心なご両人に迷惑をおかけする結果になってしまった。

輝かしい名誉とその歴史を誇る東京²²に入会して日の浅い私は、今なお、その崇高なライオンズ精神と目的について会得したかどうか、甚だ疑問な未熟者でもある。ただ先輩各位の友情に支えられ、出席の回数を重ねて今日に至り学んだことは、当クラブの方々は一方では極めて多忙なご自分の仕事を消去しながら、かつ地域社会の福祉向上のために尽くされているということである。奉仕を志す人々が、相互理解のきず

なによって融和をはかりながら、この活動の実践のために励まし合っている努力に対し、深い感動に打たれている。このクラブの一員に加えて頂いた名誉を大切に、その一員として東京²²の名を汚してはならないと自分に言い聞かせている。

このころはようやく雰囲気にも慣れてきて、毎回の例会を勉強の場として、心から楽しみにしている。危惧していた不精者の私が、先月の例会で一〇〇出席賞のピンを受けることができ、スポンサーの羽長谷川にいささかご恩返しができた。これからも引き続き、例会参加の勉強が続けられることを喜んでいる。だんだん救われる者の立場から、次第に実践への参加と、勉強と努力をもっともっと重ねてゆかねばならないと反省もしている。

昨年の暮れのクリスマス・パーティには、愚妻と共に参加して楽しい一夜を過ごした。また幸い、30周年記念大会にも参加できた。夫婦がそろって初めての皇居参観に参加できたことも、私のこれからの人生の記録の一頁として、生涯忘れ得ない思い出として永く残ることであろう。

新参の私が取りつきやすい奉仕活動の一つに、献血募集への参加があると自分で考えてみた。まだ数回の参加で、もちろん語るほどのものは何一つないし、むしろ不慣れのためウロウロするばかりで、皆さんの邪魔になってきたのがせいぜいである。いつか寒い日の土曜日、羽服部の熱心な活動にただただ敬服し、また東京有楽町²³の経験深い活動と熱心な動員ぶりに、深い感銘を受けて帰ってきた。

陽気もよくなった四月には、羽飯島とも顔を合わせることができた。先輩の献血募集の要領を拝見しながら、この時は勇気を出して受付の椅子に座ってみた。左右の要領をまねながら、善意の応募者に用紙を渡し、ナンパリングのスタンプを押し、次から次へとお礼を述べる。こうして対話し、接触させて頂いた時の感想は、特に善意の交換の味はいは極めて新鮮で、不思議なくらい心地よいものだった。こうして迎える側も、これが何がしかでも困っている人、苦しんでいる人のための奉仕につながっているとの意識がわいてくるのも、不思議である。

経験のある献血者は、少しも躊躇することなく、つかつかときて椅子に座る。座ると同時に、所定の用紙にサラサラと書き込む。初めての献血応募者は、ぎこちなくためらいながらもその動機づけを果たそうと決心して、用紙の書き方をおさるおさる尋

ねてくる。この人もきっと次回の献血の時は、胸を張ってつかつかとこの椅子に近寄るであろう。この現象を目にして、「何事も最初が肝心だな」とつくづく勉強になった。

献血はその条件上、どうしても若い男女の参加が圧倒的である。金銭を離れて、肉体の一部である若い血が、求める者と求められる者同士の間の同胞愛、そして友情、社会への奉仕の心地よいあの時の充足感、そうどこでも得ることのできない、本当に人の心を幸福にするものだ。

「いまだ人道廃れず」と感銘を受けたり、また「今時の若い者は……」とさりげなく口の端に上る若人論も、この時はやはり誠に「頼もしい若者」への感謝に埋まり、リリしいばかりの若者の次の世代への期待が、いっぱいにくれあがる気持ちを抑えられない。私は最近、町を走る赤十字マーク献血車を見たり、また多く盛り場で献血車を中心に献血を求める呼びかけ、そしてこれに応じて善意の献血者の姿を目にする時、東京入会前のかつての無関心時代の長かった自分のこし方の不明と、社会に対する甘えの罪深さが反省されてならない。今、ライオンズ活動のほんの一端に参加できたお陰で、日に新たに、今まで知らなかった奉仕の活動がこのようなにも新鮮に映り、心をゆすり、それらに深い関心を払いながらその場を通り過ぎるこのころである。

インド救ライ事業とライオンズ



豊田 治助

私は、大阪と岡山のチャーター・メンバーとして、二つの認証状に登録されていることを、無上の光榮としている。

従って、神戸における第一回の年次大会から出席することになった。過去の幾多の年次大会を振り返ってみると、最も感動したのは、やはり京都における第五回年次大会であったと思う。この大会では中沢良夫ガバナールが、緊急提案として「インドにおけるライオンズ調査のため、宮崎松記博士を派遣する件」を大会のアクティビティとして上程され、三千名を超える大会参加者に賛同を求められた。

この提案の内容は、人類愛に基づくものであり、かつ外国における不幸な病魔に苦悩している人々に対する国際的な奉仕活動であることによって、会場の我々に多大の共感と感銘を与えた。私の親しい岡山のあるメンバーは、感涙されながら、私に次のような感想をもらされた。

「ライオンズクラブというのは、紳士の社交倶楽部的性格のものだと誤解していたが、先ほど上程されたアクティビティによって、なるほどこのような活動をするクラブこそ、真に国際社会奉仕団体の名にふさわしいものだと思惑しました。これから私は、ライオンズの目的達成のために、メンバーの一人として精進しなければなりません」と、固い決意を披瀝された。

このインド救ライ事業の発端は、日本のライオンズクラブによってまかれた小さな種子ではあったが、その後、財団法人のアジア救ライ協会が、インドに対して十七年間の長きにわたって、苦難の道をたどりながらも根気よく、インドのライオンズに対する医療活動を継続した。その結果、この一粒の種子が亭々とそびゆる大木にまで成長した、と言って過言ではないと考える。

設立されたアジア救ライ協会 (Japan Leprosy Mission For Asia 略称 JALMA) には、理事並びに監事として、多数のライオンズ・メンバーが関与することになった。すなわち、宮崎松記、高橋貞太郎、武見太郎、上田常隆、中山理々の各位と私である。

特に上田には、一九七二年九月からこの協会の理事長に就任して頂き、七六年四月には、アグラのセンターをインド政府（保健省）に移管する大任を果たされた。上田の誠実なお人柄が、日印両国の多くの人々から敬愛の念をもたれて、引き渡しの式典がどこおこなったのであった。

その後、インド保健省はこのセンターを「中央 JALMA ライ研究所」（国立）と

命名し、また院長として、国際的に著名なインドのライ学者K・V・デシカン博士を任命した。かくして、インドの中央政府は日本人の善意と友愛の精神を、永くこのアグラの地に語り伝えてくれることになった。私は、過去二十九年に及ぶライオンズの生活において、このJALMAの活動に参加できたことを、心から感謝している次第である。

ライオンにつかまって



殖 栗 文 夫

つかまっていたいきさつ……

昭和六年の冬、アルバーニーからニューヨークへドライブして帰る途中で、ライオンズのマークのついた道しるべを見たのが、私がライオンズクラブを知った最初のいきさつである。

東京へも度々入会を勧められたが、多忙を理由に延ばしていた。ところが、東京の会員であった親友の奥山清平氏が、今度自分は東京新橋に創立のためそちらへ移籍するから、そのあとへ入れと強く奨められた。それではということで入会させてもらったのは、昭和三十二年四月である。

さてお仲間へ入れてもらおうと、すぐいろいろの委員にされ、昭和四十三年、野井忠博が会長の時は幹事をおおせ付かった。次いで昭和四十七、八年は青少年交換委員長を務めた。これは忙しい仕事であったが、また多くのメンバーとも親しくなる機会であった。そしてライオンズの奉仕活動の実験を体験した。またアメリカのライオンズが自分で手を下し、時間をさいて奉仕していることもよく知ることができた。

奉仕の喜びを学ぶ……

無私の奉仕の喜びは、自分が実際に奉仕して味わうのである。昭和四十五年の岩手県小中学生へのスズラン給食キャンペーン、昭和三十四年以来二十年続いたインド救済事業などは、特筆すべきものである。

私も国際委員長をやっていた時、たまたまブラジルの奥地で邦人移民にキリスト教伝道と幼稚園をやっている宮本純子さんのことを聞き、東京日本橋の森大森繁の助力を得て、そのころ普通では手に入らないテープレコーダーを贈って、予想外の喜びを得たことも快い思い出である。

ライオンズクラブが我々に教えたことは、奉仕の喜びとクラブの意味である。クラブという思想は、日本人にはなじみの少ないものである。しかしこれは、民主社会に不可欠のものである。これを実践で我々に教えたのは、このクラブの大きな貢献として記憶しなければならない。

定着したライオンズ……

ライオンズクラブができたのは、終戦後の何もかもアメリカ一辺倒の時代であった。最初はその波に乗って発展したとも考えられる。外部からは、変な三角帽をかぶって一人よがりの奉仕を口に唱える連中だ、という陰口さえ聞かれたものである。本部はアメリカだと言うし、世間ではこのクラブはアメリカをまねているものだという感じがあった。しかし、その後アメリカ一辺倒の時代は去った。そのうちにクラブや会員の増加も低調気味と聞いて、日本でのライオンズクラブの前途はどうであらうか、と多少気になった。

クラブの機関誌「ザ・ライオン」のことを考えてみたい。私が昭和三十六年第三代目の編集者となった時、まず全会員に会誌をよくするためのアンケートを配布したが、わずか四通しか返事がなくてがっかりした。そのころは部数は一万五千であったが、今日では十四万の堂々たる雑誌に成長している。そう心配したものでもない。

全世界のライオンズクラブの動きを見ると、日本のクラブは着々と伸びている。京都の村上薫氏を国際会長に出す勢いである。これこそ国民政交のいい例として、誇っていいことである。定着したら、次はそれを基として発展だ。

青少年に愛と希望を



浮田 祐二

「ライオンズクラブ」は、世界最大の社会奉仕団体に所属する単位「クラブ」であり、一九一七年アメリカで誕生し、今や全世界に広まり会員数は一〇〇万人に及び、日本は「アメリカ」に次ぐ世界第二位の規模となり、単位「クラブ」一、七〇〇に達し全会員は一〇万に近い。

「ライオンズクラブ」の名称のいわれは、Liberty Intelligence Our Nation's Safety の「イニシャル」である。

これを要約すれば、自由を守り、知性を重んじ、われわれの国の安全をはかると云うにあり、そのことが取りも直さず「ライオンズ」の「スローガン」でもある。

そしてその誓いの言葉としては、「われわれは知性を高め、友愛と寛容の精神を養い、平和と自由を守り、社会奉仕に精進する。」と云うことになっている。

特に「ライオンズメンバー」の資格の一つとして幼児たちに親しまれる人となることが挙げられているが、このことが私の心に強く触れたので、一九六三年入会することとなった。

私の所属する東京「ライオンズクラブ」は一九五二年に誕生し、日本では初めての「クラブ」であるだけに、種々の社会奉仕活動をしており、その数、十指に及ぶ。私は当初少女委員会から始め厚生委員会、安全委員会等の委員を歴任したが、一九七〇年教育委員会の副委員長に推されて以来、七ヶ年間連続、教育委員となり、委員長三回、副委員長四回計七期を教育委員会に奉仕している。

この教育委員会の事業のうち最も顕著なものに奨学資金制度と云うのがある。その目的は、社会のために有為な人材を育成することを目的とし、高等学校に在学する都民で、成績優秀、身体健全であって、経済的理由により修学の困難なる者に対し、奨学金を貸し付けすることを規定している。

そして、この制度は一九五九年（昭和三十四年）、一人当り月額二、〇〇〇円年額二四、〇〇〇円とし三人に支給されたことに始まり、昭和三十七年には月額二、五〇〇円年額三〇、〇〇〇円支給人員九人となり、この金額は昭和四十六年迄続いたが、昭和四十七年に至り、物価騰貴のため月三、五〇〇円年四二、〇〇〇円に改定、更に昭和五十年には狂乱物価に対応、一躍月五、〇〇〇円年六〇、〇〇〇円に改正。奨学生の人員の総計は今や五十七名に達している。

私は教育委員会の高校生奨学資金制度が創設せられて九十年を経過した時に同委員になったが、ここで奨学生の動静を知ることが今後のこの事業の継続の可否にもつながる重要な事項と思い、当時卒業生二十七名の奨学生の座談会を開催することを提案した。

出席者は僅かに十二名であったが、「クラブ」側からは会長、委員長、委員、都教育委員等を含め約二十五名となり、十周年記念を兼ね反省と将来について大いに意見を交換した処、会員の中には多少なりとも返済出来る余裕があるから同窓生を一人でも増してほしいとか、養護施設の子供達にも門戸を開放してほしいとか、種々活発な意見が出て、第一回の懇談会は有意義に終った。

爾来、五回に亘り座談会を開いたが、已に会員数も五十七名に達し、ちらほら奨学生も結婚期となり、奥様同伴の方もあり、和いだ雰囲気の下に会談が出来るようになって来た事は、何よりの幸である。

東京「ライオンズ」は、ここ数年資金確保のため、会員尾上松緑「ライオン」等の好意で歌舞伎座を借切り、その三階席を奨学生及びその家族に開放しているが、会員よりは「血は水より濃い」との好評を博し、又奨学生よりは左記の様な嬉しい礼状が多数、舞い込んでいることは、取りも直さず青少年に愛と希望を与えているものと確信し、この事業に対し大いに生甲斐を感じている。

筆者あての手紙（原文のまま）

立春も過ぎ暦の上では、春めいてまいりましたが、まだまだ朝夕風の冷たい日日が続きます。

思い起せば、昭和四十六年四月より三ヶ年間、奨学生として、大変お世話になりました。御慈悲溢れるお恵みを戴きまして、ここに、目度く卒業の日を迎える事が出来た事を心より感謝致して居ります。

広い東京で、星の数の如き学生の中より推薦され奨学金を戴き青春を謳歌し、広く知識を得られた喜びと誇りを胸一杯に、明日への希望に燃えています。

東京「ライオンズ」の集いの日には、必ず参加させて頂きました。次代の若人の為に、お力を貸して下さる姿に、心の安らぎを覚え、明日への勇気に、湧き立つ思いで、お話し合いを致しました。

今日は又、合同「チャリティーショー」に御招待下さり歌舞伎を拝見させて頂き有り難うございました。一生の思い出となるでしょう。

今後共「ライオンズクラブ」の御発展を祈り上げ「ライオンズクラブ」の一ツ星としてためめ努力を続けて行きたいと思えます。

末筆乍ら皆様の御健康を祈り上げます。

浮田 祐二様

さようなら

外山 真弓

昭和五〇、七

『海は遙か』より転載

インタナショナルの意味



若林 法雄

一九五三年四月、神戸のスポンサーで大阪が誕生した時に入会してから二十九年、ライオンズクラブのご厄介になっている。一九六三年四月に、大阪から東京に移籍したので、大阪で十年、東京で十九年ということになる。

その間、東京25周年の年に私が会長をお任せ付かり、25周年の式典が、幹事の黒田の並々ならぬご努力と、会員皆様の絶大なご協力により、好評裡に済みますことができたのは、何事にも換え難い思い出となった。

今一つ、一九五七年十二月、マニラで行われた第一回アジア大会に出席したことも、忘れ難い思い出である。

一九五七年と言えば、日本にライオンズクラブが誕生してからわずか五年目、サンフランシスコ講和条約締結後六年目のことである。記録によれば、一九五七年十二月当時、日本のクラブ数は三十余りしかなく、従って、マニラ大会への日本からの参加者はわずか十八名に過ぎなかった。私は大阪から先輩の故郷岡山と二人で参加したが、東京からは三崎父子と故郷塩原が参加された。

ご承知の通り、日本のライオンズクラブはマニラのスポンサーによって生まれたので、マニラでは第一回アジア大会に日本が参加することを、大いに歓迎してくれた。しかし戦後わずか十二年、マニラには戦禍の傷跡はまだ生々しく残っており、戦争中の日本軍の統治に恨みを持ち、排日の空気のあることは出発前から聞かされていた。

フィリピンのライオンズクラブには、各界の知名のフィリピン人が多数参加しており、フィリピン人社会において、ライオンズクラブの評価は比較的高いことだが、その大会に日本から戦後初めて、日本人が参加するので、戦時中の悪印象もあり、参加した香港や台湾の代表団以上に、日本人代表団を好奇の目で見ていたところと思う。

当時、日本航空はまだマニラに就航しておらず、航空会社はエアフランスであった。使用機もプロペラ機で、羽田からマニラまで七時間近くかかったと思う。所持金も五百^円に制限され、渡航には一々、日銀の許可を必要とした。昨今の観光ツアーラッシュの時代から見ると、誠に窮屈な時代であった。

アジア大会は第一回でもあり、参加国も日本の外には台湾、香港、それに地元のフィリピンの四カ国に過ぎなかった。台湾、香港の代表団はいずれも日本より小人数だったと思う。大部分の参加者は、地元フィリピンの各地のクラブから集ったフィリピン人であった。大会は、当時のフィリピン大統領マクサイサイ夫妻が出席された舞踏会等もあり、我々日本人代表団は大統領と一緒に写真を撮るなど、誠に和やかな雰囲気の中で、すこぶる盛会であった。

大会の全期間中、戦争中を思い起こすようなことやなことは、一度もなかった。むしろ、フィリピン人が戦争中の日本人に対するいやな思いを和らげるための、戦後初めての対話の場ではなかったかと思っている。こう言った意味で、ライオンズクラブがインタナショナルであるということは素晴らしいし、マニラ^{マニラ}が日本のライオンズクラブのスポンサーになったことも、素晴らしいことだったと考えている次第である。





地域改善と環境保全のアクティビティ、浜町川埋立緑地帯（1972年度）と明石町あかつき公園（1973年度）に植樹



1974年から、東京霞が関区、東京番町区と合同で、歌舞伎チャリティショウが4年続いた



訪日した台北青少年団を迎えて（1974年）

座談会 ライオニズムの源流をさぐる



出席者 之勝重道 夫胖
久正 正陽 文
原本川 岡栗 田
大浜 古福 殖 細

東京^{ブラ}結成を演出した人たち

細田 東京^{ブラ}の30年史をまとめるにあたり、古い方々にみんなの知らないことを語り合ってもらい、後々に残しておきたいということでこの会をもちました。^{ブラ}福岡、^{ブラ}殖栗というベテランに助けて頂いて、私はその助手として進めたいと思います。^{ブラ}浜本によると、引き出し役でなくストップ役が要る(笑)というお話でした。それではお始め下さい。

浜本 まず導入の経過から始めますかね。一つは、ここに村田省蔵さんの名が全然出てこないのが残念なんです。もともと本人は知らないことで、やむを得んですが。

細田 マニラ^{ブラ}がスポンサーで東京^{ブラ}をつくる時、村田さんが会長だったフイリピン友の会に呼びかけた、ということでしたね。

浜本 村田さんは近衛内閣の通信・鉄道大臣を務められた方だが、初代の駐比大使として、当時のラウレル大統領の渉外係のようなことで、フイリピンの高位高官に顔が売れていたんですね。

福岡 私がマニラに駐在している時に戦争が始まって、その後、軍の命令で私が日本人会の会長をやりましたが、その当時すでに現地に商売を持っている人たちを会員とする比律賓協会があつて、三井物産の支店長が会長をしていた。軍政関係でいろんな方が入つて来られて、内務省からは塩原有さん、それから石川欣一さんは文化使節みたいなことで、いろいろ幅広い活動をなさつた。その

時の交友関係で、戦後、フィリピン友の会というのが出来たんですね。

浜本 比律賓協会というのは、徳川公爵が始められた歴史の古いものなんです。村田省蔵さんが関西財閥に呼びかけて、戦後に設立したフィリピン友の会は、毎日新聞のマニラ支局長だった石川欣一さんが初代理事長でした。その後、会長の村田さんが比律賓協会から頼まれて、そちらの会長も引き受けて、そのうちに友の会のほうは自然消滅した形になっています。

細田 その友の会に、ライオンズクラブ結成の話が持ち込まれたんですね。

浜本 そうです。村田さんは初めからロータリーアンで、自分が入るわけにはいかないが日本にもいいことだから、と勧めてくれたんです。

細田 それでは、東京で結成の背景をまとめて頂きたいんですが……。

古川 中野で耳鼻科の医者をしていたころ患者



に今村栄吉さんという方がいました。この方は、戦争前からフィリピンにいて、フィリピンの独立運動を陰で支えていたんですね。米西戦争の時の有名なアギナルド將軍の娘と結婚して、フィリピン

の人たちのために尽くしていたんです。

福岡 現地で日本軍に対する不平が出た時、今村さんは自ら買って出て苦情処理事務所を作って、フィリピン関係の潤滑油になられた。

古川 それで多くのフィリピン人に慕われていたんですね。時間的に言いますと、一九五一年九月にサンフランシスコ講和条約が調印されて間もなく、今村さんのところにゴンザレスという方から、日本にライオンズクラブを作らないか、という手紙が参りました。私もそれを拝見しましたが、今村さんはこれをフィリピン友の会へ持って行き、村田さんを担ぎ出すことに成功したわけですね。

もう一つ別の時間的なお話をしますと、一九五〇年に朝鮮戦争が始まって、五一年四月にマッカーサー元帥が罷免され、アメリカの対日政策が一八〇度変わっちゃった。ちょうどその年の六月、ライオンズクラブの第34回国際大会がアトランティック・シティであって、その前後に恐らくドイツと日本にエクステンションをしようという話が出たんだと思うんです。その三年前に、ハワイのスポンサーでマニラにクラブができて、ゴンザレスが国際理事としてその提案をしたのでしよう。ドイツには一九五一年十二月八日に、デュッセルドルフに最初のクラブができました。そして次は日本、当時フィリピン友の会に出ていた石川欣一さんのところに話が行って、トントンと進んで、非常に短期間にできたんだと思います。

細田 フィリピンからその結成のお手伝い人が来ていましたね。

古川 ええ、ジョージ・パレネンゴアという方

ですが、彼は国際協会の駐在員として来ていたんです。最初、今村さんのところに毎月五百円でやらないか、と言ってきたそうですが、フィリピンに頼んで来てもらったわけですね。それで一九五二年の三月五日に工業倶楽部に出て来いと言われて、あそこに最初に行ってまず会費を払えということ、会費を払って入った覚えがあります。パレネンゴアさんがいろいろなやり方を指導して、そこへ村田先生がロータリー方式を持ち込んで、日本のライオンズがロータリーに似ているのは、そのせいなんです。

細田 それで最初に集まった方はフィリピン友の会の関係者を中心に、それを伝え聞いた方々だったんですね。

古川 そうなんです。そのほかに今村さんと毎日新聞の関係の方です。政治家では星島二郎さん……。

浜本 ライオンズクラブでは昔から、いいほうの政治家がメンバーになった。

古川 毎日新聞社には、この結成について大きな力を入れて頂いたんです。と言うのは一九五〇年にヘレン・ケラーを招いたのは毎日新聞社で、盲人福祉には特に関心を持っていましたので、毎日新聞社がライオンズに石川先生を出した、という形ですね。そういうわけで背景だけ申しあげると、物が出来る時は、そういう客観情勢というものがあって、その中で演出する人がいて出来るわけです。だから村田先生とか今村さんというのは、そういう陰に隠れている人たちだ、と考えて頂きたいと思います。

お礼に行つて胴上げされた

大原 今までのお話は、フィリピンと日本の最初の結びつきのことですね。そこで私がここへ入ってきた経緯を申しあげます。当時私は、千葉の製鉄所建設に没頭していて、まず溶鉱炉を建てたわけです。ところが、肝心の原料の手配が手遅れで、何とか早く原料の確保をしなくてはと考えていました。

そのころで一番近いフィリピン、もう少し足を伸ばせばインド、こういう方面に何かいい縁がないかと調査していたところへ、今のお話の今村さんという、向こうの事情に非常に明るい人がいるというので、ざつくばらんに言えば私の部下として雇い入れて、今村さんも張り切つて南方資源の研究をしておられたんです。

ある日突然、今村さんが僕の部屋にやってきて、「実は今度、フィリピンのほうから手を差し伸べてきて、ライオンズクラブというのができるので、ぜひ入ってくれ」と言うので、今村さんの勧めに従つて、僕のところからは二人で入ったことになつてゐるんですよ。

福岡 私が知つていたころの今村さんは、木材関係の買い付けが主力でした。鉄鉱開発では、並河栄治郎さんが実績の濃い方でした。私自身は、ダバオで発展された古川義三さんの紹介で、東京ができた二年後に入会しました。

古川 忘れないうちに話して置きたいんですが、

今村さんという方は鹿児島出身で、早稲田を出て中野正剛に師事したわけです。そして戦争前にお前はフィリピンの独立運動に挺身しろと言われて、中野正剛の紹介状を持つて団琢磨のところに、お金を出してくれないかと単身乗り込んだそうです。そうしたら五万円出してくれて、それでフィリピンへ行った。その後、向こうの独立を忘す人人と話し合いができて、奥さんの関係でラウレル大統領やケソンさんとは、いとこ関係になるわけです。そういうことで、日本に帰つても、決して表に出ないんです。だからライオンズを始める時も、おれはでんでん虫だと、自分を出ないで人にやらせる……。

浜本 今村さんはそういう人でしたよね。

福岡 お酒に酔うと、真剣でワツとやられるんだ。そういう志士ですよ。

細田 フィクサーだったんですね。その時お幾つぐらいだったんですか。

福岡 僕と同じ年ぐらいかな。

古川 いや、もっと上です。古川義三さんと、福岡の間くらいでしょう。

福岡 義三さんは九十二、私は八十三。

大原 その古川さんに関連した話があるんです。私が東京の二代目の会長になった時、偶然ですが、私が団長で鉄鋼十社の資源調査団がフィリピンに行くことになったんです。そこで、フィリピンのお陰で日本にライオンズクラブが立派にできたが、まだ公にお礼に行っていない。私はその点から前々から気になっていたものだから、実はこういうわけで、ついでと言つては悪いけど、お礼の意味を兼ねて公式訪問します、とフィリピンのクラ

ブへ連絡して行つたんです。向こうでは非常に喜んでくれて、マニラとケソンのクラブで大歓迎を受けました。それから後、調査の仕事で各方面へ飛行機で行つたところが、税関とか飛行場のチーフに相当する人は、ほとんどライオンズに入つてゐるんですよ。その人たちにも名刺を渡して、日本のクラブからお礼に来たんだ、いろいろお世話になったが今後よろしく頼む、ということ必ず言つたんです。そして、ミンダナオ島のダバオへ行きました。

福岡 ああ、古川拓植の根拠地だ……。

大原 ええ。その時の飛行場は狭くて、まるで



お粗末だったんですが、その入り口に若い、ならず者みなの二十人ばかり、ブラブラやつてゐるわけです。ちよとどそのころの空気は、日本の材木商が浜辺で取り囲まれて袋だたきにされたとか、そういう話しか聞かない時代なんです。それで飛行場から外へ出たら、その連中がワーワーと言つて私を取り巻いてきた。これはまた袋だたきかと、こちらは腹を決めて、「おれは日本のライオンだ」と言つたら静かになつて、よく聞いてみると、向こうは「ミスター・フルカワ」と言うん

です。お前は古川かというわけですね。

古川 東京に入っておられた古川義三さんのことですね。

大原 私の髪はほとんど白くなっていたし、体格好もよく似ているというので、とうとうミスター・フルカワにされて、胴上げされちゃった。

福岡 そう言えば、よく似ている。

大原 袋だたきが胴上げになっちゃって、それからみんな親しみをもってくれて、すぐダバオのライオンズクラブのところへ、日本から偉い人が来たと連絡してくれて、会長が飛んできたわけです。何でもフィリピン一のゴルフアークで、家に連れて行かれ、部屋いっぱいゴルフの賞品を見せて、気に入ったのがあったらどれでも持って帰れと言われて、とにかく記念だから一番小さいのを一つもらって帰ってきました。

福岡 古川さんが尊敬された一つの理由は、諸熊さんという方が始められていたマニラの栽培を、ドイツの機械を輸入して科学的、合理的にコストダウンさせたこと、もう一つはシナからラミを輸入して、農民にその種を全部たてあげた。ダバオは二毛作が出来るので、それで農民は栄えたんです。そしてもう一つは、古川さんの農場で働いて退職した人には必ず、耕地内に立派な家を建てて、その遺族に永久に貸し与えられた。しかもその真ん中に慰霊碑を建て、その人々を祀っていた……こういったことが響いていると思いますね。

民間外交の始まりを果たす

浜本 そこで、日本の復興にライオンズクラブがどれだけ大事な存在だったか、五代目会長、永野護のことを話して頂きたいんですがね、賠償交渉に関連して……。

大原 永野さんは、私が会長のころに入られたんじゃないですかね。

福岡 そのことで思い出したことは、永野さんが、どうも要求は八十億なんだが、これはとても実現できないと思いつながら、「ライオンズクラブのメンバーであれば楽ではないか」と、言い残して現地に行かれたんだ。

浜本 永野は例会に出ていないと思うんだがね。

細田 二年度の昭和二十九年三月十日のメンバー・スピーチで、「フィリピンより帰って」というのをやっていらつしやいます。だからその前に入っていらしたんですね。

福岡 その時のキリノ大統領は、肉親を日本軍に殺されていたので、非常に排日的だったんです。日本人への恨みは金輪際、それと交渉するので永野さんは困った、困ったと言っただけで出かけられた。私、その時の比律賓協会の常務理事をしていたので、フィリピン人から聞いたんですが、永野さんが行つてキリノさんと会う前に、応接室で待っていた。式部官が案内する前に、そのマントルピースに、死んだ遺族の写真があったので、それを拝んでおられた。それを駐米大使から本省に帰っ

てきていたフォアキン・エルサルデという方が見ていたらいいんだ。永野さんがあなたの遺族に敬意を払っていたぞ、というのがあらかじめキリノさんに入っていた。それで永野さんの本当の心が伝わって、一遍に決まっちゃった。これは世間に出ていない話です。

大原 永野さんはライオンズ活動がどういう内容のものかよく知らないで、マークだけ付けるというぐらいのことで向こうへ行かれたわけですね。日本のライオンズだということで丁重に遇され、交渉はうまくいって帰ってこられたんです。そしてクラブへこられて僕と会った時、「おつ、オオハラ君のことか」と言うんですよ（笑）。僕が行った時にまめに向こうのライオンズと接触したものですから、「日本のプレジデント、ミスター・オオハラ」と、みんな名前を知っているんです。永野さんが言うのに、向こうの連中が「オオハラを知っているか」ところが永野さんはまさか僕じゃないと思っているから（笑）、「よく知らん」と言うと、おかしいなという顔をして……。

浜本 マニラというのは、閣僚はほとんど入



っているんです。この時、「実は私はまだクラブ

に入りたてで」と言っただけです。そうしたら、この男はオネスト・ジャバニーズだ、政治家としてはまれにみる正直者だと、それは通訳としての僕に言うだけども……。日本の外交および復興に、マニラとのつながりが大きく貢献した、これは永野さんの功績として。

福岡 そう。日本全体の大変な難しい問題でした。

大原 私が向こうに行った時に、ちょうどマグサイサイさんが出られた大統領選挙中で、そういう上層階級の人々はほとんど、マニラとケソンのライオンズのメンバーで、そういうところへ行つて僕は歓迎を受けたんです。それでマグサイサイ氏の甥が何かの結婚式があつて、日本のライオンズの代表として私を正客として招んでくれました。一歩外に出ると日本人は評判がよくないですけれども、中では「ライオンズクラブの名において、昔のような関係じゃないんだから、とにかく手に手を取って復興に当たらなくてはならない。決して日本を敵と思つてはならぬ、過去の恨みは水に流せ」という演説をやってくれるわけです。そういういい雰囲気になりあがつていた。その後へ永野さんが行かれた。

浜本 昭和ニケタの連中も、ライオンズのメンバーであることに、誇りを持って頂きたい。日本のためになつてゐるんだ、あの当時。

大原 当時はまだ大使館もなかったが、連絡事務所で、通産省の商務官と、松方さんのお嬢さんでライシャワー夫人の妹さんの二人が、僕が話をすると、それをもっと立派に翻訳して下さるんです。そういう条件もそろつて、すべてがうまくい

つた。これが民間外交の初めじゃなかったかと思うんです。

外人に牛耳られた最初のころ

細田 チャーター・メンバーに外国人が多かったようですね。

浜本 五十六名のうち二十一名おつたんです。GHQの職員とかバイヤーたちです。だから例会も、音声多重なんだ、我々の時代は。

大原 あれは往生しましたね。

古川 チャーター・ナイトはホテルテイトでやつて、例会は工業倶楽部とか、馬場先門の商工会議所も使っていましたね。

福岡 それと丸の内会館。

浜本 ホテルテイトは、外人部隊がおつたから使えたんです。あれは日本人はあまり出入りできなかった。

古川 一九五三年に日活会館ができて、二年目からは日活ホテルに移つたんですね。これは私事になりますが、今村さんに誘われて入つた時、私の診療所は中野にあつたんです。今村さんに、「入つた以上は絶対に出席しなきゃいかんぞ。お前は一番若いんだから」と、きつく言われたんです。中野からなかなか出てこれないんですよ。それで、僕は日活に診療所を移したんです。

細田 例会を日活でやるから、それで移つた？

古川 そうなんです。実はそこで事件が起きたんです。石川さんが顧問をしているある財団から、ライオンズの発展に役立ててくれと一万の金が

きたんです。石川先生と二人相談して、二人で自動車を買おうか（笑）と言つたんですが、先生は「いや、ライオンズのための放送に使おう」と言うんです。それで文化放送の「私のデスクから」という番組が始まったのは、このお金なんです。ところがその一部が貯金通帳から引き出されているんです。どうもおかしいと調べてみたら、その時の事務をしていた人が、今村さんの知り合いですが、ある製薬会社とタイアップしてフリーピンに輸出するのに、このお金を使っちゃったんですね。ご存じないですか。

福岡 いいえ、知らない。

古川 結局、その事務員の首を切つて、今村さんが全部責任をもつて帳尻を合わせ、あの放送ができたわけです。毎週一回で、一年半くらい続きましたかね。

細田 放送という話は聞いていましたが、クラブのアクティビティではないんですね。

大原 おぼろげに分かつていたけれど、そういう経路は知らなかった。

古川 そのお金は、実は後ろで手を振つたのはアメリカなんです。黒川直也さんが言っていたように、ハワイが日本にエクステンションをしたかったけれども、戦勝国がやるとライオンズが育たないからという、遠慮の多い考えもあったでしょうね。それと、東京が一時消えかけたこともあつたんですね。会員が十名ぐらいいしかなかった。

福岡 私が最初に出た例会は七人でした。

浜本 それ以来、東京は伝統的に出席率が悪いんですね。もう少し、発足当時の苦労話をしよ

うじやないか。ただ大きくなったと思われちゃ困るから。

細田 その七、八人の出席のころは……。

福岡 ちょうどそのころ、ゲストスピーカーに外国人を呼んで、その通訳を大学の英文科の教授がされたんです。その時に聞いているのは、古川さん初め現地出身が多いから、スペイン語も英語も分かるわけ。そうしたらその通訳が全然違うんだ(笑)。先生は「英文学教授」という名刺を配って帰ったが、これは非常に面白い当時のゴシップです。

細田 僕は石田会長の時の幹事でしたが、石田さんも初め、ライオンズに昼食を食べに行くのが苦痛だった。日本語をしゃべっちゃ悪いんじゃないかと思ったり、何かそういうことがえらく出席をおっくうにした、と言っていました。

浜本 その時に昼飯代を払っていたんだな、そのころは。

古川 その都度払っていて、後で会費になったんです。

福岡 私の入った当時、ハリスという人がばかに接近してきて、「これやれ、あれやれ」と言うの。アメリカでやっている通りのことを言いに来るんです。

浜本 ここで結論を出すのはおかしいけれど、導入の際は日本人は全然と言うか、それに近いほど関わりがないんですよ。

細田 外人というのは、向こうでライオンズに入っていた人が多いのですか。

古川 いや、そうでもなかったです。

大原 牛耳っておったのは、外人でも主にヤミ

屋ですよ。仲間が寄って雑談しているのを聞くと、ヤミの話ばかりしているんだ。

古川 そのころ、石川先生が頑として言うことを聞かなかったことが、一つあったんですよ。それは、「日本のライオンズは、まず反共であると宣誓しろ」と言うんです。石川さんは、「いや、そんな政治の問題は絶対やりません」と言っていて、頑として応じなかった。

最初にして

最大のチャリティシヨウ

古川 忘れないうちにアクティビティの話に移りたいんですが、永野さんが一九五六年度の第五代目の会長に就任されましたが、それまでは、とにかくチャーター・ナイトは挙げたけれども、ライオンズが何をするのが、よく分からなかった。最初の年は、十月一日の赤い羽根募金に一万円寄付しただけなんです。

細田 その次の二年度の七月に、九州見舞金で二万円の寄付となっています。三年度に入って、例会場がホテル国際観光に変わったところから、件数も増えていますね。フィリピン戦争未亡人日本招待に二万円、ミンタナオ島地震見舞として衣料二百点、これは全国十クラブ合同で三十万円のうち、東京が五万円となっています。

古川 そのころから我がクラブでも日本人のメンバーが増えてきたんですが、一九五五年七月に日比谷公会堂で「笑いとマンボの会」というのをやったんですが、私はこれが日本の東京の最初にして最大のチャリティ・シヨウだったと思うん

です。それと石川先生のラジオ放送、これがきっかけとなって、東京新橋、東京渋谷、東京日本橋とクラブができるわけです。

細田 チャリティ・シヨウの収益で二つの施設にテレビ二台十四万九千円、ライオンズ文庫に五万八千六百円、光明学園にテレビ道具一式で六万二千円となっています。四年度の小林辰四郎会長の時ですね。

福岡 とにかく、日比谷公会堂がいっぱいになったものねえ。

古川 驚きましたよ。今だって、我々がチャリティをやったって、あれをいっぱいにはできないでしょう。

福岡 僕が覚えているのは、日比谷図書館に本



を寄付しようとして小林会長に言われて、神田の古本屋さんに頼みに行っただけです。本の選定を一週間かけて、夫婦で夜通しやってくれたんです。それで私、お札に行ったら、ライオンズは非常にいいことをしてくれたのでお礼をしたい。ついては、と言って床の間から狛犬を持ってきて、これを事務所に飾っておいてくれ、と言われたのが今も事務所にある狛犬なんです。

細田 その次が永野護会長の年で、このころからアクティビティが増えてきて、六年度の浜本会長の年はすごいですね、アイテムが非常に増えている。

浜本 僕はあまりはめられたことがないんで、ちよっと読んでみて下さい。

細田 NTVの「この人々」へ三万円、YWCA 肢体不自由児海浜キャンブに二万円、養護施設へ野球とビンボンの用具、一万一千二百六十円。それから養老院に一万九千いくら、交通安全に一万二千五百円。

浜本 そこらで初めて交通安全が出るの？

細田 ええ。それから年末の寄付五万円は都内四クラブ合同ですね。東京盲婦人ホーム設立費とか岡山大会のバザー出品費とか、金額はそれぞれとしても、ずいぶんやっていますね。

浜本 アイテムが増えるのはいいことだが、それは全部、酒井幹事がやってくれたんです。

福岡 その次に私が会長をやったから、困っちゃったんです。

細田 記録を見ますと、これからずっとアクティビティが増えていくんです。このころが大体、ライオンズの勃興期じゃないですか。

国の安全と歌って日の丸に感激

福岡 ライオン誌でいつか、日本ライオンズの創立日ということが出ましたが……。

古川 これは非常に紛らわしいんですが、我々は三月五日に招集されて、とにかく結成式をやっ

たんですが、それがシカゴに報告されて、認証状は三月十五日付で発行されています。それで認証状を頂いてチャーター・ナイトの式を挙げたのが、三月二十一日ということですよ。

浜本 戸籍簿本はどうでもいいんで、僕らの誕生日はいつですか。

細田 二十一日ということになるのかな。

浜本 ホテルテイトの跡地に建てた創設記念碑には、その日付が刻印されている。

古川 話がまた飛びますが、我々が最初にやったところには「ウイ・サーブ」というモットーはなかったんです。これは一九五四年、高橋会長の時代に世界的に募集したコンテストの結果、カナダのライオンズの案が採用されて、それが日本ではいつの間にか、乾杯の音頭として使われるようになったんです。

細田 グリーン国際会長が来た時に、東京の「ホストをして、その時の幹事として僕が司会したんですが、乾杯でみんなが「ウイ・サーブ」と言ったら、日本的英語だから通じなかったんです（笑）。

古川 外国ではやっていないんです。高橋がこれでやろうと言いつ出したんですよ。

細田 例会次第みたいなものは、アメリカなんかへ行ってみますと、ずいぶん日本と違うと思うんです。やはり例をロータリーに取ったからですか。

古川 全部、村田さんのご指導で行われたものですから……。

浜本 意味も何も分からないで、「ロータリーはこうやってるよ」と言われて、ああそうですか、という具合でした。

細田 やっぱり国歌をやっているんですか。

古川 ロータリーは国歌をやっていないです。

あれはチャーター・ナイトの時に、まだ国歌とか国旗を掲げてはいけなかった時代に、フィリピンから「ゴンザレス」と、国際協会からエルバート副会長がお出でになって、アドバイスがあったわけですから、国旗がないとどうも儀式がうまくいかないというので、国旗を掲げ、国歌を歌った。私は本当に涙が出るほどうれしかったですよ。

浜本 三月二十一日には、マッカーサー司令部の権限はどこまであったのかね。

古川 マッカーサー氏はその前年に罷免されました。その年の九月にサンフランシスコ講和条約が調印され、四月二十八日にそれが発効、翌日の天皇誕生日には国旗を掲げてよろしい、ということだったわけですよ。だからその一カ月前に我々は国旗を掲げ、国歌を歌ったのです。

浜本 では団体としては、我々は日本で第一なんだな。

福岡 あの時に認められたのは、ロータリーとボーイスカウトとライオンズだけです。

古川 やつと日本が国際社会に認められて、「アワ・ネイションズ・セーフティ」と歌うんですね。あの当時、ネイションズの解釈はまだはつきりしませんでした、とにかく国旗と国歌で僕は非常に感激しましたですね。

細田 その時は、やっぱり外人がいたわけなんですよ。

古川 いました。外人がいたから、なおさら感激した。

細田 「ライオンズ・ヒム」なんかは、初めか

ら歌ったんですか。

古川 英語の歌集がありましてね、それでやりました。一九五三年になって、神戸の葛野が翻訳されました。

浜本 僕は、あれは非常にいい訳だと思うね。原文よりいいと思う。

世界第二のライオンズ国の素地

細田 石川さんの思い出の話の中に、チャーター・ナイトの時に、アメリカのライジング・サンから祝電が来たというのがありますね。

福岡 そう。そしてゴングが何かも寄贈された記憶があります。

浜本 今、使っているゴングは僕が持ち込んだんだがなあ。

細田 どこからですか。

浜本 ニュージャージかどこかのクラブのおじいさんが、「みやげにウイスキーの代りにこれを持ってきた」と、大きいものですよ。最初のは小さかったが……。

細田 東京では前は、「会長、ゴングをお願いします」なんて、幹事が言うことはなかったんだが、このごろはばかに言うでしょう。

浜本 言われてたたく会長がおかしいんだ。会長というのは隊長なんだから、大体みんなそろったかなと思っただけなんです。

古川 石川さんが翻訳された「花ひらくニュー・イングランド」の著者ブルックスさんが、日本から帰国早々のヘレン・ケラーさんを訪ねて、日本

での歓迎ぶりを聞いて驚いたということが書いてあるんですが、結局、アメリカのその当時の情勢と講和条約、この二つの条件ばかりでなく、ヘレン・ケラー女史を迎えて非常に感激したという日本人そのものの体質、この三つが、ライオンズを日本でやっても心配のない国であり、また、育てなければならぬという、それがまた大きく伸びた原動力だったろうと僕は思います。

細田 奉仕とか博愛とか、そういうものが発足



した動機になって、割合に伸びた原因になっていたと私は思うんです。日本全体に確かにそういう下地があったので、こうなったんだ。それがどうして途中でもって、そういう内なるものよりも、何か社会のステータスを求めるとか、競争意識みたいな別のものが入ってきてしまった、町内会のお祭りみたいになってしまったのかな、と考えているんですが……。

浜本 団体というのは、創成のメンバーによって色づけられるので、だから新しく入ってくる人の価値観というか、ライオンズに入って何を求めるかですね。もうかりますか。で入ってこれられて、もうかつたらそうなりますよ。地域社会に力

を入れたら、やはり隣組でお祭りを、日本人は元来、祭りが好きだからね。

古川 確かに原点を追求すると、アクティビティよりないわけですね。しかし、ガイドラインとシステムが出来てくると、それをオルガナイズするやり方の中に、別の魅力が出てくるわけです。ライオンズの十年前にロータリーができ、原点は同じなんだが、ライオンズとロータリーの違いはただ一つあるんです。それは、ライオンズは会員のために経済的な援助をしない。これはメルビン・ジョンズの鉄則なんです。ロータリーの綱領には、会員相互の親睦以外に「相互扶助」という項目が入っているんです。これが綱領の中で一つ違っている点で、原点は同じなんです。

福岡 しかも同じシカゴで生まれている。

古川 ええ。だからシステムとしてはほとんど同じで、非常にいいことは役員が無報酬で必ず一年ごとに代ることです。

浜本 派閥をつくらんこと。耳が痛い人があるから、他クラブはいざ知らずと入れておいてくれ給え（笑）。

細田 最近、あまり原点の奉仕、奉仕と言い過ぎる。というのは、言わなきゃいけないだけでも、クラブというものは、いわゆる官僚的なシステムではなくて、同じ目的で自発的にみんなが集まったので、例会でも何かしかめつ面をしてではなく、愉快だなとか心を打ち明けるような要素も一つあるのではないかな。

浜本 それは落としちゃいかん。それがないと、一つの戒律のある宗教団体になっちゃうんです。

古川 仰せの通り、人の和が一番大切なんです。



4月1日 東京・六本木 国際文化会館にて

が、和というのはどこまでも手段であって、目的ではないわけです。ところが手段なくして目的は達せられないんで、だから人の和と人間関係、それからムードづくり、これは非常に重要だと思っています。出席というのも、私は手段であって目的ではないと思う。

細田 ライオンズクラブの存在というのは何だと言うと、やはり人が集まってきて何かやろうじやないか、というところにクラブの意味があるのではないか、というふうにもう一回引つ繰り返してみたらどうかと思うんです。

福岡 個の力を衆の力に伸ばして奉仕をするということですね。

細田 もう一つは、アメリカ社会ではコミュニティの中に教会か何かありますね。日本にはそう

いうものがないところに、やっぱり何かよりどころを求めて、皆さんが参加したという意味もあるのではないかと、いう気もするんですよ。

古川 それは人間の一つの本能ですね。

細田 それも日本的に発展した大きな要素ではないか。

浜本 それで世界第二位の「ライオンズ王国」になったわけだが、統計学上そうだっただけでは困るんだ。

福岡 去年の日本全国の共同募金が百八十億円、ライオンズのアクティビティは六十億円でしょう、労力奉仕は別にして。だから、大した力だ。

殖栗 今日はいろいろ教えてもらって、どうも有り難うございました。

浜本 おしまいに一言申しあげなきやいかんのは、マツカーサーじやないが、「我々老兵は死なないが、消え去るのみ」だ（笑）。若い者にお願います。



1977年3月、25周年を迎えたチャーター・メンバー、左から石田吉男、西郷徳男（東京新橋）、浜本正勝、井門幸男、大原久之、石関信助、塩原有、中根麟之助、古川正重の各ライオン



黒柳徹子さんと島田祐子さんによる「音楽ショウ」



尾上松緑丈(彩藤間豊)による記念舞踊「^{ふきことぐさ}芥草」



親クラブに贈る言葉



意義深い思い出の日々

船引 守一

神奈川県・横浜

一九五二年八月六日認証・全国二番目

東京は一九五二年三月、日本で最初に誕生したクラブであり、横浜は同年八月、第二番目のクラブとして誕生した。そのスポンサーは当然、東京と思われるが、横浜の初代幹事、故小山善次郎はこれを否定し、フィリピンの国際代表、マジョーシ・バレネンゴアによるものと強調されていた。

それはともかく、日本におけるライオニスズは戦後荒廃した日本人の心を潤すかのように、燎原の火のごとく広がり、三十年後の今日では二千五百クラブ、会員十四五余と、米国に次いで世界第二のライオンズ国となった。その間、東京は日本での発祥クラブとして、また首都に存在するため、日本ライオンズの中心的役割を演じてきたことは、当然の成り行きであつたらう。

一方、日本で第二番目に生まれた横浜は、結成以来会員は減り続け、一時は国際協会に納める年会費にも事欠く状態となった。そして私が会長だった一九六二年、東京で開かれた第八回302 E-1地区年次大会で、各クラブを代表してあいさつをさせられた上、東京出身の塩原有ガバーから、横浜の不振を散々に、強いお叱りを受けた。

当時、横浜内には、横浜市の人口から見ても一クラブでよい、また会員数も五十人以上は必要ないというエリート意識が強かった。創設者メルビン・ジョンズの誕生日をたたえるため、その拡大写真を先頭に、会員全員がライオン帽をかぶり、おそろいの制服を着て市中进行した時、通りがかりの老夫婦から「ご本山はどちらですか」と尋ねられ、苦笑を禁じ得なかったほど、一般市民からは全く遊離した存在であった。一九六一年、初めて横浜がスポンサーとなり小田原を作ったが、これを契機に翌年には横浜ウエスト、横浜サウス、続いて横浜イースト、横浜中央が生まれ、これ

らのクラブの手によって横浜市の各区に次々と誕生した。また神奈川県下においても、川崎、藤沢、平塚、横須賀各市にもクラブが結成された。しかしその大部分は、横浜市の各区長や県下の各市長に頼み、その指導や後援の下に作られた、言わば半ば官製のクラブであった。

大原久之ガバナリーの時代に、ようやく神奈川県下一円が一ゾーンに、追水久常ガバナリーの時代にこれがリジョンにまで成長し、私はそのゾーン・チェアマンおよびデビュティ・ガバナリーとなったが、偉大なる両ガバナリーおよび、乃村英一、三崎矩光という名幹事の下に、見事な地区の運営が行われた。そして何事も東京を中心に舞台は回ったが、私にとってはよき指導者とよき友に恵まれた、誠に楽しく意義深い思い出の多い日々であった。

東西の最古参クラブ

榎橋 秀一

兵庫県・神戸ホストクラブ

一九五三年二月十日認証・全国三番目

30周年、おめでとう。

東京に遅れること、一カ年足らずで結成された神戸（ホスト）も、この七月で三十年目を迎え、一九八三年三月には30周年記念式典を計画している。

結成当時を回想して、「我が神戸にはスポンサー・クラブがないのである。強いと言えば、東京があるいは国際代表による直接のエクステンションとも言えよう」などと書いている人もいるが、これは思ひ上がりも甚だしい。一九五四年四月十六日、時の国際会長エルバート夫妻を迎えて挙行した神戸のチャーター・ナイトに、東京から岩塩原有夫妻、岩塩川良之介が参加されて、錦上さらに花を添えて頂いたことは、厳然たる事実である。この事実が私たちに、神戸というのは単に神戸だけのローカルなものではなく、東京にも友だちがいて、こうしてお祝いにはせ参じてくれているのだ、という実感を与え、どんなにか心強く感じられたことだろうか。

もちろん昨今のように、スポンサー・クラブとしてかゆいところに手が届くようなお世話を受けなかったが、地理的な問題や当時の東京自体の状況を考えると、よくもこの方々にご出席頂いたものだと、ご厚情に今もって感謝している。そんな意味で、神戸の20周年にはG・パレネンゴアと岩塩原有をご招待し、結成時のご苦労の万分の一もお報いしたいと考え、その実現を見た。

神戸結成時のキー・メンバーとして、岩青木真という人がいた。当時、電通の外国部長の要職にあり、関西の著名人とは交遊関係が深かったので、岩塩原がG・パレネンゴアを彼に引き合わされたようである。もしこのことがなければ、神戸の結成はもっと遅れていたものと考えられる。そんな意味でも、岩塩原は神戸の恩人であると言わねばならない。

神戸は、初代会長に岡部五峰という実行力のある人物を得て、西日本におけるライオニズムの発展に大いに力を尽くし、一時は日本のライオニズムに西高東低の現象さえあった。第一回全国大会を神戸で開催したのも、その現れであったと言える。

現在、全国に十四万人を超える会員を有する大組織となった日本ライオニズムを見る時、その先達となられた東京、その片腕となって働いた神戸、両クラブの古い会員にとっては、誠に感無量のものがあると思われる。今後とも、東西の最古参クラブである両クラブが手を携えて、ライオニズムに精進してゆきたいものである。

岩塩原も、岡部も、岩青木も、すでに去ってしまった。けれどもあの人たちの情熱と功績は、いつまでも私たちの心の中に生き続けることを信じて疑わない。

年代差の縮まる熟年

佐々木徳三郎

北海道・札幌

一九五六年二月二十八日認証・全国二十二番目

一九五六年二月二十八日、札幌はスポンサー、東京を親として生まれた。草創のころのことは札幌十年誌、二十年誌などにも載っているが、当時は、ライ

オンズクラブとはいかなるものかが分かるような分かれぬような時代で、ただ、大変に権威のある国際団体である、と受け止められていた。マニユアルもすべて英文で、国際協会からの通知は積んでおくだけであつたから、本来二十番目にきていたはずの札幌が、認証された時は二十二番目にされてしまったとか、これは東京が生み出したの捨て子同然にしたからだとか、親を恨んだりもした。

札幌は北海道で第一号のクラブとして、全道にライオンズを広める役割を担っていたので、私が会長になった一九五九年度、その前年から事務局が拙宅の一階にあり、文字通り日参していたが、その間に岩見沢、夕張、江別、苫小牧と四つのクラブをエクステンションした。現地に赴いて、質問をされる度にいろいろと調べながらの苦しい答弁、揚げ句の果てに、「まあ適当にやって下さい」と言つて帰つた覚えもあり、ご同様に生み出したと言われていたことと思う。

せいぜい産婆さんの介添えで自宅で子を生んだ昔と、産院で生む今日との違いのうちに、ライオンズも昔は、習わずにじゃん子を生んでいたようだ。それでも、当時は分からぬままに熱心に活動したもので、日本全体が一地区であつた関係もあるが、全国大会などにも大挙して参加した。

岡山大会の時に、ライオン石崎のキャラバンと間違われたり、山形大会では私の顔写真がどうしてか掲出され、こそばゆかったりしたのも懐かしい思い出である。そう言へば、一九五六年六月十六日の記念すべきチャーター・ナイトに、民選の初代北海道知事で当時三期目の現職だった田中敏文が、若手の会員として赤い腕章を付け、入口で受付係をさせられたことなど、ライオンは平等であるというクラブの権威を象徴する思い出である。田中氏は今年七十歳、春の叙勲で勲二等に叙せられたことが新聞に発表されたが、当時四十四歳ということになる。

東京三十年、札幌二十六年、これからさらに親子の年代差の縮まる熟年に達することになるが、初めのころのあの行動力を懐かしむとともに、形にとらわれ過ぎぬように、活力を保持してゆくべきだと思つてゐる。

二十五年前

菊池 勝夫

北海道・函館

一九五六年九月三日記証・全国三十一番目

一九五六年九月、東京のお世話で、日本における三十一番目のライオンズクラブとして創立された我が函館は、何をいかにすべきかも知れぬ集団であつた。しかし早いもので、その函館が昨年満25周年を迎え、何とか一人前に近くなり、その歳月の流れの中にある私自身が、個人的にいつしか若獅子から老獅子となり、今更に二十五年の昔を懐かしく思い出す。

今年は、そのスポンサーの東京がますます大成して、30周年を迎えると言う。そしてその記念誌を出すので、これに何か書くようご要望があり、幸か不幸か、函館の中では私が結成前後、最も東京と関係が深かつたとのことで、現会長から私に何か書けとのご命令が出た。

実は私は持病のリウマチが悪化し、入院加療中の身で、ペンを走らせることも困難であるが、あるいはこれが私にとり最後の草稿となるのではないかと、勇を振るいペンを執ることにした。私のライオンズ・ライフの中では、そのころが自分なりに有意義なものであつたと心から当時が懐かしく、今の老衰の姿を情けなくも思う。

さて、我が函館の会員も古顔は少なくなり、新しい会員には、ただ東京が我々のスポンサーというくらい理解しかないとと思う。しかも歴史的に、我がクラブの結成前後が最も東京との交渉が深く、結成四、五年を経ると、クラブ運営のこともあまり気にならず、地区年次大会等に出席するほか、今度は自分たちがスポンサーとなり、不十分ながら指導的立場に立つので、地理的に遠い東京とは自然に疎遠になっていった。従つて、会員の中で本場に東京の様子を昔のある時期といえども知つてゐる者として、さらに特により、我々クラブの運営に大きな影響をもつた当時の東京の状況を今書くことが、またそれなりに意味もあらうと思う。

私は、クラブ結成前後の見学の意味もあって、再三、東京の例会に出席させて頂いた。まず驚きの第一は、その例会場（国際観光ホテル）の雰囲気、我々のそれよりはなほだしく豪華で、会員もまた多数、やはり日本の第一のクラブと感嘆した。食費のみならず他のすべてが、経済的に我々の標準とは段違いであることに、目を見張った。例会の運営も全くあか抜けているし、出席者のことごとくが偉く見え、田舎者である自分を見せつけられるようなコンプレックスがあった。

しかし、我々が自分たちの地域にクラブを結成したからには、また別な気持ちもあり、我々なりにしっかりした華仕活動、運営およびエクステンションをやってゆくべきで、それ以外にはない。

ファインの集まり方を見ても、東京の場合、全く違った違いである。例会の進行もスムーズで、テール・ツイスターの面白おかしく、あか抜けたやり方に感心した。たとえば会員の洋服の新調姿があると、これを演壇に立たしめて紹介して、その立派さをほめ、皆の拍手の中にファインを気持ちよく集める。会員に珍しい高価な犬の子の生まれたのを知り、他の会員に披露して、皆の羨望の中にファインを集めたりする状況を見ると、全く例会が楽しそうに見えてしかなかった。すでに五、六年を経ているせいか、各会員から情報を集め、各担当委員の行動が頭脳的であると感心させられた。ある時、例会のスピーカーとして出席の特許局長（？）が、こんなに面白く奉仕出来るクラブなら自分も入会したいと希望し、入会を申請したのを見て、なるほど私も拍手を惜しまなかった。その上、スピーカーに困らない東京は、さすが日本一のことだけはある、と感心した。

今、日本で最初に出来た全国名簿（昭和三十二年度）を開くと、その東京のメンバーに永野護、小林辰四郎、浜本正勝、福岡陽道、小野哲、守随乙作、森卯一郎、樋口果、式場隆三郎、等々の諸ライオンの懐かしい名前があり、その当時、親しく握手談笑したそれらの方々が、懐かしい限りである。すでに亡くなられた方もあるが、この方々の力は日本のライオンズクラブの発展に、随分、大きな影響をもたらしたものと確信する。

やがて私もデビニティ・ガバナーとなり、地区ガバナーも務めたが、その当時は東京の事務局の人たちとも、本当に顔なじみのつもりでいた。しかし、近年は中央の諸

大会に出席することもなくなり、東京にも疎遠となった。それと共に私の健康も衰え、老いの色も濃くなった。それでも今、私はライオンズと言えは他のことはともかく、必ず二十五年前のころの東京の例会や、その周囲の情景がまぶたに浮かぶ。30周年を迎えた我々のスポンサー東京が、現在も日本一のまま、さらに発展し、日本のライオンズクラブの中核として存在されることは慶賀にたえない、とお祝いする気持ちでいっぱいである。

この四分の一世紀

山川 隆雄

東京新橋

一九五七年一月三十日認証・全国三十九番目

去る三月二十五日、東京設立30周年記念式典が厳粛で盛大に行われたことを、心からお喜び申し上げます。

東京新橋は、東京都内における東京の第一番目の子クラブとして、一九五七年一月三十日に結成された。設立準備のため、当時東京に在籍の岩奥山清平、野西郷徳男、私など十二名のメンバーが移籍し、新たに二十九名を加え、四十一名が東京新橋のチャーター・メンバーとなって発足した。

当時は合同事務局等もなく、奥山清平会長の会社、東京ニュース通信社の事務所を、設立準備並びに連絡事務所として使用させて頂き、岩奥山の指導のもとに会員一同、毎週一、二回ずつの会議を開いた。例会場は新橋の第一ホテルを使用するよう、現メンバーの野水田進にお願いし、十二年ほど同ホテルを例会場としたが、その後、帝国ホテルに移して現在に至っている。クラブ結成に当っては、東京の諸高橋員太郎、福岡陽道、守随乙作、野酒井忠博、野塩原有より特にご指導ご助言を頂いた。

一九五七年二月八日には東京渋谷、四月十二日には東京日本橋が次々に結成され、その後間もなくチャーター・ナイトを催すことになった。そこで、経費節約その他の関係上、東京新橋、東京渋谷、東京日本橋の三クラブ合同で催すこととし、委員

会を設立、同年六月二十八日に日比谷日活ファミリークラブにおいて、数百名の方々のご出席を得て、当時としては盛大な式典を催したように記憶している。

過去二十五年を振り返ってみると、日本のライオンズクラブは偉大な発展を遂げ、世界第二のライオンズ大国になった。本年は、国際協会に日本最初の国際会長として、羽村上薫が活動している。またこの四分の一世紀余りの間に、ライオンズクラブの発展に尽くされた多数の先輩ライオンの方々が、今は故人となられた。この機会に、この方々に深甚な敬意を表し、ご冥福をお祈りする。

東京新橋でも、初代会長、羽山清平その他数名の貴重なメンバーが他界された。クラブ結成当時のメンバーとして、私は現在、終身会員となり、毎例会に出席させて頂いている。

野球後援会と間違えられた話

竹内 芳彦

東京渋谷

一九五七年二月八日認証・全国四十番目

私どもの東京渋谷が、東京をスポンサーとして結成されたのは、一九五七年二月八日で、東京ができて五年目、東京で二番目の子クラブとして、二十一名で結成式を挙げた。初代会長は小田急専務の故羽沢勝蔵で、場所は現在も例会場となっている東急文化会館である。最初に東京新橋ができ、その一週間後に東京渋谷ができたので、一度に二つのクラブを作ったと全く同じで、東京の方々にすれば双生児を生んだようなもの、さぞかし大変な骨折りであったろう。私どもがエクステンションする立場になって、初めてそのご苦労が分かった。

二十一名のチャーター・メンバーのうち、東京からの転籍者は羽田栄一、故岡田武雄、故羽塚本憲甫である。現在残っているチャーター・メンバーは羽田、羽速水、羽永島と私の四人になってしまった。個人的なことだが私のスポンサーは、東京が結成されてから今日まで三十年間、一回の欠席もメークアップもせず、ホー

ムクラブ出席を続ける羽古川正重で、東京が誇る人である。日本ライオンズ20周年の式典が開催された時、皇太子殿下同妃殿下ご臨席のもとで羽古川が表彰され、私はこうした名誉あるスポンサーをもったことを自慢したものである。

入会当時の私は、ライオンズについて何の知識もなく、最初はライオン蘭磨の後援会かと思っていた。三年目ぐらいのこと、同じメンバーの羽山本茂雄と国電に乗っている時、前に立った初老の紳士から、「私はライオンズが好きで、東京でライオンの方にお目にかかれるなんて、こんな幸せなことはない」と話しかけられた。私も二人を西鉄ライオンズの役員とでも思ったのか、盛んに野球の話をする。今さら西鉄ではないとも言えず、「次の駅で降りますが、これからは西鉄を応援して下さい」と言って、二人で逃げ出してきたことがあった。

結成当時のメンバーの中には、遠州流の家元羽小堀宗慶、がんの権威、故羽塚本憲甫、日本の代表的デザイナー故羽剣持勇、羽山内壮夫、羽小林保治などの芸術家が多く、マスコミ関係に知己の多い羽水島輝文（退会）など異色メンバーがいたので、東京渋谷はいいゲスト・スピーカーがくるというので、メークアップにくる人が非常に多かったことを覚えている。

昔は日本のライオンズは羽地区一本だったので、毎年行われる全国大会に、仙台、名古屋、札幌、新潟などに出かけ、大変に和やかなエクスカレーションを楽しむことができた。今でも古いメンバーが集まると、思い出話に花が咲く。今年は東京渋谷も創立25年、ますます健全な歩みを続けたいと念願しているが、一緒に旅をした羽松本博その他、優秀なメンバーを亡くしたことは、誠に残念である。

草創の原点に立ち帰る

今泉 清

宮城県・仙台

一九五七年四月五日認証・全国四十七番目

この四月三日は、仙台のチャーター・ナイト25周年記念式典があった。当日、生

みの親である東京から、朝吹英一会長自らはせまじ、メッセージを頂くことができた。いつまでも親に甘える気持ちはないにしても、やはりこの親心は私たちにとって最高の喜びであり、心から感謝申し上げる。

またこれより早く、東京が去る三月二十五日、チャーター・ナイト30周年を迎えられ、我が仙台から鈴木繁男会長がお招きにあずかり、祝意を表する機会を得た。申すまでもなく東京は日本の第一号であり、光輝ある三十年の歴史は誠に意義深く記念すべきことと、慶賀と感謝を捧げる。

仙台は一九五七年四月五日、精養軒において日本四十七番目のクラブとして、中川善之助会長のもと、メンバー三十七名で発足、八月三日商工会議所ホールでチャーター・ナイトを開催、原勝巳ガバナールから感激のうちに認証状を受けた。一同、その責任の重大さが双肩にのしかかってくるのを、強く感じた。それから月二回の例会を守り、経験することが精一杯の有り様であったが、日を重ねるに従って、一人前のライオンとしての自覚と誇りを身につけるようになった。この間、東京の塩原有、高橋貞太郎、大原久之、迫水久常各ライオン初め、多くの先輩諸氏より温かいご指導を頂いた。

この機会に、日本ライオンズ草創の経緯について一言述べることをお許し頂きたい。フィリピン、マニラのメンバーであるジョージ・バレンゴア氏から、故村田省蔵氏を通じ、戦争中、共に比島にあった石川欣一、塩原有の両氏に働きかけがあったが、これら先輩もライオンズについての知識は薄かったという事情もあり、趣旨は理解できても、日本における可能性については全く予測できず、積極的に乗り出すことに躊躇せざるを得なかったのも、無理からぬことであった。

しかし当時の日比間には、終戦間際に軍が犯した不祥事件などから、対日感情が極めて険しい空気の中で、バレンゴア氏の恩讐を越えた温かい友情と熱意により、ライオンズが両国のかげ橋となつて、この暗雲を払拭して両国の友好親善関係を促進することができれば、こんな有意義なことはないとの結論から、日本にライオンズクラブを作る決意をするに至った。

この隣国フィリピンのバレンゴア氏の寛容の精神と友情、そして先輩の賢明なる決断、日本ライオンズの原点はまさにここにあることを、確認しなければならない。

仙台より一足先に結成された青森についても、リッチランドから失明寸前の青年、市川に也君救済に愛の手が差し伸べられたことがきっかけとなって、国境を越えた人間愛の感動の中から誕生した事実を忘れることはできない。このような事実は各地に数限りなくあるが、今ここにすべてを述べるいとまはない。

現在、日本ライオンズは二千五百余のクラブに十四万余のメンバーをもつ、世界第二の国となった。しかし近時、メンバーの脱落を憂える声の高いのはなぜだろうか。それは一口で言わせてもらえば、メンバーとして、人の心を感動させるような奉仕活動に欠けることが原因ではないだろうか。ここで草創の原点に立ち帰り、我々は何をなすべきか、何をしなければならないかを、お互いの知恵を出し合い考え直し、謙虚に研鑽し、実行することではないだろうか。

さらに奉仕の輪を広げよう

小野 達雄

山梨県・甲府

一九五七年十月十七日認証・全国五十九番目

東京が30周年を迎えられたことを、心からお祝い申し上げる。

今から三十年前の日本は、終戦後の荒廃と混乱が続いていた時期であった。その時の日本に、海の彼方からフィリピンのマニラが、恩讐を越えてライオンズムの灯を運んできた。それから早くも三十年の年月が経過したわけである。ともされた一点の灯は、三十年の間に日本全国に広がった。現在の八複合地区、二千五百余のクラブに十四万余のメンバーという世界第二のライオンズ国になろうとは、三十年前にだれが想像できたであろうか。

この日本ライオンズの原点に立っているのが、東京である。我が甲府は、東京がスポンサーとなった十九クラブの中で、十番目のクラブと聞いている。今から二十五年前に、東京の石川欣一、小野四郎が来甲され、私どもにライオンズクラブのこと、ライオンズムのことについて親切にご指導賜り、お陰様で日本で五十九番目

のクラブとして誕生することができた。

甲府に移されたライオニズムの灯は山梨県下に広まり、今や二十七クラブ、千四百名のメンバーがクラブ活動をしている。甲府が最初にスポンサーとしてつくったのは、隣県の長野の諏訪湖であった。この長野県初のライオニズムの灯が、長野県全域に広がって今の341地区を形成するまでに成長した。このように、山梨県と長野県にライオンズが発展したのは、東京のお陰である。

甲府も今年、25周年を迎える。現在、百十四名のメンバーから、四名の地区ガバナーを出している。子クラブとして、親孝行をしたつもりである。これも甲府が結成以来、手を取って教えて頂いた東京があったからこそ、と確信している。

現今の世界情勢の中で、日本に対する各国の風当たりはますます強くなっている。景気も不透明の時代になり、福祉関係予算も削られる傾向にある。今こそ日本の、いや世界のライオンズが力を合わせて立ち上がらなければならない。その中心となって日本のライオンズをリードするのは、何と言っても日本に最初のライオニズムの灯をともした東京である。

30周年を一つのステップとして、日本のライオニズムがさらに広がり、奉仕の輪を日本全国に広めるよう、東京のますますの発展を祈り、お祝いの言葉とする。

真価はこれから

山口 信吾

東京芝

一九五八年六月二十六日認証・全国八十番目

「出席率一〇〇%を厳守せよ。これが我々東京芝が結成された当時、東京の諸先輩より頂戴した励ましの言葉だった。

東京芝が結成される運びとなったころ、全国で七十数クラブが結成されていた。

末広がりの縁起のいい八十番目のクラブとして出発しようと、当時の福岡陽道会長を初め各位の力強いご支援を頂き、願いかなって一九五八年六月二十六日に結成され、

翌年四月八日に栄えあるチャーター・ナイトを迎えることができた。このことは、我々チャーター・メンバーの誇りであり、クラブが存続する限り語り継がれるだろう。

当時、私は東京新橋に所属していた。そして東京芝が結成され、私が初代幹事に就任することを前提に、諸先輩よりチャーター・メンバーとしての心構え、アクティビティのあり方など、厳しくご指導を頂いたことが走馬灯のように思い出される。

特に東京の初代会長であり、初代ガバナー、初代国際理事として、日本ライオンズの草分け的存在であった故郷石川欣一より、現代の社会奉仕とは何か、ライオニズムの本質は何かを懇切丁寧に教え頂いたことは、私個人はもちろん東京芝が大きく成長する基盤となっており、今日なおその教訓は脈々と生き続けている。ライオンズ用語すら十分に理解せず、ゼロから出発した我々は、言わば荒海へ出た処女航海の船のようなものだった。その中で東京芝が灯台となり、一条の光明を放ち続けて我々の動向を暖かく見守り、導いて下さったればこそ、今日があるのだと肝に銘じている。

こうして現在、日本全国のクラブ数は二千五百を超え、メンバーは十四万人を数えるに至っている。東京芝が結成された三十年前、今日のこの姿を想像することは、だれにもできなかったと思われる。この間、日本のライオンズは日本の経済力と同様に年々力強さを増し、今では我々の代表を国際会長に送り出すまでになった。しかしこれは一つのステップであり、今後こそ日本のライオンズの真価が問われることになるものと確信している。

これからも東京芝が先達として、真のライオニズムを目指して邁進され、30周年を機としますます発展されるよう、東京芝を代表して衷心よりお祝詞を申し上げる。

結成まで十八時間

吉原 稔人

千葉県・市川

一九六一年二月一日認証・全国二百四十二番目

一九六一年の市川の結成は、当時の東京芝のエクステンション委員長、故郷式場

隆三郎と、その弟、市川^{三郎}初代幹事、本年度^{三郎}地区初代ガバナー、故^{三郎}式場倭文夫のお二人のご努力によるものだった。そのころの関東地方のライオンズは、東京・横浜の京浜地区以外は一つもなかったのである。言わば市川^{三郎}の結成は、この壁を突き破る一つの大きな突破口であった。

昨年七月三十一日、^{三郎}式場倭文夫が、新しい地区千葉県の初代ガバナーに推されながら病に倒れ、就任後わずか一ヵ月で逝去されてしまった今、結成前の状況を知る者は、二十二年目を迎えた市川^{三郎}にいたってしまっただけであった。^{三郎}式場以外の実質的なギーク・メンバー、初代会長^{三郎}敷田至孝、二代会長^{三郎}浮谷光次郎も故人である。歳月の流れはまことに無情、はかないものだと思う。

従って、一つの豊醇な酒を得るために必要な熟成期のような、結成前の長い陰の動きについては、私は知らない。しかし、スタート台についてからの動きは、まさに電光石火であった。正式な結成準備会は、結成会の前日、しかも集ったのは夜の六時であったから、翌日の正午からの結成会開始までの所要時間は十八時間、おそらく史上最短記録ではないかと思う。準備会に出席した時の記憶では、事前に内定していたのはクラブ名と会長、幹事だけだった。理事会役員、例会場、例会日時、その他のクラブ要項もその席で決定された。

準備会に集った十数名のメンバーが、翌日の結成会までに一人以上連れてくるようにと約束して散会した。そんな荒っぽいやり方で結成会に出席したのは約三十名、一杯のビールで乾杯し、仕出しのランチだけの極めて簡素なものであった。当時は「国際代表」と呼ばれていた現在のエクステンション駐在員、葛野作太郎氏の話を熱っぽく聞いた私たちは、^{三郎}式場の強いリーダーシップにより、その日から燃え上がったのである。

その古きよき時代の十八時間は、今も鮮烈な印象そのままに、私の貴重な記憶として残っている。

それから二年後、県都千葉市へのエクステンション準備をすべて完了したのち、東京^{三郎}にスポンサーをお願いした。私たちの東京^{三郎}へのささやかな「お返し」お礼であった。

社会意識の移り変わり

武見 次郎

静岡県・伊東^{三郎}

一九六一年十二月五日認証・全国三百五十九番目

滞りなく30周年の記念式典を終了されたことを、心からお喜び申し上げる。

不思議な縁で東京^{三郎}をスポンサーとして誕生した我が伊東^{三郎}も、先般、20周年記念式典を行った。思い出されるのはクラブ誕生の由縁、東拓社長小林正寿氏（初代会長）と式場隆三郎博士との偶然の出会いである。小林君は伊東大室山麓の分譲開発に着眼され、着々東拓の計画を実行されていたが、併せて文化に対する深い理解に基づく地域の発展を念願され、当地の一大シンボルとなったシャボテン公園の造営に当たられていた。小林君と旧知の間柄であった式場先生が、戦争をはさんで十数年を疎遠に過ごされ、シャボテン公園の事業主が同君であることも知らずに同地を訪れたことから、熱心なライオンであった先生のお誘いで、我が伊東^{三郎}が生まれた。

小林君の勧めで、^{三郎}式場を囲んで手ほどきを受けたのが一九六一年十一月四日の晩、待鴨居という別荘旅館であった。式場先生、小林東拓社長、岡川同専務のほかに、私も五人であった。次いで十四日には東京^{三郎}の酒井忠博幹事のこ来東を得て、聴講生も十一人を加え、詳しいお話を聞いた。結成式は十二月五日、メンバーの^{三郎}原口のホテルバトヤであった。その間、お互いに慣れぬ仲間が会員の募集を初め、諸準備や東京^{三郎}との連絡など、思い出しても楽しい大騒ぎだった。スタートの会員四十五名、結成式の前日から^{三郎}森、^{三郎}川内が泊まりがけで見えられ、いろいろとお世話頂いた。

結成式当日は、神戸からわざわざ葛野作太郎国際代表もお出で頂いた。^{三郎}式場は山下清氏を同伴下さり、色紙九十枚が伊東に残された。その一枚はもちろん記念として、私のところに愛蔵されている。

チャーター・ナイトは諸般の都合で、一九六二年七月八日に挙行された。従って、結成式当時の^{三郎}二地区ガバナーは金沢の^{三郎}土井登、チャーター・ナイトの時は岐

卓の安田梅吉がガバナーだった。当時の伊東には、広く各地からお集まり頂いて祝賀式を催せるような会場がなく、教育方面に関係の深い縁もあって、県立伊東高校の新築された体育館を借用したが、その後、伊東ばかりではないが、教育施設に酒を持ち込んだり芸妓の接待など、とんでもないということになった。

日本の発展の速さと同時に、社会意識の移り変わりをまた感じずにはいられない。今後ともよろしくご交誼、ご指導のほど願ひ上げ、併せて東京のますますのご隆昌を祈念する。

茨城県最初のクラブ

黒澤 淳

茨城県・日立

一九六二年一月二十二日認証・全国三百六十八番目

東京のスポンサーで、日立が茨城県の最初のライオンズクラブとして誕生したのは、一九六二年一月二十二日のことだった。当時、東京に十八クラブ、千葉と栃木に二クラブずつ、埼玉に二クラブといった程度だったので、私どもは「ライオンズクラブ」という名前すら聞いたことがない状態だった。そのような中で、当時、茨城大学の教授であった初代会長の松本和夫氏が、エス・エス・エス委員長長の酒井忠博と密接な連絡を取りながら、二十七名の同志を集め、結成にこぎつけた努力は大変なものであったろうと思う。

結成式は実に簡素なものだった。ライオンズ関係の出席者は、ガバナー代理としてデビュティ・ガバナーの福島正雄、地区幹事の山岡保之助、ゾーン・チェアマンの佃光雄、国際カウンセラーの高橋貞太郎、エクス・テンション委員長酒井忠博、東京第一副会長野守随乙作、同幹事の三崎矩光、それに国際協会東京事務所長の葛野作太郎氏。地元来賓は知事代理、市長、ロータリークラブ会長の三名のみという、ささやかなものだった。

結成当時のゾーンは、千葉県の市川、船橋、埼玉県川口、茨城県日立、東京浅草の

五クラブで構成されていた。七月からゾーンの編成が変わり、千葉と茨城で一つのゾーンということになったが、ゾーン・ミーティングなどで遠方まで出かけねばならないので、当時のクラブ三役は大変な苦労であった。

最初のガバナー公式訪問が、強く印象に残っている。結成の年の五月二十七日に、塩原有ガバナーと随行の酒井忠博の二人が、日立を訪問して下さった。ガバナーのあいさつのあと、食事をしながら懇談した程度だったが、間もなく合同公式訪問に変わり、単一クラブへの訪問がなくなったので、懐かしい思い出である。

ライオンズクラブに対する周囲の理解が全くない中で、クラブを正常に運営してゆくのはかなり大変なことだった。「ライオンズ必携」のようなものもなかったし、遠く離れた東京からの指導はあまり期待できず、すべてが手探りの状態であった。ただ、我が日立は日本で最初に結成された由緒ある東京のスポンサーで生まれたクラブだという誇りが、私たちのバックボーンを形成してきたと思っている。

お陰様で日立も結成満20周年を迎え、今年の一月二十四日に盛大な式典を行った。それに、331日地区の次期キャビネットを引き受けることになり、当クラブの賛同馬がガバナー・エレクトに決定した。現在、キャビネット準備事務局を開設し、その準備に入っている。

最後になったが、東京の30周年を心からお祝い申し上げると共に、日立に対してこれまでもましてご支援、ご指導をお願い申し上げます。

最高水準の例会

岡 道士

栃木県・日光

一九六三年一月二十一日認証・全国五百三十三番目

歳月流ることし、東京の十六番目の子として日光が誕生して早くも二十年目を迎え、四月二十四日に結成20周年式典を挙行了。

その折は、前会長森岡一郎のご臨席を頂き、ご祝辞の中で我がクラブ初代会長

柳田喜三郎の結成への努力を高く評価され、橋渡しにご尽力頂いた新新堂喜作が会友としてご健在で、私たちチャーター・メンバーによりしくとの伝言を賜ったと聞き、とてもうれしく当時を懐かしく思い出した。エクステンション委員長の故酒井忠博と新新堂は、日光の生みの親である。結成準備の段階からチャーター・ナイトに至るまでのご指導は、誠にお見事なものであった。

当時の記録を見ると、一九六二年十月二十六日の「日光結成の有志懇談会」には、酒井と西林長太郎が出席され、この日の状況を東京会報に酒井記で掲載されている。また十二月二十日の結成準備会には、酒井と新新堂の来賓ご指導により、日光の基本が定まった。結成式は、三十名のチャーター・メンバーで一九六三年一月二十一日だった。東京からはメンバー十一名が出席し、祝福して下さった。

チャーター・ナイトは同年九月十日、私が担当幹事だったので、今でも鮮明に記憶している。当時の堀江一地区ガバナー大原久之より認証状の伝達を受け、東京からは石田吉男を初め十三名の方々が参加され、ゴンクと万国旗を贈って下さった。地方にこのように多数で参加したのは異例なことと、後日にお聞きして、うれしく親近感を深めた。大原もご健在とのこと、ますますのご健勝をお祈り申し上げる。

今年三月二十五日の30周年記念例会に、我がクラブの会長、幹事も招待され、とても感銘深く、素晴らしい例会であったと聞いて、私が参加した15周年、20周年の記念例会が思い出された。一人一人の洗練されたメンバーがかもし出すエレガントなムードと、スマートな例会運びは、ライオンズクラブ例会の最高水準であり、我がクラブも親クラブの路裏ができたなら、と夢みたものである。

私どものクラブ六十名のメンバーは、スポンサーが東京であることを常に念頭において歩んでいる。その歩みは地味だが、植え付けて頂いたライオンズを、しっかりと胸に抱いて堅実に歩んでいる。

結成時から八十一歳になった今日まで、私はライオンズのことになると熱中した。現在二十四歳になる孫娘が、幼いころ、「おじいちゃんはライオンなの？ 話なの？ 歯医者さんなの？」と聞いたので、「歯医者さんだよ」と答えたら、「アア、安心した」と言われたほどだった。

昨年十月、日本武道館で開催された日本ライオンズ30周年記念大会に参加し、日本

から国際会長が出るまでに成長した現況を目の当たりにして、感無量なものがあつた。特に、東京の石川欣一初代会長未亡人への花束贈呈は、感動的だった。クラブ事務局の千葉さんは健在だろうか。あの当時お世話になった印象が、今も忘れられない懐かしい思い出となっている。

将来への新しい風を

宮 永 寛 三

東京練馬

一九六三年三月二十九日認証・全国五百五十八番目

譬々としてライオンズの展開を日本に築いて、ここに而立の年を迎えられた東京に、子クラブとして敬祝を捧げ、スポンサーされ多年を隔てた懐かしい記憶の泡をたどりつつ、一文を寄稿できることは、この上ない栄誉であると感懐に堪えない。

一九六二年の十一月ごろ、菅原、片桐両氏のこ来訪を受け、この地区にライオンズクラブをつくりたいので協力してくれとお話があった。明けて新春早々に、東京の酒井、豊田両ライオンが見え、ライオンズの使命、趣意、日本における現況等ご説明、ご指導を頂き、帝國ホテルでの例会見学に招かれ、社会奉仕へのヒムであるライオンズの歌に、生けるしるしの感激の涙の味を覚えたのも、そのころである。

埼玉銀行や三菱銀行の二階をお借りして、しばしば準備会がもたれ、三月二十九日、豊玉の金栄閣ホテルで結成式の運びにまでこぎつけた。クラブ旗も酒井のお世話で出来上がり、式場に輝いていた。初代会長に須田区長、幹事に菅原を据え、地域の名士、一流のメンバーをそろえて、発足したのである。

守随、三崎、塩原、高橋、太原、迫水、各ライオンの当時の名刺が今だに残っているのも、懐かしい限りである。迫水には戦前、書記官長の折、学園で講演に接し、面識があった。親クラブの会長も迫水から守随に代り、酒井、豊田には当意即妙なジョークを交えながらのフライングやドネーションの楽しい集め方など、チャーター・ナイトまで、いろいろとご面倒を見て頂いた。

十月十三日、チャーター・ナイトをパレスホテルで挙行し、大原ガバナー初め、例会振替えて多数のご参加を頂き、会を盛り上げてもらった。当時はし字の胸章を付けている方に出ると、いかなる場所でも「オー」とか「ウィ・サーブ」とか、あいさつを交わしたものである。所用で新幹線に乗ったら、車中で豊高橋のご一行にお会いし、お声をかけられ恐縮したことも脳裏に残っている。

私どもが、豊酒井、豊豊田を初め東京の方々々に巡り会えたのは、誠に幸せである。結成式やチャーター・ナイトの様子が練馬のローカル紙に大々的に報じられ、メンバー一同驚愕し、責任を感じたものである。

日本におけるライオニズムの先駆者、東京がその生命の流れを振り返り、その深さを確かめつつ将来への新しい風を誘わんと努められる姿に、なお一層の敬意を表します。まずまずのご発展を祈ってお祝いとする。

親子共々の発展を

林 静寛

東京世田谷

一九六三年三月三十日認証・全国五百六十番目

東京の30周年を、心からお祝い申し上げます。

東京世田谷は十九年前、一九六三年三月三十日、東京をスポンサーとして「五六〇番」で結成された。当時はエクステンションが旺盛な時で、その前日、東京練馬と東京目黒の二つが結成された。

一九六一年、故豊迫水久常が東京の会長在任中、居住地の世田谷にクラブがないので、設立の準備を幹事の三崎矩光と尽くされたが果たせず、翌年度の会長豊守随乙作、幹事豊田治作に申し送られ、秘書の吉本福吉に結成準備を促進された。

一九六三年三月に入り、機が熟し、豊迫水の結成運動が実を結んだ。当時のエクステンション委員長の西林長太郎が、知己の野村証券世田谷支店長、岐部良則氏に依頼して、三軒茶屋に支店のある銀行、金融機関のお得意を目標に、メンバーの勧誘に

努めた。

三月十九日に第一回の説明会を開催し、西林委員長と豊田幹事が出席して、説明された。続いて三月二十六日の第二回準備会には、西林委員長と豊田幹事のほかに酒井忠博委員が出席され、三月三十日結成式と決定した。

わずか二回の準備会と二週間足らずの期間であったが、三月三十日、東京世田谷は、現職の佐野保房・世田谷区長を会長に、メンバー二十四名で結成式を挙行了。

東京からはゾーン・チェアマンの樋口泉を初め、守随会長、酒井幹事、西林委員長、酒井委員が出席された。そのご指導により、東京世田谷は東京の子どもとして誕生し、豊迫水の念願が達せられた。しかし豊迫水は、秘書の吉本共々、議会の関係で出席することが出来ず、残念がられていた。

チャーター・ナイトは九月二十八日、ゴールデン赤坂で挙行され、豊迫水はご夫妻で出席され、喜ばれた。

東京世田谷も明年三月に20周年を迎え、親子共々、草創の人たちも故人となられた人があまりにも多く、二十年、三十年の歳月の長さが感じられる。お世話になった東京の故人の方々のご冥福をお祈りすると共に、今後四十年、五十年と、永久に東京のご発展をお祈りする。

The International Association OF Lions Clubs CHARTER

To All to Whom These Presents Shall Come:
GREETING

R Now Ye that The International Association of Lions Clubs has granted, and by these presents does grant to the Members whose names are hereunto affixed, and to all regularly elected members and their successors, this Charter fully constituting them a Local Club, under the name and title of

THE LIONS CLUB OF
Tokyo

located at Tokyo, Japan with all the rights and privileges given to members of The International Association of Lions Clubs, according to the rules and regulations of the constitution and by-laws of the International Association now in force, as hereinafter enacted. This Charter shall be in full force and effect from the day of the date hereof, and for such time as the Members of the Local Club shall conform to the laws and rules of the International Association. Otherwise this Charter shall be revoked.

In Witness Whereof, The International Association of Lions Clubs has authorized its President and Director-General to affix their signatures, and caused the seal of the Association to be hereunto affixed this 15th day of March in the year of our Lord 1952.

R. Royceston
Director-General

Charter Members



SADAKATSU AZEHA	JOSE B. BOLAÑO	HAROLD N. BORGER	RAYMOND L. BEDILLION
VICENTE O. COBARRUBIAS	ANSELM CHUH	PETE J. DEMETROS	FRANCISCO C. DA ROSA
KAJI DOMOTO	JAMES FARREL	JOSEPH M. FERRIS	TARO FUKUDA
MASASHIGE FURUKAWA	TSUTAE FUJISAWA	ALBERT HATEM	KENJI HIROBE
TSUNEJI HIBINO	NIRO HOSHIJIMA	SOL HAAR	MASAKATSU HAMAMOTO
YUKIO IDOH	ENRIQUE Y. IMAMURA	IKUSABURO IJUN	SHINSUKE ISHIZEKI
KIN-ICHI ISHIKAWA	HIROSHI ISHIDA	YOSHIO ISHIDA	KAN KONDO
GEORGE KRAKOWER	KISAKU MATSUSHIMA	GEORGE B. MORGULIS	SUMIO MAKINO
JIRO NANYE	TOHEI NORITAKE	RINNOSUK NAKANE	HISAYUKI OHARA
SEITARO OKAMATSU	WARREN F. PROVOST	JOSEPH O. RECHTER	LOPE SARREAL
ALEXANDER E. SHVETZ	JOSEPH S. SYKES	IKE SZPIRO	MASAO SAKURABA
TAMOTSU SHIOBARA	NORIO SAIGO	KAZUTAKA SHIMIZU	SHUJI TATEGAMI
SOICHI TSUSUE	KEIJI TSUSUE	HIROYUKI TANAKA	TAKASHI TANABE
RYONOSUKE TOYOKAWA	MAKOTO TOMONARI	JACOB TROPP	SEISABURO YAMANAKA

資料編

30年の記録

(20周年史以後)

初年度～20年度

●年度	●会長	●幹事	●会計
1952～53	石川 欣一	塩原 有	田 辺 隆
1953～54	大原 久之	豊川 良之介	井 門 幸男
1954～55	高橋 貞太郎	福田 太 郎	岡 村 武
1955～56	小林 辰四郎	樋口 杲	岡 村 武
1956～57	永野 護	守随 乙 作	加藤 栄 治
1957～58	浜本 正 勝	酒井 忠 博	原 田 直 治
1958～59	福岡 陽 道	本 間 利 章	長谷部 照 正
1959～60	小野 哲	光野 健之助	新 堂 喜 作
1960～61	岡 村 武	山 岡 保之助	島 原 健 一
1961～62	迫水 久 常	三 崎 矩 光	鹿 士 源太郎
1962～63	守随 乙 作	豊 田 治 助	三輪田 元 也
1963～64	石田 吉 男	細 田 胖	小 野 四 郎
1964～65	池田 幸 雄	松 本 裕	土 井 良 一
1965～66	芦沢 大 義	三 厨 正	田 中 勉
1966～67	武見 太 郎	西林 長太郎	北 岡 源太郎
1967～68	樋口 杲	坂 本 正	小 竹 永 三
1968～69	酒井 忠 博	殖 栗 文 夫	井 門 幸 男
1969～70	上田 常 隆	小笠原 秀 郎	島 原 健 一
1970～71	永井 賢 城	朝 吹 英 一	大 橋 保 男
1971～72	福岡 勇	森 岡 一 郎	持 田 信 男

10月26日	ゲストスピーカー 岡本太郎氏 演題「創造の原理」	外務省大使 高瀬侍郎氏 演題「沖縄をめぐる国際諸問題」
11月9日	ゲストスピーカー 三好德行氏 演題「ゴルフと健康について」	3月8日 映画上映（松竹） 演題「海と未来を開く沖縄」
11月24日	302E-1地区第1R第1Z合同ガバナー 公式訪問 吉永通雄L（於東京会館）	3月22日 ゲストスピーカー 警視庁防犯部少年相談 室副主任 江幡玲子女史 演題「青少年の性の問題」
12月14日	ゲストスピーカー 大妻女子大教授 仙波千代女史 演題「教育100年に思うこと」	4月12日 ゲストスピーカー 前公正取引委員会委員長 谷村裕氏 演題「円の値打ち」
12月19日	クリスマス家族会 事業資金募金バザー（高島屋提供） キャンドルサービス 歌：友竹正則・島田 祐子・岩崎純子 ピアノ：丸尾光・木村富 美 ビンゴ	4月26日 ゲストスピーカー 理学博士 菊池秀夫氏 演題「エネルギー資源と日本」
1月11日	メンバースピーチ 日興リサーチセンター 社長 長谷部照正L 演題「今年の景気」	5月10日 ゲストスピーカー 東大名誉教授 大河内一男先生 演題「余暇のいましめ」
1月25日	新年会 於 浜田家	5月24日 ゲストスピーカー 検事総長 大沢一郎氏 演題「公務員の争議権に関する最高裁大法 廷の判決について」
2月8日	元ガバナーの月 元ガバナースピーチ 塩原有L、大原久之L、迫水久常L、上田 常隆L	6月14日 国際理事候補者 イスラエル親善大使 LION ITZHAK EDELSBURG
2月22日	ゲストスピーカー	6月28日 委員長報告

アクティビティ

視力保護盲人厚生委員会

音楽会へ盲人招待	45,000円
日本盲導犬協会へ寄付	400,000円
日本点字図書館へ寄付	50,000円
日本カナタイプ協会へ寄付	50,000円

少年少女委員会

慶福育児会へ寄付	100,000円
聖フランシスコ子供寮へ寄付	100,000円
少年友の会へ寄付	100,000円

レオ委員会

千代田レオクラブ協力費	116,000円
" 3周年記念会補助金	12,000円

国際委員会

フィリピン・ダンサラン ^① へ災害見舞金	100,000円
コロンボ ^② へ本贈呈	3,490円

教育委員会

高校生奨学資金（4万2千円 10人）	420,000円
卒業生、新入生記念品	19,000円
小さな親切運動本部へ寄付	50,000円
奨学生座談会	57,200円

安全委員会

警視庁交通部へ児童交通安全教育映画フィルム8本

寄付 400,000円

青少年交換計画委員会

E-1地区YEP協賛金 30,000円

地域社会改善委員会

浜町川埋立緑地帯へ植樹の奉仕 500,000円

厚生委員会

アジア救ライ協会インドセンターへ医薬品寄贈

100,000円

愛隣会へ建具及衛生器具修理費 100,000円

全国心身障害児福祉財団へ頭部安全帽 100,000円

東京都精薄者育成会へ机、椅子、ロッカー寄贈

100,000円

鮮交会（一坪運動）土地購入資金 50,000円

その他

バギオ平和の塔建設協力費 25,425円

フィリピン水害見舞金 10,000円

ニカラグワ地震見舞金 52,400円

インド救ライ事業協力金 12,100円

皇居外苑緑の会協力金 70,000円

E-1地区緑化・美化運動協力金 30,000円

合計 3,202,615円

21年度 1972年7月～1973年6月



(役 員)

会 長 古 川 正 重
前 会 長 福 岡 勇
第 一 副 会 長 前 田 幸 藏
第 二 副 会 長 豊 田 治 助
第 三 副 会 長 田 中 勉
幹 事 小宮山 宇 一
副 幹 事 山 根 実
会 計 三 輪 義 明
副 会 計 原 田 慶 司
ライオンテーマー 金 沢 辰次郎
副ライオンテーマー 榎 山 幸 夫

テールツイスター 藤 井 寛
副テールツイスター 有 竹 隆
理 事(一年間) 石 黒 長 治
" 中 沢 彦 七
" 大 橋 保 男
" 若 林 法 雄
理 事(二年間) 長谷部 照 正
" 三 浦 文次郎
" 森 岡 一 郎
" 中 村 栄 一

(委 員 長)

出 席 委 員 長 福 岡 陽 道
財 務 委 員 長 松 本 裕
会 員 委 員 長 朝 吹 英 一
計 画 委 員 長 小笠原 秀 郎
情 報 委 員 長 横 島 忠 三
会 則 委 員 長 酒 井 忠 博
P R 委 員 長 島 原 健 一
視力保護盲人委員長 前 田 正 男
少年少女委員長 森 田 宏 二
レ オ 委 員 長 熊 野 達 夫

国 際 委 員 長 樋 口 杲
教 育 委 員 長 浮 田 祐 二
安 全 委 員 長 尾 関 進
青 少 年 交 換 計 画 委 員 長 加 藤 栄 治
地 域 社 会 改 善 委 員 長 三 崎 矩 光
厚 生 委 員 長 池 崎 道 男
接 待 委 員 長 大 原 久 之
事 業 資 金 委 員 長 北 岡 源 太 郎
会 計 監 査 白 川 国 三 郎
" 大 橋 保 男

例 会 記 録

7月13日 メンバースピーチ 武見太郎L
演題「人間と環境 Ecologyについて」
7月27日 ゲストスピーカー
大蔵省大臣官房調査企画課長 佐上武弘氏
演題「内外経済の動向」
8月10日 映画上映「水界の王者」
8月24日 メンバースピーチ 三浦専衛L 須賀栄一
L 中川馨L 篠木達夫L
演題「私の履歴書」

9月14日 ゲストスピーカー
外務省顧問 朝海浩一郎氏
演題「日米関係随想」
9月28日 ゲストスピーカー
NHK解説委員 三神茂氏
演題「食糧需給のアンバランスについて」
10月12日 ゲストスピーカー
毎日新聞社政治部長 金野宗次氏
演題「日中交渉をめぐって」

11月8日	ゲストスピーカー 警察庁長官 高橋幹夫氏 演題「警察白書について」	3月14日	ゲストスピーカー 神明医院院長 赤川今夫先生 演題「生体のリズムコントロール」
11月22日	ゲストスピーカー 小松製作所取締役 酒井賢二氏 演題「中共に使いして」	3月28日	ゲストスピーカー 国立西洋美術館長 富永惣一氏 演題「モナリザについて」
12月13日	ゲストスピーカー 警視庁交通部婦人警官による腹話術 演題「子供の事故防止」	4月18日	メンバースピーチ 国際理事 上田常隆 L 演題「バンフ国際理事会報告 1978年国際 大会決定」
12月20日	クリスマス家族会 (事業資金募金バザー 高島屋提供) キャンドルサービス 松竹俳優・女優出席、 歌：島田祐子 ピアノ：木村富美	4月25日	映画上映「マダガスカルの自然」
1月10日	ゲストスピーカー 第一勧銀取締役調査部長 中村孝士氏 演題「新年の経済動向と企業経営」	5月9日	ゲストスピーカー 東大教授工学博士 内田秀雄氏 演題「エネルギーの話 原子力のことなど」
1月24日	新年会 辨慶橋 清水	5月23日	ゲストスピーカー 東京農大育種学研究所長 近藤典生氏 演題「生物の調和と人類」
2月13日	第1回東京 ²² ・霞ヶ関 ²³ ・番町 ²⁴ 3クラブ 合同 歌舞伎チャリティショウ	6月13日	ゲストスピーカー 日本経済復興協会専務理事 武村忠雄氏 演題「今後の景気について」
2月28日	元ガバナーの月 元ガバナースピーチ 大原久之L、塩原有L	6月27日	委員長報告会

アクティビティ

市民委員会

少年友の会へ寄付(若年層ボランティア養成費)	100,000円
聖フランシス子供寮へ寄付	100,000円
千代田レオクラブ助成金	150,000円

教育委員会

小さな親切運動本部へ寄付	50,000円
奨学資金(4万2千円 11人)	462,000円
奨学生記念品	23,400円
座談会費(会合費、交通費、通信費)	97,880円

視力保護盲人福祉委員会

旭出学園へ寄付(井戸ポンプ取替費用)	400,000円
日本盲導犬協会へ寄付(小金井訓練所建設資金)	104,900円

社会福祉委員会

アジア救ライ協会へ寄付	200,000円
愛隣会寄付(ストーブ11台)	100,000円
全国心身障害児福祉財団(総合校正形容積脈波計)	100,000円
東京都精薄者育成会(三輪車3台、コピーベットの式)	100,000円

公衆安全委員会

警視庁へ子供用交通安全指導用具、腹話術人形5体 寄贈	300,000円
消防庁へ都民防災指導用VTR用テープ寄付	200,000円

環境保全委員会

あかつき公園植樹(中央区明石町12番地先)	1,000,000円
皇居外苑緑の会(くす樹5本、125万円の内)	100,000円

国際協調及青少年交換委員会

地区青少年交換委員会協賛金	30,000円
---------------	---------

その他

地区合同アクティビティ協賛金	123,000円
複合地区合同インド救ライ協賛金	12,600円
ライオンズアイバンク チャリティショウ切符代	15,000円
日本点字図書館	10,000円
合計	3,778,780円
東京 ²² ・霞ヶ関 ²³ ・番町 ²⁴ 3クラブ合同 歌舞伎チャリティショウ収益金を日赤へ寄付	1,000,000円

22年度 1973年7月～1974年6月



(役 員)

会 長 前 田 幸 藏
前 会 長 古 川 正 重
第 一 副 会 長 豊 田 治 助
第 二 副 会 長 田 中 勉
第 三 副 会 長 白 川 国 三 郎
幹 事 山 根 実
副 幹 事 池 崎 道 男
会 計 原 田 慶 司
副 会 計 浮 田 祐 二
ライオンテーマー 榎 山 幸 夫
副ライオンテーマー 瀧 浦 潤

テールツイスター 有 竹 隆
副テールツイスター 牧 野 増 雄
理 事(一年間) 長谷部 照 正
" 三 浦 文 次 郎
" 森 岡 一 郎
" 中 村 栄 一
理 事(二年間) 小宮山 宇 一
" 槇 島 忠 三
" 松 本 裕
" 三 崎 矩 光

(委 員 長)

出 席 委 員 長 土 井 良 一
財 務 委 員 長 北 岡 源 太 郎
会 員 委 員 長 小 宮 山 宇 一
計 画 委 員 長 森 岡 一 郎
情 報 委 員 長 松 本 裕
会 則 委 員 長 酒 井 忠 博
P R 委 員 長 守 屋 俊 章
市 民 委 員 長 熊 野 達 夫
教 育 委 員 長 浮 田 祐 二

視 力 保 護 盲 人 守 田 俊 郎
福 祉 委 員 長
社 会 福 祉 委 員 長 松 波 鉄 治
公 衆 安 全 委 員 長 中 川 馨
環 境 保 全 委 員 長 古 川 正 重
国 際 協 調 及 青 少 須 賀 栄 一
年 交 換 委 員 長
接 待 委 員 長 樋 口 杲
事 業 資 金 委 員 長 白 川 国 三 郎
会 計 監 査 川 辺 正 夫
" 大 橋 保 男

例 会 記 録

7月12日 メンバースピーチ 国際理事 上田常隆L
演題「第56回世界大会報告」
7月26日 ゲストスピーカー 東大教授 浜口博氏
演題「地球と人生」
8月9日 ゲストスピーカー
奈良壺坂寺住職 常盤勝憲氏
演題「地球の医者」
8月23日 ゲストスピーカー
共同通信社経済部長 西崎哲郎氏
演題「今後の経済見通し」

9月13日 松竹映画上映「日本列島を考える」
9月27日 ゲストスピーカー 作家 平岩弓枝女史
演題「日本の心」
10月11日 302E-1地区第1R第1Z合同ガバナー
公式訪問 加藤正見L(於パレスホテル)
10月25日 ゲストスピーカー
毎日新聞社外信部副部長 石川昌氏
演題「これからの日韓関係—金大中事件の
意味するもの」

10月24日	問 諸井益次郎L(於 帝国ホテル) ゲストスピーカー 毎日新聞編集局顧問 三原信一氏 演題「世界人口問題の焦点」	3月13日	合同 歌舞伎チャリティショウ ゲストスピーカー 外務省儀典長・元大使 内田宏氏 演題「外交秘話」
11月14日	ゲストスピーカー 明大教授 高橋沈氏 演題「福祉社会の転換と企業福祉の方向」	3月27日	メンバースピーチ 福岡陽道L, 羽鳥藤雄L, 福岡勇之輔L, 一色浩L
11月28日	ゲストスピーカー 毎日新聞社取締役論説主幹 高橋武彦氏 演題「最近の国内外の政状について」	4月10日	ゲストスピーカー 農林省食品総合研究所 検査研究室長 西丸震哉氏 演題「食糧自給と我が国水産業の役割について」
12月12日	ゲストスピーカー 心身統一合気道会会長 合気道十段 藤平光一氏 演題「心身一如」	4月24日	ゲストスピーカー 毎日新聞社外信部副部長 永元忠志氏 演題「インドと日本」
12月18日	クリスマス家族会 東京少年少女合唱隊 歌: 島田祐子 ピアノ: 木村富美 事業資金募金オークション(高島屋提供) ビンゴ	5月8日	ゲストスピーカー (財)全国里親会常務理事 寺田宗義氏 演題「里親の話」
1月9日	ゲストスピーカー 衆議院議員・元内閣官 房副長官 山下元利氏 演題「1975年の政治・経済の見通し」	5月22日	ゲストスピーカー 国際観光振興会理事 安居院平八氏 演題「国際旅客の動向」 映画上映「和紙の美」
1月23日	新年会 辨慶橋 清水	6月12日	ゲストスピーカー 劇作家 内村直也氏 演題「日本語の話」
2月13日	ゲストスピーカー 漫画家 おおば比呂司氏 演題「漫画と世相」	6月26日	委員長報告
2月22日	第2回東京 [♫] ・霞ヶ関 [♫] ・番町 [♫] 3クラブ		

アクティビティ

市民委員会

少年友の会へ寄付	100,000円
聖フランシスコ子供寮へ寄付	100,000円
(財)更新会へ寄付(布団10組)	100,000円
ボーイスカウト日本連盟へ寄付	100,000円

教育委員会

高校生奨学資金(6万円 11人)	660,000円
記念品(新入生及び卒業生)	25,000円
座談会費	100,000円
小さな親切運動本部へ寄付	50,000円

視聴力保護福祉委員会

日本盲導犬協会へ寄付	200,000円
------------	----------

社会福祉委員会

大泉旭出学園へ万能木工機贈呈	570,000円
----------------	----------

保健・レクリエーション委員会

島田療育園へ寄付(風呂場建設)	200,000円
日本対がん協会へ寄付	100,000円

公衆安全委員会

警視庁東京交通安全協会へ(幼児交通安全教育紙芝	
-------------------------	--

居)	200,000円
----	----------

東京消防庁へ寄付(携帯TV1台、TP作成機1)	
-------------------------	--

200,000円

環境保全委員会

皇居外苑緑の会協賛金	100,000円
------------	----------

国際協調・YE委員会

アジア救ライ協会インドセンターへ寄付	200,000円
台北市中央 [♫] 訪日青少年団接待費	278,940円
ダバオ [♫] トリス嬢へ記念品贈呈	11,500円
YWCA留学生母親の会へ寄付	150,000円
地区YE協賛金	30,000円

その他

地区合同アクティビティ協賛金	115,000円
" インド救ライ事業協賛金	11,600円
" アイバンク協賛金	15,000円
日本点字図書館チャリティショウ協賛金	24,000円
ろう者連盟ウェルフェアショウ協賛金	3,000円

合計	3,644,040円
----	------------

23年度 1974年7月～1975年6月



(役 員)

会 長 豊田 治助
前 会 長 前田 幸蔵
第一副会長 白川 国三郎
第二副会長 殖栗 文夫
第三副会長 若林 法雄
幹 事 池崎 道男
副 幹 事 有竹 隆
会 計 浮田 祐二
副 会 計 森田 宏二
ライオンテーマー 瀧浦 潤
副ライオンテーマー 服部 二郎

テールツイスター 牧野 増雄
副テールツイスター 須賀 栄一
理 事(一年間) 小宮山 宇一
" 横島 忠三
" 松本 裕
" 三崎 矩光
理 事(二年間) 倉橋 泰史
" 松波 鉄治
" 鈴木 武実
" 山根 実

(委 員 長)

出席委員長 守屋 俊章
財務委員長 小笠原 秀郎
会員委員長 石田 吉男
計画委員長 福岡 陽道
情報委員長 石関 信助
会則委員長 朝吹 英一
P R 委員長 長谷部 照正
市民委員長 服部 二郎
教育委員長 長宗 新作
視聴力保護福祉
委 員 長 守田 俊郎

社会福祉委員長 友成 靖一
保健・レクリエ
ーション委員長 尾関 進
公衆安全委員長 瀧浦 潤
環境保全委員長 三浦 文次郎
国際協調・Y E
委 員 長 須賀 栄一
接 待 委 員 長 池田 幸雄
事業資金委員長 若林 法雄
会 計 監 査 川辺 正夫
" 木川 道彦

例会記録

7月11日 ゲストスピーカー
共同通信社政治部長 遠藤勝己氏
演題「今後の政局について」
7月25日 ゲストスピーカー
住友精密工業㈱相談役 酒井佐敏氏
演題「潜水艦による欧亜連絡航海の体験談」
8月8日 メンバースピーチ 渥美節夫L
演題「医療食に取組んで」

8月22日 メンバースピーチ 荒井好民L
演題「日本企業の海外進出」
9月12日 メンバースピーチ 城戸尚夫L
演題「手前みそ」
9月26日 ゲストスピーカー
理学博士 西堀栄三郎氏
演題「世界第五峰－ヤルンカンを遠征して」
10月11日 302E-A地区第1R合同 ガバナー公式訪

10月23日	ゲストスピーカー 厚生省人口問題研究所所長 黒田俊夫氏 演題「今世紀末に於ける人口問題」	3月11日	ゲストスピーカー 横浜訓盲学院長 今村幾太氏 演題「十八日生活の常食」
11月13日	ゲストスピーカー 国立音楽大学名誉教授 服部正氏 演題「アマチュア音楽今昔物語」	3月25日	ゲストスピーカー 全国銀行協会連合会専務理事 松本重雄氏 演題「内外の金融問題」
11月27日	ゲストスピーカー 中央大学商学部教授・ 商学博士 井上達雄氏 演題「連結財務諸表について」	4月8日	ゲストスピーカー アジア学生文化協会理事長 穂積五一氏 演題「日本とアジアとの距離」
12月11日	ゲストスピーカー 参議院議員 田英夫氏 演題「欧米諸国歴訪より歸りて」	4月22日	ゲストスピーカー 日本経済研究センター理事長 金森久雄氏 演題「新展開を迎える日本経済」
12月18日	クリスマス家族会 東京少年少女合唱隊 歌：島田祐子 ピアノ：木村富美 事業資 金募金オークション、ビンゴ	5月13日	ゲストスピーカー 元南極観測隊越冬隊長 村山雅義氏 演題「極地探検99の謎」
1月8日	新年懇親会（於 帝国ホテルスカイルーム）	5月27日	ゲストスピーカー 芝浦製作所会長 西野嘉一郎氏 演題「今春闘をめぐる諸問題」
1月22日	ゲストスピーカー 落語家 柳家小さん氏 演題「江戸小ばなし」	6月10日	メンバースピーチ 古川正重L, 福岡陽道L, 三崎矩光L
2月12日	元ガパナーの月 元ガパナースピーチ 大原久之L, 塩原有L	6月24日	委員長報告
2月21日	第3回3クラブ合同歌舞伎チャリティショウ		

アクティビティ

市民委員会

少年友の会へ寄付（非行少年の補導・更生福祉）	200,000円
更新会へ寄付（受刑者更生施設の作業衣購入）	100,000円
聖フランシスコ子供寮へ寄付	100,000円

教育委員会

高校生奨学資金（6万円 10人）	600,000円
記念品（新入生及び卒業生）	37,600円
座談会費（6月26日開催）	61,380円
小さな親切運動本部へ寄付	50,000円

視聴力保護福祉委員会

日本盲導犬協会へ寄付	200,000円
横浜訓盲学院へ寄付	100,000円

社会福祉委員会

日本心身障害児協会へ寄付（島田療育園避難通路整備）	200,000円
全国里親会へ寄付（里親制度に関する印刷物）	200,000円
秋津療育園へ寄付（脳性マヒ用訓練椅子）	200,000円

小平市社会福祉協議会へ寄付（老人用電子レンジ）	100,000円
-------------------------	----------

保健・レクリエーション委員会

中央保健所保健衛生及び伝染病予防委員会へ寄付	300,000円
------------------------	----------

公衆安全委員会

東京都交通安全協会へ寄付（交通安全教育車に納める安全教育用具—腹話術人形、紙芝居等）	600,000円
--	----------

環境保全委員会

皇居外苑緑の会協賛金	100,000円
------------	----------

国際協調・YE委員会

東南アジア文化友好協会へ寄付	30,000円
アジア学生文化協会へ寄付	50,000円

その他

地区合同アクティビティ協賛金	149,500円
地区YE協賛金	30,000円
日本点字図書館チャリティショウ	30,000円
日本対がん協会チャリティ映画	7,000円
合計	3,445,480円

24年度 1975年7月～1976年6月



(役 員)

会 長	白 川 国三郎
前 会 長	豊 田 治 助
第 一 副 会 長	若 林 法 雄
第 二 副 会 長	三 崎 矩 光
第 三 副 会 長	小笠原 秀 郎
幹 事	有 竹 隆
副 幹 事	黒 田 斐 雄
会 計	森 田 宏 二
副 会 計	杉 浦 重 敏
ライオンテーマー	服 部 二 郎
副ライオンテーマー	星 川 博 道

テールツイスター	須 賀 栄 一
副テールツイスター	松 本 裕
理 事(一年間)	倉 橋 泰 史
"	熊 野 達 夫
"	松 波 鉄 治
"	山 根 実
理 事(二年間)	原 田 慶 司
"	池 崎 道 男
"	成 田 清 治
"	尾 関 進

(委 員 長)

出 席 委 員 長	盛 郷 重 光
財 務 委 員 長	小宮山 宇 一
会 員 委 員 長	殖 栗 文 夫
計 画 委 員 長	星 川 博 道
情 報 委 員 長	石 関 信 助
会 則 委 員 長	石 田 吉 男
P R 委 員 長	朝 吹 英 一
市 民 委 員 長	池 崎 道 男
教 育 委 員 長	能 沢 正 義
視聴力保護福祉 委 員 長	飯 嶋 島 三

社会福祉委員長	渥 美 節 夫
保健・レクリエーション委員長	牧 野 増 雄
公衆安全委員長	長 宗 新 作
環境保全委員長	富 松 規 行
国際協調・Y E 委 員 長	沢 田 隆 治
接 待 委 員 長	豊 田 治 助
事業資金委員長	小笠原 秀 郎
会 計 監 査	木 川 道 彦
"	前 田 幸 藏

例 会 記 録

7月10日	メンバースピーチ 前国際理事 上田常隆L 演題「グラス世界大会報告」
7月24日	映画上映「煙の恐ろしさ」
8月14日	ゲストスピーカー 国学院大学教授・文学博士 樋口清之氏 演題「歴史の裏話」
8月28日	ゲストスピーカー 時事評論家 山谷親平氏

9月11日	演題「時局雑感」 ゲストスピーカー 前高等海難審判庁長官 愛沢新吾氏 演題「海難審判の思い出」
9月25日	ゲストスピーカー 十条製紙会長 金子佐一郎氏 演題「赤字国鉄はどうあるべきか」
10月15日	1 R - 1 Z 合同 ガバナー公式訪問 森田 浩一郎L (於 ノバレスホテル)

	美津濃(株)東京支店 水野正人氏	2月18日	第4回3クラブ合同 歌舞伎観劇会
	演題「モントリオール・オリンピック雑考」	3月10日	ゲストスピーカー 野村総合研究所企画調査部副部長 五十嵐雅郎氏
10月8日	330-A地区第1R、第1Z合同ガバナー 公式訪問 助川貞三L(於 東京会館)		演題「日本経済と産業界の展望」
10月28日	ゲストスピーカー 明治大学教授 岡野加穂留氏	3月18日	25周年記念例会 記念舞踊:「斧琴草」尾上松緑丈 音楽ショウ: 黒柳徹子・島田祐子
11月11日	ゲストスピーカー 中央大学法学部教授 佐藤由須計氏	4月14日	ゲストスピーカー 東京女子医大名誉教授 榊原仟氏
	演題「ハイジャッキングと国際法」		演題「狭心症と心臓の話」
11月25日	ゲストスピーカー 前朝日カメラ副編集長 小森孝之氏	4月28日	ゲストスピーカー 文化財建物保存技術協会常務理事 日名子元雄氏
	演題「絵はがき(明治・大正・昭和)」		演題「姫路城大天守修理のエピソード」
12月9日	ゲストスピーカー 評論家 夏目通利氏	5月12日	ゲストスピーカー 鹿島育成寮・恵松会顧問 武沢静雄氏
	演題「日本の人口形成の及ぼす影響」		演題「ひとなみの幸せを」
12月16日	クリスマス家族会 キャンドルサービス 歌:島田祐子 ピアノ:木村富美、こぐまのムー君、ビンゴ	5月26日	ゲストスピーカー 日本テレビ放送網(株) 解説委員会副委員長 福富達氏
1月11日	新年懇談会 夜(於 帝国ホテルスカイルーム) 歌:砂野菊代		演題「保革伯仲下の参議院選挙、その後の動き」
1月27日	ゲストスピーカー 共同通信社論説委員長 内田健三氏	6月9日	ゲストスピーカー 美術史家 由水常雄氏
	演題「本年度の政治経済の見通し」		演題「正倉院の謎」
2月10日	メンバースピーチ 小泉武L、渡辺正則L	6月23日	懇親例会 夜(於 帝国ホテル桜の間) 歌:砂野菊代 ピアノ:木村富美

アクティビティ

25周年記念緊急積立金	5,000,000円	社会福祉委員会	
市民委員会		筋無力症協会へ寄付	100,000円
更新会へ寄付	100,000円	身障友の会へ寄付(ビンゴ基金)	250,000円
酒田市大火御見舞金	50,000円	環境保全委員会	
教育委員会		皇居外苑緑の会協賛金	100,000円
奨学金(6万円 11人)	660,000円	その他	
記念品	28,680円	地区YE協賛金	30,000円
座談会費	65,750円	地区合同アクティビティ協賛金	124,800円
小さな親切運動本部へ寄付	50,000円	合計	6,559,230円



白金迎賓館で納涼家族会

25年度 1976年7月～1977年6月



(役 員)

会 長 若 林 法 雄
前 会 長 白 川 国三郎
第 一 副 会 長 三 崎 矩 光
第 二 副 会 長 小笠原 秀 郎
第 三 副 会 長 西 林 長太郎
幹 事 黒 田 斐 雄
副 幹 事 長 宗 新 作
会 計 杉 浦 重 敏
副 会 計 金 子 為 雄
ライオンテーマー 星 川 博 道
副ライオンテーマー 盛 郷 重 光

テールツイスター 熊 野 達 夫
副テールツイスター 一 色 浩
理 事(一年間) 原 田 慶 司
" 池 崎 道 男
" 成 田 清 治
" 尾 関 進
理 事(二年間) 有 竹 隆
" 長谷川 万 治
" 牧 野 増 雄
" 富 松 規 行

(委 員 長)

出 席 委 員 長 服 部 二 郎
財 務 委 員 長 永 井 賢 城
会 員 委 員 長 小宮山 宇 一
計 画 委 員 長 豊 田 治 助
情 報 委 員 長 松 本 裕
会 則 委 員 長 守 屋 俊 章
P R 委 員 長 長谷部 照 正
市 民 委 員 長 石 黒 長 治
教 育 委 員 長 池 崎 道 男
視聴力保護福祉
委 員 長 松 波 鉄 治

社会福祉委員長 星 川 博 道
保健・レクリエ
ーション委員長 盛 郷 重 光
公衆安全委員長 有 竹 隆
環境保全委員長 能 澤 正 義
国際協調・Y E
委 員 長 澤 田 隆 治
接 待 委 員 長 白 川 国三郎
事業資金委員長 西 林 長太郎
会 計 監 査 前 田 幸 蔵
" 森 田 宏 二

例 会 記 録

7月8日 ゲストスピーカー
毎日新聞社政治部長 江口守氏
演題「ロッキード事件と政局の行方」

7月22日 ゲストスピーカー
外務省参与 真崎秀樹氏
演題「両陛下ご訪米の思い出」

7月23日 納涼家族ビンゴ大会(白金迎賓館)

8月12日 ニュージーランド大使館 観光部長 D.Lynch氏

映画上映「驚異のニュージーランド」

8月26日 ゲストスピーカー
共同通信社編集局次長 平田真己氏
演題「政局混迷下の景気回復について」

9月9日 ゲストスピーカー
外務省情報文化局参事官 伊達宗起氏
演題「世界の中の日本」

9月24日 ゲストスピーカー

- 演題「知られざる裏話」
 2月23日 ゲストスピーカー
 社会民主連合書記長 橋崎弥之助氏
 演題「今後の政局その他について」
 3月9日 委員会全体会議
 3月23日 CN26周年記念ビンゴ家族会(於 帝国ホテル レストランシアター)
 4月13日 ゲストスピーカー 評論家 山本七平氏
 演題「日本文化の特質」
 4月27日 ゲストスピーカー

- NHK会友 藤倉修一氏
 演題「放送の楽しさと怖さ」
 5月11日 ゲストスピーカー
 公明党副書記長 大久保直彦氏
 演題「日中問題」
 5月25日 ゲストスピーカー SF作家 黒沼健氏
 演題「未知との遭遇」
 6月8日 委員長報告会
 6月23日 第61回国際大会参加 シスタークラブ歓迎会(於 帝国ホテルスカイルーム)

アクティビティ

市民委員会

聖フランシスコ子供寮へ寄付	100,000円
少年友の会へ寄付	100,000円
更新会へ寄付	100,000円
皇居外苑緑の会へ寄付	100,000円
シスタークラブ歓迎会費及び記念品	400,000円
国際大会インフォメーションデスク費	5,250円

教育委員会

奨学金(8万円 11人)	880,000円
新入生記念品	14,400円
卒業生記念品	20,000円
YE協賛金	50,000円
交通遺児YE派遣費	150,000円
小さな親切運動本部寄付	50,000円

社会福祉委員会

島田療育園へ筋電計購入費として寄付	800,000円
国際大会記念ゾーン合同事業 日赤へ献血広報車寄贈(300万円)	500,000円

その他

有珠山爆発被災者見舞金	50,000円
大島近海地震被災者見舞金	50,000円
LIF(ライオンズ国際財団)へ寄付	25,200円
地区献血協賛金	5,000円
日本点字図書館チャリティー映画会協賛	30,000円
仙台地震見舞	100,000円
合計	3,529,850円

25周年記念事業

日本武道館時計塔改新	4,362,500円
ゾーン合同献血 4回(10/5 12/3 2/18 6/24)	



シスタークラブ(マニラ、台北、ソウル)からのお客さんを迎えて歓迎会、上はフィリピン駐日大使、カルロス・J・バルデス氏

26年度 1977年7月～1978年6月



(役 員)

会 長 三 崎 矩 光
前 会 長 若 林 法 雄
第 一 副 会 長 小 笠 原 秀 郎
第 二 副 会 長 西 林 長 太 郎
第 三 副 会 長 森 岡 一 郎
幹 事 長 宗 新 作
副 幹 事 守 屋 俊 章
会 計 羽 鳥 藤 雄
副 会 計 服 部 二 郎
ライオンテーマー 盛 郷 重 光
副ライオンテーマー 福 岡 勇 之 輔

テールツイスター 一 色 浩
副テールツイスター 森 田 宏 二
理 事(一年間) 有 竹 隆
" 小 宮 山 宇 一
" 小 泉 武
" 牧 野 増 雄
理 事(二年間) 石 田 吉 男
" 池 崎 道 男
" 黒 田 斐 雄
" 須 賀 栄 一

(委 員 長)

会員・出席委員長 朝 吹 英 一
会 則・P R・福 岡 陽 道
情 報 委 員 長
計 画・財 務 委 員 長 池 崎 道 男
市 民 委 員 長 熊 野 達 夫

教 育 委 員 長 星 川 博 道
社 会 福 祉 委 員 長 尾 関 進
会 計 監 査 森 田 宏 二

例 会 記 録

7月14日 ゲストスピーカー
衆議院議員 山口敏夫氏
演題「政局について」
7月28日 納涼ビンゴ家族会(於 白金迎賓館)
8月11日 ゲストスピーカー
元警視庁技官 小野常德氏
演題「被害者なき犯罪」
8月25日 委員会全体会議
9月6日 330-A地区第1R・第1Z合同ガバナー
例会訪問 大森繁L(於 ホテルニューオー
タニ)
9月22日 ゲストスピーカー
野球解説者 鈴木陽一氏
演題「最近のプロ野球について」
10月13日 三崎会長スピーチ
10月27日 ゲストスピーカー
ドイツ文学者・文学博士 高橋義孝氏
演題「ものの考え方」

11月10日 ゲストスピーカー
通産省貿易局長 西山敬次郎氏
演題「最近の貿易問題について」
11月24日 ゲストスピーカー
元神田税務署長 町田健一氏
演題「税調こぼれ話」
12月8日 映画上映
松竹(株)提供「心にかよう世界の街」
12月22日 クリスマス家族会 キャンドルサービス
歌: 島田祐子 ピアノ: 木村富美 ビンゴ
1月12日 ゲストスピーカー
元外務大臣 木村俊夫氏
演題「本年度政経の動き」
1月26日 新年会 夜(於 帝国ホテル牡丹の間)
ガバナー立候補者挨拶
嘉悦康人L, 仁科周芳L
2月9日 ゲストスピーカー
慶大文学部教授 西岡秀雄氏

	主婦会館クリニック院長 奈良林祥氏		演題「残留孤児の問題について」
2月22日	演題「カウンセリングの窓口から見た現代」	4月26日	メンバースピーチ プロジェクトインターナショナル社長 沢田隆治L
	ゲストスピーカー		演題「アラブの情勢」
	元プレジデント副編集長 坪内靖介氏	5月10日	ゲストスピーカー
3月8月	演題「新しい経営者像」		内閣国防会議事務局長 伊藤圭一氏
	ゲストスピーカー サンリオバビュームセンター所長 堅田道久氏	5月24日	演題「日本の防衛問題について」
3月22日	演題「におい雑談」		ゲストスピーカー 東京女子医大附属消化器病センター 名誉所長 中山恒明氏
	メンバースピーチ チャーターナイト27周年記念講演 日本医師会会長 武見太郎L	6月14日	演題「ほけないで長生きする方法」
4月12日	演題「過去の日本と未来の日本」		メンバースピーチ
	ゲストスピーカー		今井勇L, 丸山三郎L
	日中孤児問題連合会理事長 坂口遼氏	6月28日	委員長報告会

アクティビティ

市民委員会

聖フランシスコ子供寮へ寄付	150,000円
少年友の会へ寄付	150,000円
更新会へ寄付	150,000円
皇居外苑緑の会へ寄付	100,000円
東京交通安全協会へ寄付	500,000円

教育委員会

奨学資金（8万円 12人）	960,000円
新入生記念品	22,800円
卒業生記念品	15,000円
小さな親切運動本部へ寄付	100,000円
YE協賛会	50,000円

社会福祉委員会

日本聾話学校へ寄付	300,000円
島田療育園へ寄付	300,000円
がんの子供を守る会へ寄付	300,000円
法律扶助協会へ寄付	200,000円
日本身体障害者スキー協会へ寄付	50,000円

その他

LIF協賛金	19,000円
第14回全国身障者スポーツ大会	10,000円
日本点字図書館チャリティ映画会	30,000円
合計	3,406,800円

第1回献血 3/14 ジャノメマシン工業

受付 189人、採血 149本



クリスマス家族会ではビンゴが楽しみ

27年度 1978年7月～1979年6月



(役 員)

会 長 小笠原 秀 郎
前 会 長 三 崎 矩 光
第一 副 会 長 西 林 長太郎
第二 副 会 長 森 岡 一 郎
第三 副 会 長 朝 吹 英 一
幹 事 守 屋 俊 章
副 幹 事 服 部 二 郎
会 計 星 川 博 道
副 会 計 小 泉 武
ライオンテーマー 羽 鳥 藤 雄
副ライオンテーマー 長谷川 剛

テールツイスター 森 田 宏 二
副テールツイスター 林 田 悦 典
理 事(一年間) 石 田 吉 男
" 池 崎 道 男
" 黒 田 斐 雄
" 須 賀 栄 一
理 事(二年間) 福 岡 陽 道
" 一 色 浩
" 長 宗 新 作
" 杉 浦 重 敏

(委 員 長)

会員・出席委員長 三 浦 文次郎
会 則・P R・情 報 委 員 長 細 田 胖
計画・財務委員長 一 色 浩
市 民 委 員 長 有 竹 隆

教 育 委 員 長 歌 田 勝 弘
社 会 福 祉 委 員 長 飯 嶋 島 三
会 計 監 査 松 本 裕
" 牧 野 増 雄

例 会 記 録

7月13日 メンバースピーチ
衆議院議員 谷川寛三 L
演題「最近の政治経済状況」
7月27日 ゲストスピーカー
防衛庁研修所長 大西 誠一郎氏
演題「1980年代の安全保障」
8月10日 合同委員会
8月24日 納涼例会(於 赤坂維新館)
9月14日 ゲストスピーカー
大蔵省主計局長 長岡実氏
演題「景気と財政」
9月28日 ゲストスピーカー
十條製紙社長 豊永幸三氏
演題「私の経営理念」
10月12日 330-A地区第1R合同ガバナー例会訪問
嘉悦康人L(於 帝国ホテル孔雀の間 東)
10月26日 ゲストスピーカー 元皇太子殿下テニスの
先生 石井小一郎氏

演題「皇太子とテニス」
11月9日 ゲストスピーカー 和泉宗章氏
演題「算名占星学入門」
11月24日 ゲストスピーカー
東京国立博物館学芸部長 浜田隆氏
演題「高松塚壁画について」
12月14日 ゲストスピーカー
中国問題研究家 新井宝雄氏
演題「華国鋒体制下の中国」
12月20日 クリスマス家族会 キャンドルサービス
マリンバ演奏：マリンバポニーズ
歌：島田祐子 ピアノ：木村富美 ビンゴ
1月11日 ゲストスピーカー 日本道路交通情報セン
ター東京事務所長 渡辺恒雄氏
演題「最近の道路交通情報システムについ
て」
1月25日 新年会(於 築地江戸銀別館)
2月8日 ゲストスピーカー

2月28日	ゲストスピーカー 野村総合研究所企業調査部・主任研究員 並川淳氏 演題「80年代の企業環境」	4月24日	ゲストスピーカー 国際教育情報センター理事長 賀陽美智子 女史 演題「国際教育情報センターの活動と国際理解」
3月13日	ゲストスピーカー 武蔵野栄養専門学校校長 桑原丙午生氏 演題「成人病予防と食事」	5月8日	ゲストスピーカー NHK解説委員 大内幸夫氏 演題「米国の対ソ石油政策」
3月27日	チャーターナイト28周年記念 チャーターメンバースピーチ 浜本正勝L, 古川正重L 演題「創立時の思い出」	5月22日	ゲストスピーカー (社)大日本水産会調査役 延原和彦氏 演題「お魚と日本人」
4月10日	ゲストスピーカー 大空の勇士 坂井三郎氏 演題「人間の限界」	6月12日	バンドネオン演奏「タンゴとバンドネオン」 京谷弘司氏, 高野太郎氏
		6月26日	委員長報告会

アクティビティ

市民委員会

インドシナ難民救援資金として日赤本社を通じて寄付	500,000円
聖フランシスコ子供寮へ寄付	150,000円
少年友の会へ寄付	150,000円
皇居外苑緑の会へ寄付	100,000円

社会福祉委員会

インドシナ難民救援資金として日赤本社を通じて寄付	500,000円
島田療育園へ電動食事運搬車寄付	300,000円
法律扶助協会へ寄付	200,000円

教育委員会

高校生奨学金(12万円 12人)	1,440,000円
新入生記念品	14,400円

卒業生記念品	20,000円
小さな親切運動本部へ寄付	100,000円
その他	
タイ国避難民救済金	100,000円
YE協賛金	50,000円
LIF協賛金	21,375円
第15回全国身障者スポーツ大会協賛金	9,500円
日本点字図書館チャリティー映画会協賛金	30,000円
台北青少年訪日団接待費	162,835円
合計	3,848,110円

第2回献血 4/22 ジャノメマシン工業

受付 202人, 採血 175本



少年友の会、聖フランシスコ子供寮、島田療育園の代表



西林長太郎会長と、サンタ・フー?

28年度 1979年7月～1980年6月



(役 員)

会 長 西 林 長太郎
 第 一 副 会 長 森 岡 一 郎
 第 二 副 会 長 朝 吹 英 一
 第 三 副 会 長 松 本 裕
 幹 事 服 部 二 郎
 副 幹 事 盛 郷 重 光
 会 計 渥 美 節 夫
 副 会 計 歌 田 勝 弘
 ライオンテーマー 長谷川 剛
 副ライオンテーマー 尾 関 進

テールツイスター 長 宗 新 作
 副テールツイスター 飯 嶋 島 三
 理 事(一年間) 福 岡 陽 道
 " 一 色 浩
 " 澤 田 隆 治
 " 杉 浦 重 敏
 理 事(二年間) 星 川 博 道
 " 守 屋 俊 章
 " 永 井 賢 城
 " 能 澤 正 義

(委 員 長)

会員・出席委員長 須 賀 栄 一
 会 則・P R・
 情 報 委 員 長 長谷部 照 正
 計 画・財 務 委 員 長 羽 鳥 藤 雄
 市 民 委 員 長 牧 野 増 雄

教 育 委 員 長 橋 本 順
 社 会 福 祉 委 員 長 池 崎 道 男
 会 計 監 査 牧 野 増 雄
 " 星 川 博 道

例 会 記 録

7月12日 メンバースピーチ 福岡陽道L
 演題「盲導犬」
 7月26日 ゲストスピーカー
 慶応義塾大学法学部教授 多田真鋤氏
 演題「現代文明と人間」
 8月9日 ゲストスピーカー
 上智大学教授・経済学博士 小山路男氏
 演題「高齢化社会への対応」
 8月23日 納涼懇親会(於 赤坂維新號)
 9月13日 ゲストスピーカー
 電気通信大学講師 井上越夫氏
 演題「1980年代の子訓」
 9月27日 ゲストスピーカー
 東京建物部長・公認鑑定士 林道三郎氏
 演題「不動産問題あれこれ」
 10月11日 ゲストスピーカー
 日本アメリカ会計学会講師 三義智章氏
 演題「新たな成長をとげる企業経営学の条件づくり」

10月29日 330-A地区第1R合同ガバナー公式訪問
 矢部四郎L(於 東京会館)
 11月8日 ゲストスピーカー 参議院議員 秦野章氏
 演題「総選挙の裏側」
 11月22日 メンバースピーチ 福岡陽道L
 12月13日 ゲストスピーカー
 日本女子大名誉教授 松本武子女史
 演題「国際児童年に我が国の里親制度を思う」
 12月18日 クリスマス家族会 キャンドルサービス
 歌:島田祐子 ピアノ:木村富美
 人形ボードビル:人形劇団ブーク
 1月10日 新年会(於 築地江戸銀別館)
 1月24日 ゲストスピーカー
 参議院議員 野末陳平氏
 演題「1980年代の税金について」
 2月14日 ゲストスピーカー 東海銀行・特別顧問
 (元日銀外国局長) 新井永吉氏
 演題「国際通貨をめぐる諸問題」

- しての作戦」
- 2月26日 ゲストスピーカー 日本水道コンサルタン
ト中央研究所長 小島真男氏
演題「最近の水道水」
- 3月12日 ゲストスピーカー
日本経済新聞社論説委員 鮫島敬治氏
演題「最近の中国について」
- 3月26日 チャーターナイト29周年記念
メンバースピーチ 平賀孝L, 網田邦彦L
- 4月9日 ゲストスピーカー 日本熱帯動植物総合研
究所所長 牧野信司氏
演題「動物学的にみた人相学」

- 4月23日 ゲストスピーカー
上智大学教授 内藤操(内村剛)氏
演題「共産主義者との付き合い方」
- 5月14日 メンバースピーチ 尾上松緑丈(藤間豊L)
- 5月28日 ゲストスピーカー
東京育成園理事長 松島正儀氏
演題「望まれざる子の問題」
- 6月11日 ゲストスピーカー
東京新聞編集委員 最首公司氏
演題「イスラムパワーとオイルマネー」
- 6月25日 委員長報告会

アクティビティ

市民委員会

- 皇居外苑緑の会へ寄付 100,000円
- 東京マ30周年記念事業費へ振替 400,000円

教育委員会

- 高校生奨学資金(12万円 12人) 1,440,000円
- 新入生記念品(辞書2冊) 17,600円
- 卒業生御祝 20,000円

社会福祉委員会

- マニラマヘレンズメーター寄贈 寄贈品
- " 運賃その他 36,250円
- 島田療育園へマットレス寄贈 250,000円
- 献血タオル 120,000円
- " 腕章 18,000円

- " 道路使用許可手数料 3,000円

地区関係

- 身障者全国スポーツ大会へ協力金 9,000円
- L C I F (ライオンズクラブ国際財団) 協力金 19,800円
- Y E 協賛金 90,000円
- 日本ライオンズ30周年記念映画製作費 9,000円
- 東京マ30周年記念事業費へ振替 1,000,000円
- 合計 3,532,650円

- 献血奉仕 2/8 3/29 4/11 5/9 6/6 日比谷映画劇場前
6/3 ジャノメミシン工業
6回 受付 1,076人, 採血 880本, 会員奉仕36名



氷細工・宝船を背に、涼しさ満喫

29年度 1980年7月～1981年6月



(役 員)

会 長 森 岡 一 郎
 前 会 長 西 林 長太郎
 第 一 副 会 長 朝 吹 英 一
 第 二 副 会 長 北 岡 源太郎
 第 三 副 会 長 熊 野 達 夫
 幹 事 盛 郷 重 光
 副 幹 事 一 色 浩
 会 計 歌 田 勝 弘
 副 会 計 丸 山 三 郎
 ライオンテーマー 尾 関 進
 副ライオンテーマー 網 田 邦 彦

テールツイスター 飯 嶋 島 三
 副テールツイスター 杉 浦 重 敏
 理 事(一年間) 星 川 博 道
 " 小宮山 宇 一
 " 守 屋 俊 章
 " 永 井 賢 城
 理 事(二年間) 服 部 二 郎
 " 池 田 幸 雄
 " 長 宗 新 作
 " 中 根 滋

(委 員 長)

会員・出席委員長 有 竹 隆
 会 則・P R・三 崎 矩 光
 情 報 委 員 長
 計画・財務委員長 羽 鳥 藤 雄
 市 民 委 員 長 福 岡 陽 道

教 育 委 員 長 池 崎 道 男
 社会福祉委員長 古 川 正 重
 会 計 監 査 今 井 勇
 " 渥 美 節 夫

例 会 記 録

7月10日 合同委員会
 7月24日 ゲストスピーカー 参議院議員 秦 豊氏
 演題「今後の政局」
 8月14日 ゲストスピーカー 北海道大学医学部第一
 生化学教授 平井秀松氏
 演題「ガン制圧への道」
 8月28日 納涼家族会(ホテルサンルート)
 9月11日 ゲストスピーカー
 Mrs. Pat Murrery Nagano
 演題「アメリカ女性の日本体験」
 9月25日 ゲストスピーカー
 多田食味研究所長 多田鉄之助氏
 演題「味で百現に向う法」
 10月9日 ゲストスピーカー
 高島屋広報担当取締役 石原一子女史
 演題「女性の能力開発」
 10月21日 330-A地区第1R合同ガバナー公式訪問
 小川清司L(於 東京会館)

11月13日 ゲストスピーカー
 上智大学教授 籠山京氏
 演題「個人と国家」
 11月27日 ゲストスピーカー
 旅行開発(株)代表取締役 住田俊一氏
 演題「最近の国際観光事情について」
 12月11日 ゲストスピーカー 在日外国報道協会会長
 南ドイツ新聞・極東特派員 G. ヒルシャー氏
 演題「ドイツは駄目になるか？」
 12月18日 クリスマス家族会 キャンドルサービス
 マリンバポニーブショウ ビンゴ
 1月8日 ゲストスピーカー
 早稲田大学教育学部教授 東清和氏
 演題「せいにする心理と人間関係」
 1月22日 新年会(於 築地江戸銀別館)
 2月12日 ゲストスピーカー
 聖路加看護大学学長 日野原重明氏
 演題「医師に依頼出来る限界ー長寿を目指

ヨナル社長 村松増美氏
 演題「ユーモアと異文化間コミュニケーション」
 4月22日 ゲストスピーカー 日本心理技術センター
 主任研究員 横田成廣氏
 演題「心の四つの窓」
 5月13日 懇談会

5月27日 メンバースピーチ 柿沢弘治L
 演題「政界夏の陣を迎えて」
 6月10日 ゲストスピーカー
 警視庁少年一課 警視 鈴木秀範氏
 演題「青少年の犯罪」
 6月24日 委員長報告会

アクティビティ

30周年記念事業

血液運搬車一台を日本赤十字社へ贈呈 2,000,000円
 花時計を数寄屋橋公園に設置、中央区へ贈呈 3,000,000円

市民委員会

皇居外苑緑の会へ寄付 100,000円

教育委員会

高校生奨学資金贈呈(12万円 12人) 1,440,000円
 新奨学生記念品 辞書 16,800円
 卒業生記念品 20,000円

社会福祉委員会

献血者贈呈タオル 120,000円

日本点字図書館チャリティー映画 30,000円

地区関係

第17回全国身障者スポーツ大会協力金 8,900円
 レオ協賛金 17,800円
 LCIF(ライオンズクラブ国際財団)協力金 20,470円
 YE協賛金 50,000円

合計 6,823,970円

献血奉仕 8/5 11/7 1/6 3/20 4/20 5/15 6/19 日比
 谷映画劇場前 9/11 味の素本社
 6/1 ジャノメマシン工業
 9回 受付1,191人、採血984本、会員奉仕41名



音楽のある例会風景

30年度 1981年7月～1982年6月



(役員)

会 長 朝 吹 英 一
前 会 長 森 岡 一 郎
第 一 副 会 長 三 浦 文 次 郎
第 二 副 会 長 池 崎 道 男
第 三 副 会 長 小 宮 山 宇 一
幹 事 一 色 浩
副 幹 事 羽 鳥 藤 雄
会 計 丸 山 三 郎
副 会 計 平 賀 孝
ライオンテーマー 網 田 邦 彦
副ライオンテーマー 中 沢 彦 七

テールツイスター 杉 浦 重 敏
副テールツイスター 佐 野 孝 雄
理 事(一年間) 服 部 二 郎
" 池 田 幸 雄
" 長 宗 新 作
" 中 根 滋
理 事(二年間) 長 谷 部 照 正
" 長 谷 川 剛
" 三 崎 矩 光
" 盛 郷 重 光

(委員長)

会員・出席委員長 尾 関 進
会 則・P R・細 田 胖
情 報 委 員 長
計画・財務委員長 星 川 博 道
市 民 委 員 長 石 井 正 弘

教 育 委 員 長 村 松 寿
社会福祉委員長 服 部 二 郎
会 計 監 査 渥 美 節 夫
" 守 屋 俊 章

例会記録

7月9日 合同委員会
7月23日 ゲストスピーカー
筑波大学助教授 中川 八洋氏
演題「世界平和と日本の防衛問題」
8月13日 懇談会
8月27日 バンドネオン演奏「アルゼンチンタンゴと
フォルタローレ」 京谷弘司氏、高野太郎氏
9月10日 ゲストスピーカー
東京国立博物館学芸部長 三宅敏之氏
演題「高野山奥之院経塚」
9月24日 懇談会
10月8日 日本ライオンズ30周年記念(於 日本武道館)
10月16日 330-A地区第1R第1Z ガバナー公式訪
問 高橋勝L(於 バレスホテル)
11月12日 ゲストスピーカー
社会評論家 塩田丸男氏
演題「人をどう使うか」
11月26日 ゲストスピーカー 青山学院大学教授 坂

井幸三郎氏(東京葵?)
演題「若者とのコンセンサス作り」
12月10日 懇談会
12月17日 クリスマス家族会
1月14日 ゲストスピーカー
日刊スポーツ新聞社取締役 岡崎文樹氏
演題「スポーツ紙界よもやま話」
1月28日 新年会(於 バレスホテル)
30周年記念写真撮影
2月12日 ゲストスピーカー
(財)余暇開発センター理事長 佐橋滋氏
演題「余暇開発について」
2月25日 ゲストスピーカー 野村証券(株)営業企画
部長 後藤光男氏
演題「今年の証券界の見通し」
3月11日 懇談会
3月25日 30周年記念例会(於 帝国ホテル)
4月8日 ゲストスピーカー サイマルインターナシ

▷ ライフメンバー

※ 浜 本 正 勝 (1952年3月CM)	光 野 健之助 (1955年2月)
※ 井 門 幸 男 (1952年3月CM)	三 崎 友 一 (1956年1月)
※ 大 原 久 之 (1952年3月CM)	熊 野 達 夫 (1956年5月)
豊 田 治 助 (1953年4月大阪C) (1957年3月)	鍛治田 進 (1956年9月)
山 根 実 (1954年10月)	竹 岡 稜 一 (1956年5月大阪C) (1960年5月)
福 岡 陽 道 (1955年1月)	三 崎 矩 光 (1956年1月)
森 卯一郎 (1955年4月)	

▷ 優待会員

樋 口 杲
(1954年7月)

▷ 不在会員

成 田 清 治
(1959年1月)
式 場 聡
(1966年2月)

▷ 会友

城 戸 尚 夫
横 島 忠 三
守 随 乙 作
別 府 英 一
新 堂 喜 作
中 根 麟之助
島 原 健 一
黒 田 斐 雄
木 川 道 彦

物 故 者 (※印はチャーターメンバー)

※ 田 辺 隆 (1953年11月10日)	
※ 立 上 秀 二 (1954年8月2日)	
伊 沢 義 為 (1955年11月2日)	
二 宮 新 (1957年10月11日)	
田 中 茂 (1958年9月5日)	
※ 石 川 欣 一 (1959年8月4日)	
武 内 亀之助 (1965年7月7日)	
式 場 隆三郎 (1965年11月21日)	
与 良 エ (1968年4月11日)	
坂 本 正 (1969年3月3日)	
安 田 金 吾 (1969年5月1日)	
穴 沢 六 郎 (1969年9月10日)	
永 野 護 (1970年1月3日)	
宇 野 庄 治 (1970年2月3日)	
高 橋 貞太郎 (1970年10月1日)	
猿 渡 喜一郎 (1971年9月13日)	
三 井 定 雄 (1972年2月23日)	
秋 尾 栄 (1973年5月2日)	
山 口 利 吉 (1973年7月25日)	
福 岡 勇 (1973年12月22日)	
大 橋 保 男 (1974年1月18日)	
田 中 勉 (1974年2月20日)	

鈴 木 武 (1974年10月29日)	
守 田 俊 郎 (1975年1月16日)	
加 藤 栄 治 (1976年4月19日)	
長谷川 萬 治 (1976年12月6日)	
会友 鈴 木 檣 一 (1977年5月12日)	
迫 水 久 常 (1977年7月25日)	
※ 塩 原 有 (1977年7月30日)	
栗 田 正 夫 (1978年9月16日)	
酒 井 忠 博 (1978年12月9日)	
小笠原 秀 郎 (1979年2月28日)	
中 屋 真 一 (1979年8月28日)	
芦 沢 大 義 (1979年11月8日)	
万 代 政治郎 (1979年11月18日)	
中 沢 彦 七 (1979年11月20日)	
松 本 裕 (1980年1月7日)	
能 沢 正 義 (1980年1月13日)	
※ 石 田 吉 男 (1980年7月10日)	
三 厨 正 (1980年10月14日)	
上 田 常 隆 (1980年10月14日)	
中 山 理 々 (1981年7月27日)	
西 林 長太郎 (1981年9月23日)	
※ 石 関 信 助 (1982年5月14日)	

会 員 名 簿

(入会年月) (※印はチャーターメンバー)

1982年6月末現在

▷正会員

網 田 邦 彦 (1978年7月)	飯 嶋 島 三 (1960年10月) ライフメンバー	牧 野 増 雄 (1965年3月)	清 水 重 亮 (1980年10月)
有 竹 隆 (1965年4月)	池 田 幸 雄 (1955年8月)	丸 山 三 郎 (1977年12月)	塩 瀬 雅 士 (1979年5月)
朝 吹 英 一 (1965年5月)	池 崎 道 男 (1971年2月)	松 浦 弾 (1970年5月)	白 川 国三郎 (1956年7月)
新 雅 夫 (1981年6月)	今 井 勇 (1978年1月)	三 沢 大 介 (1980年4月)	末 政 圭 三 (1980年6月)
渥 美 節 夫 (1973年2月)	石 井 正 弘 (1979年2月)	三 浦 文次郎 (1958年11月新潟C) (1960年3月)	須 賀 栄 一 (1961年4月大阪梅田C) (1972年7月)
藤 間 豊 (1964年10月)	一 色 浩 (1975年1月)	森 岡 一 郎 (1966年2月)	杉 浦 重 敏 (1974年2月)
福 岡 勇之輔 (1974年3月) ライフメンバー	岩 間 英 雄 (1981年6月)	森 末 新 一 (1963年3月)	助 安 真 一 (1980年11月)
※古 川 正 重 (1952年3月CM)	貝 川 宏 夫 (1980年8月)	森 田 安 二 (1967年11月)	武 見 太 郎 (1958年10月)
古 田 稔 (1980年4月)	柿 沢 弘 治 (1980年4月)	守 田 光 伸 (1977年12月)	玉 井 宏 幸 (1981年10月)
長谷部 照 正 (1956年1月) (1964年1月再入会)	金 沢 辰次郎 (1967年1月)	守 屋 俊 章 (1970年11月)	谷 藤 正 三 (1981年2月)
長谷川 剛 (1977年6月)	榎 木 進 (1981年10月)	村 松 寿 (1979年12月) ライフメンバー	巽 良 夫 (1982年5月)
橋 本 順 (1972年10月)	風 間 敏 男 (1978年1月)	永 井 賢 城 (1956年1月)	戸 塚 元一郎 (1981年12月)
羽 鳥 藤 雄 (1975年1月)	岸 田 静 夫 (1981年2月)	長 宗 新 作 (1972年10月)	坪 井 一 郎 (1979年1月)
服 部 二 郎 (1972年8月)	北 岡 源太郎 (1960年10月)	中 根 滋 (1960年10月沼津C) (1973年1月)	殖 栗 文 夫 (1957年4月)
平 賀 孝 (1976年10月) (1980年4月再入会)	小 島 正五郎 (1958年3月)	中 山 富 士 (1981年12月)	浮 田 祐 二 (1963年12月)
平 原 嘉 治 (1972年10月)	小宮山 宇 一 (1969年3月)	中 沢 彦 七 (1979年3月) ライフメンバー	歌 田 勝 弘 (1975年6月)
弘 松 昌 義 (1981年12月)	近 藤 良 雄 (1978年12月)	岡 村 武 (1952年11月)	若 林 法 雄 (1953年4月大阪C) (1963年4月)
星 川 博 道 (1972年10月)	倉 橋 泰 史 (1961年2月)	尾 関 進 (1970年5月)	渡 辺 正 則 (1976年10月)
細 田 胖 (1960年6月)	前 田 幸 蔵 (1963年3月)	佐 野 孝 雄 (1980年8月)	柳 沢 一 正 (1981年4月)
		盛 郷 重 光 (1973年11月)	

吉田英夫 (1961年6月)	末田萬有 (1966年7月)	小野四郎 (1975年6月)
G. Bruner (")	古川義三 (12月)	川辺正夫 (")
田口連三 (")	観世正司 (")	中川馨 (")
藤本正雄 (")	並河栄治郎 (1967年1月)	龍村晋 (")
内藤一男 (7月) 転籍	平野清 (3月)	三輪義明 (7月)
J.J. McSweeney (9月)	小野達郎 (5月)	広谷豊蔵 (")
中川俊思 (")	長井貞義 (6月)	渡辺尚俊 (11月)
永野巖雄 (10月)	鈴木諭一 (")	城戸尚夫 (12月)
高橋威夫 (")	富永誠美 (")	横島忠三 (")
和田康宏 (1962年2月)	勝野基信 (")	鈴木橋一 (1976年1月)
叶善治郎 (")	村山甚一 (9月)	斉藤和夫 (")
今木万寿男 (4月)	石川準吉 (10月)	鹿士源太郎 (6月)
三枝正勝 (7月)	山内英麿 (11月)	斉藤祐義 (")
酒井直衛 (")	井垣薫 (1968年1月)	守随乙作 (")
横山忠雄 (")	小山田泰彦 (4月)	荒木佐七 (")
吉本武一 (1963年2月) 転籍	大堀弘 (")	伊藤雄之助 (9月)
武田透 (")	山田松之助 (6月)	篠木達夫 (10月)
片倉亮平 (")	菊島奕仙 (")	秋元時一郎 (11月)
阪田一夫 (3月) 転籍	武内平三郎 (7月)	原田慶司 (1977年4月) 転籍
門脇良教 (")	三輪田元也 (")	別府英一 (6月)
磯江道夫 (")	山城丞二 (")	新堂喜作 (")
藤見太郎 (6月)	山岡保之助 (10月)	菅野新太郎 (")
小松繁 (")	数佐三郎 (")	富松規行 (")
福田英雄 (")	船橋要 (11月)	平賀孝 (1978年1月) 再入
千田真清 (")	下山田政友 (1971年1月)	八木治郎 (")
慥田恭一郎 (9月) 転籍	C. Boyd (3月)	荒井好民 (6月)
五味弘 (11月) "	山口季次 (6月) 転籍	石黒長治 (")
増茂昌夫 (")	森本一三 (")	瀧浦潤 (")
江口謙吉 (")	三好道矢 (")	林田悦典 (11月)
高橋毅 (")	安藤陣一 (8月)	土井一良 (1979年6月)
松田秀一 (")	小藤永三 (11月)	小泉武 (")
井上寿郎 (1964年1月)	小宮野武雄 (12月)	楠原昌樹 (")
菱刈隆文 (4月) 転籍	松任竹磨 (1972年1月)	金子為雄 (")
橋本三八 (10月) "	秋元時一郎 (3月)	前田正男 (")
八十島親義 (12月)	※福田太郎 (6月)	※中根麟之助 (7月)
越原襄 (1965年1月)	新野晃三 (8月)	島原健一 (1980年4月)
木下茂 (2月)	本間利章 (1973年11月)	黒田斐雄 (6月)
池田正久 (6月)	藤井寛 (12月)	広江欣四郎 (")
池田満 (")	清水八十治 (1974年1月)	持田信夫 (7月)
樽林博太郎 (")	森信夫 (")	友成靖一 (8月)
※広部賢二 (")	小野哲 (2月)	松波鉄治 (1981年1月)
岡田伍佐久 (7月)	小林真賛雄 (")	沢田隆治 (")
小林辰四郎 (10月)	榎山幸夫 (6月)	谷川寛三 (2月) 転籍
下岡忠一 (11月)	藤川敏行 (")	木川道彦 (6月)
林信男 (12月) 転籍	横山祐吉 (")	金子達一 (")
吉益敬一 (1966年1月) "	堀明介 (")	清藤志郎 (")
乙部実 (4月)	三浦専衛 (")	
久邇邦昭 (5月)	細見一郎 (10月)	
小林利助 (6月)	中村栄一 (1975年2月)	

退 会 者

(※印はチャーターメンバー)

古 川 緑 波 (1952年 6月)	前 田 洋 治 (1955年10月)	細 山 武 夫 (1957年 4月) 転籍
※松 島 喜 作 (7月)	横 山 忠 雄 (")	佐 藤 信 助 (5月)
※山 中 清三郎 (")	※今 村 栄 吉 (1956年1月)	齐 見 昌 平 (6月)
※岡 松 成太郎 (8月)	※福 田 太 郎 (")	松 岡 源之真 (8月)
※G. Krakower (9月)	※桜 庭 政 雄 (")	Peter 岡 田 (9月)
※吾 妻 貞 勝 (10月)	J. A. Gracewicz (")	津 田 隆 治 (")
※津 末 京 二 (")	新 美 堅太郎 (2月)	岩 田 義 雄 (10月)
※G. B. Morgulis (11月)	間 中 義 三 (")	桑 原 用二郎 (12月)
※J. S. Sykes (")	P. J. Demetros (3月)	木 村 保 (")
※I. Szpiro (")	高 島 得 之 (6月)	山 岡 重 孝 (")
※S. Haar (")	津久井 七々雄 (")	※日比野 恒 次 (1958年1月)
※牧 野 澄 雄 (")	野 間 海 造 (7月)	尾 和 吉次郎 (2月)
※田 中 弘 之 (12月)	M. Chang (")	原 田 直 治 (6月)
※J. Tropp (")	松 本 敏 夫 (8月) 転籍	小 鴨 鉄 也 (")
※友 成 誠 (")	角 張 真 輔 (10月)	真 殿 益 造 (7月)
※堂 本 拳 次 (")	山 田 忍 三 (11月)	若 菜 三 郎 (8月)
※近 藤 幹 (")	青 木 大 吾 (12月)	中 西 小 一 (9月)
※南 江 治 郎 (")	窪 寺 五 雄 (")	松 本 勝 司 (10月) 転籍
※W. F. Provost (")	江 藤 巖 (1957年1月)	原 春 吉 (11月) "
※L. Sarreal (")	黒 崎 城 平 (")	小 川 道之助 (") "
※清 水 Kazutaka (")	伊 藤 忠 孝 (") 転籍	仲 田 治 (") "
※F. C. D. Rosa (1953年1月)	小 林 利 雄 (") "	笹 村 越 郎 (") "
※石 田 博 (")	笠 井 朝 義 (") "	角 田 義 雄 (12月)
※V. O. Cobarrubias (2月)	勝 田 雄次郎 (") "	秋 根 章 (1959年1月)
※J. B. Bolano (3月)	三 好 万寿雄 (") "	別 所 鎮 雄 (")
※H. N. Borger (")	水 野 弥 三 (") "	笹 村 順 造 (")
※A. Chuh (")	水 谷 巖 (") "	橘 英 雄 (")
※J. Farrell (")	奥 山 清 平 (") "	井 上 宗 大 (") 転籍
※伊集院 郁三郎 (")	※西 郷 徳 男 (") "	山 浦 利器衛 (3月)
※J. O. Rechter (6月)	高 洲 湘二郎 (") "	福 井 近 夫 (9月)
※A. Shvetz (")	竹 崎 宇 一 (") "	本 田 勇 男 (10月)
※R. L. Beddillion (10月)	山 川 隆 雄 (") "	株 木 正 郎 (")
※A. Hatem (")	Keneth 安 田 (2月)	島 崎 千 里 (")
※則 武 東 平 (1954年1月)	池 田 栄 一 (") 転籍	吉 田 正 一 (12月)
※豊 川 良之介 (")	剣 持 勇 (") "	田中治郎左衛門 (")
※津 末 宗 一 (")	岡 田 武 雄 (") "	佐 野 巖 (1960年1月)
安 田 実 (3月)	沢 勝 蔵 (") "	若 林 秀 雄 (")
山 田 四 郎 (")	塚 本 憲 甫 (") "	小 安 哲 史 (")
※J. M. Ferris (")	菅 波 称 事 (3月) "	谷 口 貞 固 (3月)
※藤 沢 伝 (8月)	市 川 惣三郎 (")	小 貫 頼 慶 (") 転籍
宮 田 重 雄 (10月)	安 藤 清太郎 (4月) 転籍	藤 沢 良 雄 (6月) "
W. Nicholas (12月)	福 島 正 雄 (") "	宮 内 俊 之 (") "
M. Houda (1955年 5月)	西 野 政 雄 (") "	神 山 真 (")
半 山 清 人 (7月)	亀 井 多計雄 (") "	平 岡 弘 男 (")
※星 島 二 郎 (10月)	小 谷 虎次郎 (") "	高 橋 武 雄 (8月)
鈴 木 佐 内 (")	工 藤 敏 博 (") "	吉 田 秀太郎 (1961年 3月)

年 度	地 区	ガバナー	地 区 役 員
1970～'71	302 E - 1	上 田 常 隆	幹事 酒井忠博, 会計 前田幸蔵, 副会計 松本裕 視力保護盲人厚生委員長 古川正重 国際関係副委員長 殖栗文夫(国際理事 迫水久常)
1971～'72	"	鈴 木 浩	D G 池田幸雄 (")
1972～'73	"	吉 永 貞 雄	D G 武見太郎, 国際関係・ケア委員長 殖栗文夫
1973～'74	"	加 藤 正 見	国際・ケア委員長 塩原 有(国際理事 上田常隆)
1974～'75	302 E - A	諸 井 益次郎	D G 前田幸蔵 (") ライオン誌日本語版専門委員 細田 胖
1975～'76	"	森 田 浩一郎	長期対策委員 池崎道男, 会計監査 前田幸蔵 日本ライオンズ組織委員 三崎矩光
1976～'77	330 - A	助 川 貞 三	ライオンズ国際財団(L I F)委員長 大原久之
1977～'78	"	大 森 繁	D G 古川正重 青少年交換・レオ・ライオネス委員長 池崎道男 330複合地区会則委員長 三崎矩光
1978～'79	"	嘉 悦 康 人	Z C 池崎道男
1979～'80	"	矢 部 四 郎	
1980～'81	"	小 川 清 司	会員・エクステンション委員長 西林長太郎
1981～'82	"	高 橋 勝	D G 永井賢城

地区関係役員一覧

年 度	地 区	ガ バ ナ ー	地 区 役 員
1953～'54	302	石 川 欣 一	幹事 塩原 有
1954～'55	"	岡 部 五 峯	D G 大原久之
1955～'56	"	進 藤 竹次郎	D G 高橋貞太郎
1956～'57	"	高 橋 貞太郎	幹事 塩原 有, 会計 岡村 武
1957～'58	"	原 勝 己	D G 塩原 有, Z C 浜本正勝, 副幹事 豊田治助
1958～'59	"	中 沢 良 夫	D G 塩原 有, Z C 福岡陽道 ライオン誌編集責任者 豊田治助
1959～'60	302東	森 勇	
1960～'61	"	林 隆 行	D G 福岡陽道
1961～'62	302-E 1	塩 原 有	幹事 山岡保之助, 会計 松本裕, 副幹事 阪田一夫, D M D D 高橋貞太郎 ライオン誌編集責任者 殖栗文夫
1962～'63	"	福 島 正 雄	D G 大原久之, Z C 樋口 杲, 幹事 光野健之助 青少年交換計画委員長 豊田治助 Z C 熊野達夫(関東C)
1963～'64	"	大 原 久 之	D G 迫水久常, 副幹事 酒井忠博 副会計 鹿士源太郎, P R チェアマン 式場隆三郎 青少年交換計画委員長 本間利章 ライオン誌編集責任者 福岡陽道
1964～'65	"	迫 水 久 常	Z C 守随乙作, Z C (5 R) 酒井忠博 幹事 三崎矩光, 会計 本間利章, 副幹事 細田胖
1965～'66	"	佐 藤 三 蔵	D G 三崎矩光, P R 委員長 守田俊郎 ライオン誌編集責任者 福岡陽道
1966～'67	"	中 島 四 郎	D G 石田吉男, D G (7 R) 酒井忠博 国際関係・ケア委員長 大橋保男
1967～'68	"	山 口 信 吾	
1968～'69	"	東久邇 盛 厚 柿 本 保	D G 上田常隆
1969～'70	"	亀 井 正 俊	D G 小野 哲 ライオン誌編集委員 細田 胖

ライオン誌掲出記事一覧

国際的視野に思う	豊田治助	1972年	2月号	47頁
私はライオンズ1年生	上田常隆		3月号	18頁
ビルマ紀行	樋口 杲		6月号	50頁
宮崎博士を偲ぶ	豊田治助		8月号	7頁
宮崎博士を偲ぶ	上田常隆		"	9頁
私の反省	古川正重		11月号	7頁
日本ライオンズ史編纂を	上田常隆		"	18頁
メイク・アップ	藤間 豊	1973年	1月号	56頁
仏教人のブラジル訪問	中山理々		3月号	59頁
ライオニズムと生きがい	武見太郎		4月号	26頁
人類愛を今こそ救ライに	上田常隆		7月号	26頁
夕焼け湖畔の悲願	樋口 杲		"	30頁
平和に寄与する時代	塩原 有		8月号	26頁
オデッサの一夜	須賀 栄一	1974年	6月号	36頁
L福島正雄一心と物と	光野健之助		7月号	52頁
生存と社会	武見太郎		8月号	19頁
緑の奉仕	古川正重		9月号	60頁
日本企業の海外進出	荒井好民		11月号	31頁
感激の「アイ」	上田常隆	1975年	1月号	22頁
つながり	守田俊郎		2月号	42頁
インド救ライへの道	上田常隆		8月号	32頁
寛容の精神と人間の本性	塩原 有		"	35頁
エクステンションと三巻のお経	殖栗文夫		12月号	41頁
釘が抜けた	福岡陽道		"	42頁
青少年に愛と希望を	浮田祐二	1977年	1月号	58頁
菊と人生	浮田祐二		3月号	64頁
78年国際大会東京開催の経緯	迫水久常		4月号	22頁
1978年は目の前だ	上田常隆		"	26頁
健康と出席	古川正重		"	57頁
また会える世界の友に	熊野達夫		5月号	22頁
巨星墜つ	上田常隆		9月号	32頁
君の御霊に誓う	大原久之		10月号	59頁
過去の日本と未来の日本	武見太郎	1979年	7月号	40頁
住んでみたアラブ・余録	澤田隆治		9月号	14頁
インド救ライの史実	豊田治助	1980年	5月号	18頁

美しい歌の指導者を迎えて	樋口 杲	1966年	12月号	17頁
知性と寛容	塩原 有	1967年	2月号	1頁
新宮殿の完成を待つ皇居	樋口 杲		3月号	54頁
畑山君の詩集に寄せて	迫水 久常		5月号	38頁
スズランの便り	酒井 忠博		9月号	49頁
ラバウルの珍客	福岡 陽道	1968年	1月号	48頁
身体障害者対策について	武見 太郎		5月号	44頁
武蔵野の余塵	樋口 杲		"	58頁
みんなで考えよう	塩原 有		9月号	45頁
メキシコシティ・ルポ	樋口 杲		11月号	9頁
雑用の効用	豊田 治助	1969年	2月号	45頁
天皇誕生日を待つ新宮殿	樋口 杲		3月号	60頁
メキシコの旅	持田 信夫		5月号	64頁
奉仕の基礎的考察	塩原 有		7月号	22頁
バレードあれこれ	樋口 杲		9月号	12頁
マニラの日本庭園完成	塩原 有		"	43頁
大会の裏	福岡 陽道		10月号	19頁
終戦時の懐古	樋口 杲		"	41頁
偉人の来訪	福岡 陽道		11月号	47頁
加藤見習士官との奇遇	樋口 杲		12月号	44頁
思い出の松島	樋口 杲	1970年	3月号	49頁
日本ライオンズクラブ誕生の経緯	塩原 有		5月号	17頁
麦秋の開聞岳	迫水 久常		"	53頁
短期間に大きな発展	塩原 有		7月号	12頁
ライオンズ十戒	塩原 有		8月号	11頁
太股出すべからず	上田 常隆		"	59頁
国際性の確立を	迫水 久常		9月号	21頁
匙 織物 犬	福岡 陽道		"	64頁
科学と法律	武見 太郎		12月号	45頁
損して徳をとれ	守田 俊郎	1971年	6月号	45頁
1970～71年度年次報告	上田 常隆		7月号	8頁
ある空しさ	八木 治郎		"	59頁
日本語がない	福岡 陽道		11月号	23頁
ビルマ紀行とライオンズ	樋口 杲		12月号	23頁
私はライオンズ1年生	上田 常隆	1972年	1月号	18頁
ダイレクト・メール	殖 栗文夫		"	23頁
私はライオンズ1年生	上田 常隆		2月号	18頁

北海道の思い出	塩 原 有	1963年 5月号	8頁
マンダレーナを訪ねる	樋 口 杲	"	24頁
盲導犬	福岡 陽 道	"	42頁
国際理事会歓迎で教えられたことども	光 野 健之助	6月号	9頁
長期計画の樹立を	大 原 久 之	7-8月号	6頁
鎌倉の長唄一家	守 随 乙 作	"	7頁
親切は誰も知ってる忘れてる	上 田 常 隆	10月号	1頁
世界の国旗と国歌	式 場 隆三郎	"	14頁
ライオンズの誓い	迫 水 久 常	12月号	1頁
インド救ライ・センターいよいよ着工	高 橋 貞太郎	"	6頁
ココナッツの実	福岡 陽 道	1964年 1月号	13頁
古文書からみた江戸の話 1	樋 口 杲	5月号	32頁
クラブ運営に関する一考察	塩 原 有	6月号	9頁
古文書からみた江戸の話 2	樋 口 杲	"	37頁
5周忌を迎えたL石川の形見	古 川 正 重	7-8月号	1頁
震災直後の新潟	酒 井 忠 博	"	7頁
テールツイスターの1年	福岡 陽 道	"	11頁
複合地区大会を終えて	樋 口 杲	"	18頁
古文書からみた江戸の話 3	樋 口 杲	"	42頁
ライオンズの名称とライオンズ・カラー	酒 井 忠 博	9月号	6頁
爛眼のなごむとき	三 崎 矩 光	"	21頁
固定観念にとらわれない運営を	迫 水 久 常	"	33頁
スガスガしいチャーターナイト	高 橋 貞太郎	1965年 1月号	34頁
海の底さえ汽車は行く	小 野 哲	2月号	8頁
盲導犬に関する諸問題	福岡 陽 道	3月号	10頁
ローマ法王の印象	中 山 理 々	4月号	8頁
ネクタイ今昔	万 代 政治郎	6月号	7頁
10名の奨学生	坂 本 正	"	44頁
テールツイスター・コンテスト	福岡 陽 道	7-8月号	42頁
スズラン給食	福岡 陽 道	9月号	21頁
医療の混迷	武 見 太 郎	"	22頁
曲りかど?	塩 原 有	1966年 2月号	12頁
東京大会へのビジョン	福岡 陽 道	5月号	7頁
渡米雑感	迫 水 久 常	9月号	56頁
東京大会への信頼と期待	迫 水 久 常	10月号	1頁
コンサルアワー	古 川 正 重	"	44頁
15周年に思う	高 橋 貞太郎	12月号	1頁

ライオン誌掲出記事一覧

日本語版のプロローグ	高橋 貞太郎	1958年7～8月号	12頁
ライオンズ ロアの哲学的解釈	石川 欣一	"	21頁
東京の誕生の経緯	塩原 有	"	26頁
アジア大会を迎えるに当って	浜本 正勝	9月号	28頁
思いがけない便り	石川 欣一	"	40頁
「ライオン」邦文版に永続性を	豊田 治助	"	43頁
電波塔と更級日記	樋口 杲	"	46頁
あの岸この岸	福岡 陽道	10月号	49頁
チップ談義	殖栗 文夫	"	51頁
1億円財団の夢	豊田 治助	"	52頁
第2リジョンの現況	塩原 有	12月号	16頁
Ambassador of GoodwillのAppointmentを受けて	高橋 貞太郎	"	46頁
ライオンズクラブの放送について	石川 欣一	1959年 2月号	16頁
地区協同アクティビティについて	高橋 貞太郎	"	17頁
マニラ便り	塩原 有	"	51頁
スターム夫妻東京の2日	福岡 陽道	3月号	17頁
大いなる遺産	石川 えい	10月号	15頁
L石川を偲ぶ	高橋 貞太郎	"	16頁
Lion石川欣一の死を悼む	塩原 有	"	17頁
大会に参加して	塩原 有	12月号	19頁
旅の落穂	加藤 栄治	1960年 9月号	23頁
盲人の少年少女に	式場 隆三郎	10月号	14頁
3万円の幸福	福岡 陽道	12月号	19頁
第一副会長歓迎会を省りみて	高橋 貞太郎	1961年 1月号	22頁
美化運動を起しましょう	豊田 治助	"	23頁
サイゴンでCNに出席して	樋口 杲	"	56頁
ホールインワンの記	門脇 良教	4月号	35頁
読まないとい損します“ライオン”	殖栗 文夫	7-8月号	34頁
スタンプクラブの結成は如何	酒井 忠博	"	58頁
世界年次大会に参加して	塩原 有	9月号	16頁
10周年記念パーティを終えて	三崎 矩光	1962年 4月号	12頁
ライオンズの喜びも悲しみも	大原 久之	"	15頁
身にしみたこと	樋口 杲	5月号	7頁
東京で10周年に消防指令車を贈る	光野 健之助	"	35頁
地区幹事1年間を顧みて	山岡 保之助	10月号	10頁
社会厚生事業団愛児館訪問	秋元 時一郎	11月号	30頁
国際理事会東京開催を明春にひかえて	光野 健之助	12月号	16頁

振り返る奉仕活動の跡

発足の初年度、赤い羽根運動への寄付一万円に苦慮した我々の東京が投げた一石は、振り返る30年間、日本全国に金銭的な奉仕として合計五百五億円余を贈り、労力その他の奉仕は医療の無料、眼球銀行、血液銀行、オギャー献金の発足、ネパール国呼吸器病の予防援助、古切手の現金化援助、盲人の職場開拓の試みとして盲人用電話交換台開発、サリドマイド手術指導者として北欧から権威者を招聘、小児麻痺用鉄の肺を米軍用機の協力を得て緊急輸入して北海道地区整備の端緒を作り、またあるいは沖縄に初めて発生した風疹への緊急対策等々、四十万件に及ぶ足跡を残しました。

その中で目立った我がクラブの例としては……。
◎ 昭和三十一年秋のことでした。緑内障で失明寸前だった青森の一少年の手術費用をめぐってのエピソードです。この不幸な貧しい少年の前に現れた一米人牧師の仲立ちによって、米国リッチランドと我がクラブとの協力関係が生まれ、同クラブからの寄付金百五十が送られてきました。

東京は手術費を支弁し、寄贈の米国資金は「視力保護基金」として、永久に運営される口座となりました。例会場に常備された「リッチランドの壺」には、会員から毎回善意の金が投入され、消えることのない一燈となっております。

同少年は全癒して、職場に復帰しました。このことが地元新聞に報道され、これが契機となって東北各地にライオンズクラブが誕生して、今日に至っております。

◎ 昭和四十年十二月、ハワイ沖で操業中フカに襲われ片腕を失った日本の漁船員が、ハワイのライオンズクラブの好意で加療中との報に接し、東京は直ちに塩釜の奥さんを、入電の二日後、現地に急行させて看護に当たられました。枕元に立った我が妻を信じなかった彼でした。

この善意が日本全国の漁業関係者に深い感銘を与え、九州三角の漁港にクラブが結成されました。

羽田に帰国したこの患者の傷口破裂、応急処置に当たっては、故守田俊郎（阪東三津五郎丈）の献身的な奉仕は忘れてはならないものであります。

◎ 故宮崎松記博士を中心としたインド救ライについては、全日本ライオンズの合同アクティビティおよび一般国民運動にまで発展した大事業となり、国際的にも大きく感動を与えております。

故高橋貞太郎、故上田常隆、豊田治助のご功績は偉大です。東京国際文化会館で豊田、宮崎の四方山話が、宮崎博士夫妻の現地駐留にまで発展し、確実に伸びて、十年目にイ



↑ 操業中フカに襲われた亀谷孝さんを迎えて
写真後方中、守田俊郎

リッチランド基金で視力を回復した市川仁也さん →

インド固有の事業となりました。

◎ 盲導犬協会の発足も注目し値する一つだと存じます。特に福岡陽道は、日本人として初めて米国最古のモリスタウン訓練学校を見学し、帰国後、積極的な啓蒙運動を展開する一方、組織作りに奔走されました。昭和四十二年設立当初、日本にわずか五頭だった盲導犬も今では三百頭をこえ、日本各地で活躍中です。

故郷迫水久常は、長くその会長を務められました。他界された阪東三津五郎も重要な役割を果たされました。

◎ 昭和四十五年、岩手県の僻地貧農藪川村の学童が、毎日のお弁当にも事欠き、栄養失調に基づく視力減退や皮膚病が続出し、ライオンズがその救済活動を始めたことを、当時の毎日新聞社長上田常隆が取り上げられ、社説となりました。たまたま、翌日の閣議で佐藤総理は五億円を学校給食制度拡充強化費として、全日本各地に支出することを決定されたのです。

同地の学童は、感謝のしるしとして毎朝裏山で摘み取ったスズランを、バス会社、国鉄の奉仕リレーで我が東京の例会場に届けられるようになり、メンバーはこれを買取り、代金はまた学校に還元されました。

十年前、20周年を迎えた東京は、二十歳を意識しました。来るべき三十年、四十年、五十年につながる大道への第一歩として、それから五年間に一千万円の基金醸出が提案され、これを確立してその運用にも精進しています。これは、全日本十四万余の会員に一つの示唆を与えたのではないかと、と自負しています。

福岡陽道記



↑スズラン給食の発端、岩手県藪川村で、
右から大原久之と福岡勇



インド救済の募金に立つ上田常隆と松本裕→

事務局の変遷

昭和27年 3月	中央区八重洲 大阪商船ビル フィリピン友の会内（故、村 田省蔵氏）	昭和31年 1月	千代田区丸の内 国際観光会 館 丸紅飯田・海外統轄部内 （福岡陽道）
昭和29年 8月	千代田区有楽町 日活ビル 千代田クリニック内（古川 正重）	昭和31年 7月	千代田区丸の内 岸本ビル 402号室
昭和29年 9月	中央区日本橋 西川ビル 高 橋事務所（故高橋貞太郎）	昭和33年 4月	同上 405号室
昭和30年 8月	中央区東銀座 湯浅ビル 福 田事務所（故福田太郎）	昭和38年 11月	中央区日本橋 日米ビル
		昭和42年 6月	中央区八丁堀 本八重洲ビル 4階
		現在に至る	

後記

目標を掲げて、その何%かに止まることが、世の常とは言え、素材は充分、時間もそこそこでありながら「意」あまつて「行」足らず、まことに当事者として汗顔の至りです。何とか好評を頂いた30周年記念例会に「画龍点睛」をと気負ったのですが……。新しい企画としての「エッセイ」や「座談会」、内容の点はなかなか滋味あふれる点、料理人の腕の悪さを補って余りあるものと言えましょう。

だが活字の小ささ、行間の狭さ等、いささか老ライオン向きとは言えず、明らかに失策でした。でも若いライオンを先頭に前進する当クラブとして、老人指向でない姿勢の表れとしてご寛容を……。もともとこの企ては素人の小生の手に負いかね、全面的に「おんぶ」してくれたライオン誌の藤原君はじめスタッフの面々、および事務局の千葉女史に負うところが極めて大で、ここに厚く感謝をささげ、また印刷製作の段階での星川の会社の方々のなみなみならぬご協力に、満腔の謝意をささげます。もし本誌で「良」いことがあったら、これすべて彼ら、彼女らの功、「悪」いことはすべて小生の責と申し上げて、後記をとどめます。

一九八二・盛夏 細田記

東京ライオンズクラブ三十年史

発行日 1982年8月1日

発行人 東京ライオンズクラブ
30周年記念委員長
岡村 武

編集人 三十年史編集者 細田 胖

印刷所 スミス印刷株式会社